

# 恋愛小説集

小春春斗

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは作者が

「こんな恋愛したかったな」

などといった妄想を短編もしくはシリーズで書いたものを投稿していきます！

処女作なので温かい目で読んでいただけると嬉しいです。

R-115は予備です。

# 目次

5	4	3	2	1	プロログ	4色Factors	後輩&先輩	後輩&先輩	後輩&先輩	後輩&先輩	後輩&先輩
79	63	54	47	37	31		27	16	7	1	

1	Secret Connect Love	最終回	3	2	1	Pure School Love	後編	前編	夏の終わりの祭り	最終回	6
138		135	130	124	120		116	112		104	99



## 後輩&amp;先輩

## 後輩&amp;先輩（1）

——放課後、学校の屋上で私は柵に寄りかかってブーツとしている。先輩が屋上のドアから入ってきて近づいてくるのにも気づいてなきそうなくらいに。案の定、先輩に肩を叩かれてびつくりしている。そんな私を見て先輩が苦笑いしてる。そして、

「あ、あの、先輩。一つだけ訊きたいことがあるんですけど……」

「ん？何を訊きたいんだ？」

「せ、先輩！わ、私のこと——！」

それから先輩が何か喋っていたが私が急に走り出してしまった。

あれ？これって——

……ジリリリリ……カチャ

「うーん。なんか変な夢見た。……ん？今日は目覚まし一回で起きたんだ。珍しいなあ。いつも3回鳴らないと起きないって言うのに。……って、あれ、この時間ならもしかしてもしかすると、先輩と一緒に学校に行けるんじゃないの!?早く準備しないと

！」

私はそう言うのとベッドから出て、グーっと伸びをすると、学校の準備を始める。

突然ですが、私には片思いの相手がいます。幼馴染で一つ年上の先輩です。先輩は私を異性としてより、妹としてしか意識してくれてないだろう。だって、自分がモテないとか私に言ってくるんだよ！しかも、下級生から結構人気あるのも知らないくせに！ここにだって先輩を想っている人はいるっていうのに……。絶々ツ対振り向かせてやるんだから！

さつさと学校に行く準備をして家を出て数分、1人で歩いている先輩を見つけた。声をかけようと思つて駆けようとした。けど、急に声をかけたりして嫌われ…ないよね？先輩だし。でも、見つけたのに挨拶しないのも嫌だしなあ……。うん、ちゃんと挨拶しよー！

「おはようございます、先輩！偶然ですね！」

私は先輩へ駆け寄り、先輩の背中を叩きながら言った。

「お、おはよう。朝早いつてのにテンション高いな」

「もちろんですよ！それに、今日は久しぶりに目覚まし一回で起きたんですよ!?テンション高くないわけじゃないですか！」

私は笑顔でそう言いながら先輩の方を向いた。そしたら先輩はすぐ顔を逸らしてし

まった。そして、先輩はそのまま、

「わかった、わかったって。…にしても、お前がこの時間にいるとか……明日また雨じゃねえよな？」

なんて失礼なことを言って私の頭をわしやわしやしてくる。

「な、何するんですかー！」

「いきなり叩いてきたから仕返しだ」

としばらくじやれている(?)と、

「さてと、こんなことしてたら遅刻するかもしれないし、行くか」

「はいー！」

先輩がさっさと歩き出したので私もその後を追いました。今日は偶々いつもより早く起きて、学校までの間に偶々先輩に会えたんだよね……。もしかしたらこんな機会もうないのかな……。うーん……。悩むくらいなら今しかないよね、うん！

「あ、あの、先輩！」

「どうした、急に」

先輩が立ち止まって振り返るとそう言ってきた。うー、言ったものの怖い。

「あ、あの。き、今日の放課後って、じ、時間ありますか？」

「どうしても今日じゃなきゃ駄目なのか？」

「……はい」

「……わかった。部活あるけどちよつと遅れて行っても大丈夫か。それで、何の用だ？」  
「その時に話します。屋上に来てもらってもいいですか？」

「わかった。できるだけ早くしてくれよ」

「はい！」

「ん。それよりも、そろそろ学校へ進まないかと、予鈴に間に合わないかもしれないぞ。ほら走るぞー！」

「え、嘘！ま、待ってくださいよー！」

先輩と約束できたのは良かったけど、こんなに走るなんてないよー！ちなみに、ちゃんと間に合ったよ。

「おーい、席に着け！終わりのショート始めるぞー！」

先生の声にハツとして時計を見ると、今日の最後の授業の終わりを指していて、えっ、いつの間に授業終わったの?!……びつくりした。って、そういえば、授業中ずつつつと放課後のこと考えてたんだっけ。授業の内容全く覚えてないやと慌てていると、

「おーい、もう教室の鍵しめるから早く出てくれ。もし残るんなら、鍵置いとくぞー！」  
と先生に声をかけられた。



「で、出ます。出ますから、ちよつと待つてくださーい！」

と慌てて言つて帰る準備をしていると、

「今日は一体どうしたんだ？ 授業中もボーツとしてたらしいじゃないか。いつもうるさいお前がどうしたんだ？ 相談くらい乗るぞ？」

と言われてしまった。

「な、何でもありません！ 先生、また明日！」

と先生を無視するように教室を出た。

教室を出ると私は、屋上に来ました。先輩が来るまで色んなことを考えた。どう言つたらいいのかとか、もし付き合えたらどれだけ嬉しいんだろかなとか。でも、それよりも、告白して、フラれて、今の関係が壊れたらどうしよ……なんて考えていると、

「おい、来たぞ〜」

「ヒヤツ！ せ、先輩」

ついに、先輩が来た。

「そんなに驚くことか？ それより、話つて何だ？」

と、先輩から話題を振ってきた。

「えつとですね……」

今更後戻り出来ないよね、さすがに。もう勇氣出すしかないよね。

「おーい、どうしたんだ！」

「……よし！」

「ど、どうした？」

「あ、あの、先輩。1つだけ訊きたいことがあるんですけど……」

「ん？何を訊きたいんだ？」

「先輩！わ、私のこと、どう思ってますか！」

言っちゃったあああああ！ついに言っちゃったよ！

「ど、どうって？」

先輩戸惑っちゃってるし。最後まで言わないと。

「わ、私は、先輩のことが好きです！幼なじみとしてじゃなくて、一人の男の子として先輩が好きです、大好きなんです!!せ、先輩は、一人の女の子として私のことをどう思ってるんですか?!」

「……へ？お前が？俺のことを？好き、だって？」

「そ、そ、そうです！そ、それで、ど、どう、なん、ですか？」

## 後輩&amp;先輩(2)

先輩がキョトンとしたかと思うとそっぽを向いてしまった。そんな先輩へ一歩踏み出して、もう一度訊いてみた。

「ど、どうってな……」

「…… (じーっ)」

私が近づいてさらに戸惑ったような先輩をじーっを見ると、何か決めたようにこちらを見て、

「すまん、全くそんなこと考えたことなかった。ただ、俺にとつて幼馴染で年下だったからなんつうk「急にこんなこと言つていきなり返事欲しいとか厚かましいですよね！すみませんでした！私は用事を思い出したので帰ります！それでは、部活頑張ってください！」おい、ちょ……」

私から言い出したものの、先輩が言痛いことがなんとなくわかってしまつて、最後まで聞くのが嫌になつてその場から走り出してしまいました。

家まで全力で走つて帰つてくると、自分の部屋に駆け込みカバンを投げ捨てると、その勢いのままベッドにダイブしました。そして、

「うわああああ!!なんで逃げ出してんの、私!これじゃ、今朝の夢のまんまじゃん! ああー、もう、これから先輩とどう接したらいいの?!」

なんて足をバタバタ、ゴロゴロ転がってるもんだから、下から、

「うるさい!少しはおとなしくしなさい!」

なんてお母さんから叱られてしまいました。ごめんなさい。

その日の夜、お風呂に入って自分の部屋に戻ってからベッドの上で座りながら、

「そういえば、先輩、あの後なんて言おうとしてたんだろ……。私が思ったことと一緒にかな。気になるなあ……。かと言ってこつちから聞くなんてできないし……」

なんてブツブツ言っているとピコンとメッセージが届いたことを知らせる音がしたので、スマホを見ると、

「誰からだろ……って、先輩から?!なんで、え?」

驚いてばかりもいられないので、とりあえず、内容を確認して見る。

『先輩：なんであのまま逃げたんだ?』

んー、なんとなく怒ってそう?とりあえず返事を

『私：す、すみません

つい反射的に』

『先輩：反射的にねえ……』

『私：えっと、ほんとに用事を思い出しただけで』

『先輩：なら、今度の休み暇だよな？少し付き合え』

……へ？これって、いわゆるデートってやつじゃ……。確かに今度の休みは暇だし、先輩と出かけるなんて、嬉しいに決まってるんだけど、どういうことなんだろう？なんて考えていると、

『先輩：どうすんだ？』

なんて催促が来たので、

『私：行きます！』

『先輩：なら、9時に駅前に集合な』

『私：わかりました』

『先輩：それじゃ、おやすみ』

『私：おやすみなさい』

私の返事で会話が終わった。

「はあく、緊張した。それにしても、先輩とお出かけか……楽しみだなあ」

なんて考えながらボツとベッドに寝転がってスマホの先輩とのトーク画面を眺める。

「なんで、こんなこと言って来たんだろ。もしかして私のこと……。いやいや、全く考

えたことなかったって言ってたし、どうせ妹としか思ってたとかかっていうオチだろうし。でも、だったらなんであんなこと……。うーん、今気にしても仕方ないよね、うん！よし、寝る！」

そう言ってスマホを充電器にぶっ刺して枕元に置くとそのまま目を閉じて襲いかかってくる眠気に身を任せた。

——一方その頃

「なんで俺はこんなこと言ったんだ……」

そう呟いた俺の手にはスマホのトーク画面が映っている。

「はあ、言っちゃまったもんは仕方ないけど、これは、なあ」

俺は今日、幼馴染である後輩から告白された。俺自身、まさか告白されるとは思ってなくてその時思ってたことをそのまま言おうとしたら途中であいつが、

『急にこんなこと言っていていきなり返事欲しいとか厚かましいですよね！すみませんでした！私は用事を思い出したので帰ります！それでは、部活頑張ってください！』

なんて言って逃げ出してしまった。そりゃ、幼馴染で年下だから、妹としか思ってたかっただけ、逃げるのはどうなんだよ、なんて少しイラっとしながらも部活に行った。部活も特に変わったこともなく終わって、家に帰って飯食って風呂入って現在に至るわけだが、

「本当になんでこんなこと言ってるんだよ。これじゃまるで、俺があいつのこと気になってるみたいじゃねえか」

とぼやいてふとあいつのことばかり考えていることに気づいた。というか、気づいてしまった。まるで、なんかじゃなくて……

「俺はあいつのことが好きなんじゃねえかよ」

はあ、気づいてしまったからか変に恥ずかしくなってきた。

「……楽しみだな」

俺はそう言うときスマホを充電器にぶっ刺して机の上に置いて目覚ましをかけると、そのまま目を閉じて襲いかかってくる眠気に身を任せた。

——翌日

「あー！なんで寝坊するのよ！昨日は早く起きたのにー！」

先輩とメツセージで話して寝たのがそこまで遅い時間でもないのに、あつさり寝坊してしまった私は自分に対しての不満を口にしながら、学校まで全力で走っています。

「しかも、今日1限小テストあるのにー！しかも、あの先生、合格点に届かなかつたら再テストまであるのにー！」

昨日はあれのせいで全く勉強できなかったから、朝から学校でちよつとでもしようと思つてたのにこれだし……。なんて思つてるうちに学校に着きました。靴を履き替え

て教室に入って自分の席に着くと、なんとか間に合ったことにホツとして机にグダツと伏せました。

「ふうー、なんとか間に合った……。とりあえず、テスト勉強しない——」

一息ついてすぐに体を起し、カバンから教科書を出してテスト勉強しようとしたところで、

キーンコーンカーンコーン……

「HR始めるから席につけよー」

とHR開始のチャイムがなり、先生が入ってきました。

「それじゃあ、連絡事項からなー。まずは——」

「あー……。今日のテスト終わった……」

先生が教壇で話し始めると同時にボソツと口にして、小テストが簡単なものでありますようにと心から祈りました。

——その日の放課後

「あー、終わった……。追試確定だよ、これ……」

机に突っ伏してグツタリしています。こうなつた理由はもちろん、今日の小テスト。元々そんなに勉強できないからこそ朝からしようと思つたのに、それができなかつたから手応えがあんまりなくて、後日あるであろう追試のことを考えて鬱になっています。



「こんなうだうだしても仕方ないよね！追試になったらその時はその時で！」

過ぎたことだし、もう気にするのはやめようと一人で納得すると、とりあえず教室を出ることにしました。

「今日は家に帰ったら何しようかなー。明日の授業は何も宿題はなかったよね、多分」

と家に帰る道すがらぶつぶつと言つて歩いてます。傍目から見たら変な人ですよ、はい。

(……うん、ないよね！なら、この間買った漫画まだ読んでないし読もうかなー)

確かあの漫画、最近新刊出たばかりだし初めから読もうかな、なんて考えていると、先輩が歩いてるのを見つけました。声かけようかなって考えてると、先輩は家の方ではなく駅の方に向かいました。

「あれ、先輩駅に用事あるのかな……。んー、なんか気になるし暇だし行って見ようかな」

となんとなく先輩に見つからないように後を追いました。

数分後、駅前に到着すると先輩は急にキョロキョロし始めました。

(誰か探してるのかな?)

なんて思った傍から、駅前の時計の前まで行くと、携帯をポケットから取り出してじり出しました。

「これは誰かと待ち合わせしてるよね……。相手は誰なんだろう」

物陰に隠れて呟きました。しばらく様子を見ていると、先輩がいる方に近づいていく女の人を見つけました。その女の人が声をかけると先輩は顔をあげて話し始めました。少ししてそのまま2人は近くのファミレスへ入って行きました。

「先輩が待つてたのって、あの人なのかな？……もしかして彼女、とか？いやいや、ないよね、うん。もし本当に彼女がいるとかだったら、あの時にちゃんと行ってきてた、と思、うし……」

って言いかけてあの日のことを振り返ってみる。

『すまん、全くそんなこと考えたことなかった。ただ、俺にとつて幼馴染で年下だったからなんつうk』『急にこんなこと言つていきなり返事欲しいとか厚かましいですよね！すみませんでした！私は用事を思い出したので帰ります！それでは、部活頑張ってください！』『おい、ちょ……』

「つて！私、途中で逃げてんじゃん！」

振り返った結果、頭を抱えてうずくまった。

「……ハア。今更言つても仕方ないよね。それにしても、先輩たちファミレスに入つて何してるのか気になるなあ……。でも、うーん……」

ため息を吐いて立ち上がつて先輩たちが入ったファミレスを見ながら入るべきかう

んうん悩んで、

「……うん、入るのやめとこ。なんか真面目な話だつたら悪いし。それに、次の休みにでも聞けると思うし！よし、それじゃ、帰ろう！」

私はそのまま回れ右をしてきた道を帰りました。

## 後輩&先輩～3～

——そして、休日

ぴぴぴぴ……

「うーん……。んー、うるさいなあ……」

なんて寝ぼけながらアラームを止めると体を起こして伸びをした。

「んー……。ふう。先輩と出かけるのって今日だったよね。今何時……って、嘘！なんでこんな時間なの?!」

8時50分を示している時計を見て一気に目が覚める。

「服は準備できてるし、カバンも大丈夫。後は……」

と言つて鏡を見る。

「ーっ!!」

声にならない絶叫をしてしまった。そこには、普段よりも寝癖がひどく、ゴワゴワになつている髪の毛の私が鏡に映つていた。

「え、え？なんで？昨日、ドライヤーしてからクシでもちゃんと梳いたのに！もー、これ直してたら絶対に間に合わないじゃん！」

そう言うや否やクシで髪を梳き始める。でも、

「あー、なんでこういう時に限ってクシの通り悪いの！」

悪いことが起こるときに限って悪いことが重なるみたいで、中々寝癖が直らない。

「とりあえず、ある程度マシになったからゴムで結んで……うん、まあ大丈夫だよね！」  
そう言つて鏡から顔を上げ時計を見ると8時55分を示していた。そういえば、家から駅までつてどう頑張つても15分はかかるような……、

「つて、どうやつても遅れるじゃん！ちよつとでも、早くしないと！」

そう言つて昨日準備していた服をさつと着てカバンを持つと、バタバタと急いで玄関まで向かう。そして、

「いってきますー！」

と靴を履きながら言つて、履き終わるとすぐにガチャとドアを開けて家を飛び出した。

「つたく、何やつてんだあいつは。9時過ぎてるし、また寝坊か？」

俺は改札前の柱にもたれかかってスマホを確認しながらぼやいた。普段からよく寝坊してるしなあいつ。まあ、多分今日もそうだととして、そろそろ……

「せ、せん、ばい。お、おまたせ、しました……。ハア、ハア」

ほら、来た。

「いや、これぐらいなら予想してたし、気にしないでいいぞ。それより、ちよつと休むか？」

「ハア、ハア、……スー、ハー……。もう大丈夫です、先輩。改めて、おはようございませぬ。そして、遅れてすみません」

「おう、おはよ。それときつきも言ったけど気にしないでいいって。大丈夫なら行くぞ」  
そう言つて改札の方に歩き出すと、すぐに後ろをついて来た。

「それで先輩、今日はどこに買い物に行くんですか？」

ちよつとホームに来た電車に乗り、並んで座るとそう訊いて来た。

「隣のショッピングモール。ちよつと買いたいものがあつてな、そこでしか買えないんだよ。」

「そうだったんですね。それなら私のお買い物にも付き合ってもらつてもいいですか？ちよつと色々と買わないといけなくて……」

「まあ、それくらいならいいぞ。なんなら荷物多くなるんだつたら持つし」

「ほんとですか?!」

「ああ」

「楽しみだなあ〜」

なんて話しながら目的地まで時間を潰した。

そして数分、隣町のシヨッピングモールに到着しました。

「さて、着いたわけだが、俺の買物物は後でいいからお前のから回るか？」

と先輩が案内板を見ながらそう言ってきました。

「いいんですか!!？」

「いいぞ。それで、どこの店に行きたいんだ？」

「えーつとですね……。新しい本と服を見に行きたいですね。服はウニクロでもいいかなって思ってます。先輩は何を買うつもりだったんですか？」

「俺か？俺は部活で使うもので足りないものをな。んー、先に本屋行くか。それより後はその都度決めればいいだろうし」

「はい！それじゃ、行きましょう！」

「つて、おい、引つ張るな！自分で歩ける！」

私はそう言つて先輩の腕を掴むと引つ張つて目的の本屋に向かい始めました。

本屋について面白そうな本を買うと、私たちはそのままシヨッピングモールをぶらぶらし始めました。服屋では恥ずかしかつたけど私が選んだ服を先輩に見てもらつて可愛いつて言つてもらえた服を買つたり、逆に私が先輩の服を探してみたりしました。そして、

「はあー、楽しかったですね、先輩！」

「まあまあな」

時間は夕方、ショッピングモールを出て帰りの電車に乗っています。

「それにしても、あつという間に帰りの時間になってしまいましたね」

「だな」

「……」

「……」

会話がなくなつてガタン、ゴトンと電車が走る音だけが響いている。しばらくして私たちの最寄り駅に電車が着き、電車から降りて改札を通り、いざ別れようとした時、

「……なあ、まだ時間あるか？」

と先輩から呼び止められた。

「……へ？」

「だから、この後まだ時間あるのかって聞いてるんだよ。それでどうなんだ？」

「あ、は、はい。まだ大丈夫ですけど……」

「なら、ちよつと寄り道していいか？」

「は、はい」

「なら、行くぞ」

そう言う先輩は私の手を握って歩き始めました。



先輩に手を引かれて連れて来られたのは——

「こんな時間に来ちやつて大丈夫なんですか？それに休みだし」

「大丈夫だろ。別に部活で忘れ物を取りに来たって言えば」

「そんなものですかね」

「そんなもんだろ」

そう、学校です。私は何か守衛さんに言われないかヒヤヒヤしてましたが、先輩が言った通り、忘れ物を取りに来たと言うとあっさりと通してくれました。そして、そのまま校舎に入り、靴を履き替えると、

「寄り道って学校だったんですね。何か本当に忘れ物したんですか？」

「んー……忘れ物っちゃ、忘れ物だな。お前の」

「え？どういう——」

「ほら、こつちだ」

「んー、私忘れ物なんてしてたっけ……。つて、あ、待ってくださいよ！」

忘れ物なんてあつたかなと考える私をよそにさっさと歩き出した先輩の後を追いかけます。そして、

「ほら、着いたぞ」

「ここ、ですか？」

「ああ、ここにだ」

私たちは屋上に来ました。んー、私、ここでなんか忘れ物したっけ……。んー、あの日なんか落としていったのかな……。なんて考えながら先輩の方を向くと、

「お前、本当に覚えがないのか？」

「え、ええーと、はい」

何故か先輩が呆れた視線を私に向けているのを見てしまいました。……。そんな目で見られても、本当に心当たりないんですってば、先輩！と心の中で思っ、そのまま言っ  
てしまおうと思っ、口を開こうとすると、

「返事」

「ッ?!」

「告白の返事。お前、この間は途中で逃げただろうが。だからお前の忘れ物」

「えーっと、それは、そのー……」

思わず視線をそらしてしまっ。確かに、そう考えれば私の忘れ物なんだろうけど  
……。

「今日は逃げんなよ？次、返事欲しいって言われても絶対言わねえからな？」

「……先輩」

「ん？」

「この間は途中で逃げちゃってごめんなさい。なんか答え聞くのが怖くなってつい……」

「ついで逃げられる側のことも考えてくれよ」

「本当にごめんなさい！」

そう言つて勢いよく頭を下げました。ちよつとして、

「あははは！怒つてねえつて。ひー、おかしい！」

なんて聞こえてきたので、頭をバツとあげて先輩を見ると、お腹を抱えて笑っていました。

「そんなに笑うつてひどくないですか、先輩！すっごい怒らせたつて思ったのに！」

つて言つて先輩に詰め寄りました。すると、手首を掴まれて先輩の方に引き寄せられたかと思いきや、立ち位置が入れ替わつて私は壁に押し付けられてしまいました。

「え？ちよ、これ」

なんて今起こつた展開に戸惑っていると、

「一回しか言わねえから、ちゃんと聞けよ」

なんて先輩が真剣な顔で言ってくるので、急に顔が熱くなつてしまいました。

「……」

「……。この間も言つた、てか言いかけたけど、俺にとつて幼馴染で年下だったから妹み

たいな存在だと思つてた。この間までは」

「この間、までは？」

先輩の言い方がなんか変でついつい繰り返してしまいました。この間までつて……  
どういうことだろ？

「ああ。そのときにお前のことを一回幼馴染つてこと抜きで女子としてどうなんだろ、つて考えたんだよ。それでな、お前つて寝坊ぐせさえなければ、一緒にいて楽しい奴なんだよな。それに……」

「それに？」

言い淀んでしまう先輩をちよつと期待を込めた瞳で見してみる。先輩は気まずい顔を  
して、

「そ、それにその、か、可愛いし／＼／＼」

なんてそつぽを向いて言うものだから、余計顔が熱くなつてしまいました。

「あ、ありがとう、ございませす／＼／＼」

「……コホン、とにかくだ。お前のことを可愛いくて、一緒にいて楽しい奴とは思つてるんだ、幼馴染抜きで。んで、次にお前が誰かと付き合つたらどうなんだろつて考えたんだ。お前に自覚ないかもしれないけど、他の奴からも結構人気あるみたいだから。それで考えたらなんか嫌だつたんだよ。お前が誰かと付き合うつて考えると」

「……………え？」

え、え？先輩、今なんて言った？私と先輩以外の誰かが付き合うって考えたら嫌って……。え？それって、

「やつと分かつたんだよ」

そう言つて私を抱き寄せると、

「……………あ」

「好きだ。好きなんだ。俺は、お前が」

「……………嘘？ですよ？」

「嘘なんかじゃない。一人の女の子としてお前が好きなんだ」

私は先輩の体を押しして離れて、

「じゃ、じゃあ、この間に一緒に駅前のカフェに行った人つて誰なんですか？」

と聞きました。先輩は一瞬考えると何か納得したような顔になって、

「ああー、見られたのか。あいつはただのクラスメイト。ちなみに、あいつ彼氏もいるし、お前の思っているような関係じゃないぞ？」

「へ？」

「あの日はただ相談に乗ってもらつてただけ。それに、友達も別に呼んでたから二人つきりつてわけじゃなかったし」

「そ、それじゃ」

「そう、お前のはやとちり。聞きたいことはそれだけか？」

「え、えつと……」

「無さそうだし、改めて——」

と言つて手を私に伸ばし、

「俺と付き合つてくれるか？」

「——はい。はいっ！」

その手を取る代わりに先輩に飛びつきました。

「うおー！」

「先輩、先、輩……。嬉しい、です、私。先輩に、好きつて、言ってもらえて……。私、

私も、先輩のことが好き、です。よ、よろしくお願いします、先輩」

「ああ、こつちこそよろしく」

そう言つてちよつと苦しいくらいに抱きしめてくれました。

## 後輩&amp;先輩く4く

「送ってもらって、ありがとうございます、先輩」

「気にすんなよ。付き合ってるんだし」

「は、はい……」

あの後、

『…あの、先輩』

『どうした?』

『こんな風に抱きしめてもらってるのは嬉しいですし、ものすっごいドキドキしますし、離れたくないって思ってるんですけど、あの、その……』

『…これ以上遅くなるのも悪いし、そろそろ帰るか?』

『っ!は、はい!』

といった感じで今に至ります。しばらくして十字路に差し掛かって、

「そーいや、こっちであってるよな?」

と私の家への道を指しました。

「はい！でも、ここままで大丈夫ですよ？先輩あつちですよね？」

最後まで送ってくれようとしているのはすごい嬉しいけど、なんだか申し訳なくて断るのに、自分の家の方向に続く道と別の道を指さしました。

「ん、そうだが気にしなくていいぞ。それより、そっちは門限とか大丈夫なのか？もう7時とかだけど」

「あ、はい、先輩と出かけるって言ったら『楽しんでらっしゃい。帰り遅くても大丈夫だからね』って言われちゃいました」

「……」

先輩が呆れたように頭を横に振りました。そして、

「……おばさんに言っておじさん言いくるめる手伝いしてもらうか」

「なんか言いました？」

「家まで送るって言っただよ。ほら、行くぞ」

「は、はい！」

なんか誤魔化された気もしたけど、さっさと歩いて行ってしまおうのでとりあえず追いかけました。



それから少し歩くと、私の家につきました。

「着いちゃいましたね」

「そうだな。それじゃ、また明日……つと、忘れてたわ」

「?どうしたんですか?」

「明日朝、あそこの交差点で待つてるから、一緒に学校行こうぜ」

「は、はい! いいんですか!？」

「いいから言つてんだよ。寝坊したら置いてくからな」

「うう……。わかりました。それじゃ、先輩、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

そう言つて先輩は来た道の方を向いて歩き出しました。その姿が見えなくなるまで見送つて私も家に入りました。

「ただいまー」

「おかえり。意外と早かったのね。それで、先輩とはどうなったのかな?」

「え、えーつとそれはその……」

「うまくいったんでしょ? そうじゃなきゃ、こんな時間まで帰つてこないってことないだろうし」

「／／もう部屋に戻るから!」

凶星をつかれてしまつて恥ずかしくなつた私はお母さんを無視して部屋に戻りました。

そして、翌日、

「ああー!!寝坊した!先輩と一緒に行く予定なのに!もう行っちゃつたかな?」

案の定、寝坊した私は慌てて家を飛び出して待ち合わせ場所まで走っています。待ち合わせ場所に着くと、先輩はまだいました。

「お、おはよう、ございます」

「やっぱり寝坊したか。残念だが、走らないとHRに間に合わないな。ほら、行くぞ」

「は、はい」

そう言つて先輩と並んで走り出しました。

## 4色Factors

## プロローグ

中1のとき、親が再婚し私——望月咲愛もちづきさえは相手方の連れ子の結兄けい——望月結叶もちづきゆいの義妹になった。

初めて会ったとき、結兄が気になって仕方なかった。お父さん以外の男の人としかも同い年（誕生日はあっちの方が先だけど）とあまり話さなかった私にとってはそれが好奇心からだったのか、はたまた別の何かだったのかはその当時の私に聞かないと分からないけど。とりあえず一緒に暮らしてきた。

そして、高2の春——

「ねえ、結兄、お願いがあるんだけど……」

この一言から物語は動き出した。

高2の春、星条高校の掲示板の前、

「あ、結兄、結兄！また同じクラスだよ！」

「ああ……、そうだな。にしても、高校入ってから連続とは……」

私の横でそう言ったのが義兄の結兄だ。そして、

「お、お前からまた同じクラスなのかよ（笑）普通、兄妹ってクラス分けられるもんじや無かったっけ（笑）」

「そこら辺は決まってるじゃないみたいですよ。私たち4人はまた同じクラスですし」

と話1年のときからの友達の鈴ちゃん——沢井鈴さわいすずと結兄の友達の滝沢くん——  
滝沢正輝たきざわまことが話に混ざってきた。

「これから1年よろしくね、鈴ちゃん!!」

「はい、咲愛ちゃん!」

「よろしくな、正輝」

「おうよ、親友!」

そうして私たちは教室へと向かった。

その日は始業式をして自己紹介だけで学校が終わり、私と結兄は家に帰る前にスパーに寄っていた。

「咲愛、今日の昼飯は弁当買って帰るとして、夕飯は何食べたい?」

「ん〜、唐揚げ……かな」

「咲愛はほんとに唐揚げ好きだよな〜」

と言いながら鶏ムネ肉と付け合せの野菜を買い物カゴに入れていく。

「だって結兄の作る唐揚げ美味しいんだもん！」

「はは、そりやどうも。咲愛は料理以外の家事出来るのに、何でなんだろうな」

「う、うるさい！お弁当先見てくる！」

「あ、ついでに俺の分も頼むわ」

「はい」

そうして、買い物を終えて家に帰ってからお弁当を食べ、明日の休み明けテストの勉強をした。

その夜、

「ふー、ごちそうさまでした。いつもご飯作ってくれてありがとう、結兄」

「いえいえ、こんぐらいどうってことないさ」

「私が料理出来たらいいんだけどな……。それに、他に料理出来る2人は夜遅くまでいないからね。あ、後片付け私しとくから置いていてね」

「それじゃ、お言葉に甘えて。勉強してくるわ」

そう言つて結兄はそのまま部屋へ向かった。

私は洗い物を済ませてお風呂のお湯を入れ始めてからリビングでテレビを見ながらくつろいだ。しばらくして、お風呂にお湯が貯まったので私が入り、お風呂から出ると少ししてから結兄が入る。またリビングでくつろいでいると結兄がリビングに入ってきた……上半身裸のまま。

「つて、な、な、なんで上の服着てないの?!」

「ああ、すまん、すまん」

と言い、キッチンの方へ行くと冷蔵庫を開け、牛乳を出し、コップに入れると一気に全部飲み干した。

「それ、ほんと好きだよね」

呆れ気味に言うと、

「別にいいだろ、咲愛になんか害がある訳でもないし」

と言つて服を着ると私の隣に座つてテレビを見始めた。

「ねえ、結兄、お願いがあるんだけど……」

「お願い?別にいいけど、咲愛にしては珍しいな」

「むう……、別にいいでしょ!それで、内容なんだけど……」

「おう、なんだ?」

「私たちが相談室みたいなのしてみたいんだけど……ダメ、かな?」

「……は？」

私の言ったことが突然過ぎたみたいで目を丸くして聞き返してきた。

「だーかーらー、相談室だよ、相談室。恋愛とか、悩みとか聞いてアドバイスあげるあの相談室！」

「いや、それは分かっているんだが……なんでまたそんなこと……」

「いいじゃん、結兄って色んな人からよく相談されてるんだし、ね？」

「まあ、それもそうだが……」

「お願い！」

「……はあ、うちのクラスだけだぞ？」

と渋々という感じだけどOKしてくれた。

「ありがとう、結兄！後、テスト終わってから始めるつもりだから、結兄がLIMEで言っというてね？」

「なんで俺が……」

「それじゃ、そういう事で！おやすみ、結兄！」

「お、おやすみ」

私はそう言っさささと自分の部屋に入った。

◆ ◆ ◆

咲愛がリビングから出た後、1人残された俺はまだ思考が追いついていなかった。「なんでまたあんな事言い出したんだよ……全く。まあ、咲愛のお願いだし、いいか。我ながら咲愛に甘いもんだな〜」

と1人眩きリビングを後にした。



## 1

翌日のテストが終わわり、

「「ねえ、ねえ、咲愛（結叶）が相談室始めるって本当なの（なのか）?!」」

「「そ、そうだけど……」」

といきなり聞かれた。

「でも、クラスの人に対してだけだよ？」

と私が、

「他のクラスの奴に言わないようにしてくれよ」

と結兄が続けて言うのと、

「「はーい、」」

と皆揃って返事をした。

その日の放課後、

「ふー、まさかあんなに相談持ちかけられるとは思わなかったよ」

「あ、ああ、そうだな。流石に疲れた」

私たちは教室でぐったりとしていた。

「初日だからあんまり来ないと思ってたのに……」

「そうだな。しかも、ほとんどが恋愛相談だったからな」

などと2人して愚痴をこぼしていると、

「よう、咲愛ちゃんに結叶、随分お疲れのようだな」

「大丈夫ですか？」

と鈴ちゃんと滝沢くんが教室に入ってきた。

「2人ともどうしたの？あ、もしかして……」

「ち、違うぞ？オレはお前らをからかいに「よし、なら帰れ」いやいや、そんなあつさり

帰そうとすんよ！」

と結兄と滝沢くんが小競り合いを始めたので私は、

「それで、鈴ちゃんはどうしたの？」

「えっと、相談に来たんですけど……疲れてそうですからまた明日——」大丈夫だよ！鈴ちゃんの相談ならいつでも聞くよ！それでどんな内容なの？」あ、あの、ここじや話しくいのでどこか別の場所でもいいですか？」

「うん！結兄、私は鈴ちゃんの相談受けるから、滝沢くんの方お願いね。終わったら先帰ってくれてもいいから。さ、鈴ちゃん行こっか」

「はいー！」

そう言つて私たちは教室から出て人影の少なそうな場所に向かった。

しばらくして、私たちは近くの喫茶店へ来ていた。

「さて、どんな相談なのかな？」

と私が少しニヤニヤしながら訊いた。

「あのですね……わ、わたし、滝沢くんとお付き合いたいなと考えていまして……」

と鈴ちゃんが顔を赤くして俯いて言った。

「そんなところだろうと思つてたよ。だって、鈴ちゃんって1年の頃から滝沢くんの事好きだったもんね」

「え、え！な、なんで咲愛ちゃんがそれを知ってるんですか?!」

とと言うと鈴ちゃんはさらに顔を赤くしてしまった。

「それで、どんな所を好きになつたの？」

「……1年の2学期ぐらいからですけど、わたしが日直だったり、掃除当番だったりした時に毎回手伝つてくれるようになったんです。今まで話したことも無かつたんですけど、それを機に話す機会が増えていきまして……」

「いつの間にか好きになつてたんだね」

「……はい」

「あれ？でも滝沢くんも多分相談に来たんだよね？」

と言った途端、鈴ちゃんが顔を上げてこちらを真っ直ぐ見てきた。

「そうなんです……。もし、滝沢くんも恋愛についての相談をしているのなら、好きな人がいるってことです……。よね。わたし、どうしたらいいんでしょうか……」

「滝沢くんがどんな相談してるか分からないけど、そんなに簡単に諦めちゃダメだよ！」  
「さ、咲愛ちゃん？」

私が急に強く言ってしまったことに驚いた鈴ちゃんが不思議そうにこちらを見た。

「ご、ごめんね？でも、伝えたくても伝えられない人もいると思うから、ね？私はどうであれ鈴ちゃんの恋が実るように頑張るよ！」

「ありがとうございます、咲愛ちゃん！それにしても、咲愛ちゃんがそう言うなんて驚きました。全く聞かないですけど、咲愛ちゃんにも好きな人が——」

「いないって！」

「……そうですか。咲愛ちゃんも何か悩み事があったら言ってくださいね」

「ありがとう、鈴ちゃん！大好き！」

「わたしですよ、咲愛ちゃん！」

それから店を出た私たちはそれぞれの帰路についた。

◆ ◆ ◆  
咲愛達が教室から出て足音が聞こえなくなつた途端、

「結叶おっつ!! オレは、オレはどうすればいいんだよ!!」

と正輝がいきなり抱きついてきた。

「ちよ、お前離れろ! 暑苦しいわ!」

「ス、スマン」

と言つてすぐ離れた。

「……フウ、それでホントは何を相談してきたんだ?」

「オレ、相談しに来たのはいいものの、マジでヤバイかも……」

「……ヤバイ? 何がだよ……」

正輝は何かに苦しんでいるように俯いたまま言つた。

そして、真剣な顔で俺を見ると、

「オレ、沢井さんの事が好きだ!」

「うん、知ってる」

「反応薄っ!!」

「いや、だつて毎日沢井さんのことみて『オレ、あんな子と付き合いたくない』とか言つてただろ……それに、1年の時なんか事ある事に沢井さんの手伝ひしてただろうが」

「うっ、そ、そうだが……」

「沢井さんもなんか相談しに来てたみたいだな」

と言うと、

「そうなんだよ!!オレ、沢井さんの事が好きなのに、沢井さんも相談しに来たってことは、好きな人がいるかもしれねえって事だろお!!」

「まあ、そうなるわな」

「気の毒だな。好きだつて言つてた人に好きな人がいるかもしれないって分かったんだから——でも、男なら……」

「おい、正輝」

「なんだよ、結叶。傷心のオレをさらに虐めようつてのか?はは、オレつて間接的に沢井さんにフラれたもの——」

「甘つたれるな正輝!!お前の沢井さんへの気持ちはそんなもんじゃやないだろう!!」

「……へ?」

「好きな人に好きな人がいたとしても告白する、それが男つてもんじゃねえのかよ!!」

——俺はこう言つていいんだよな?

「ゆ、結叶……!そう、そうだよな!サンキュ!!オレの友がお前で良かったよ!おかげで告白する決心ついたわ!なんかあつたらまた相談しに来るかもしれねえけど、その時は

また頼むぜ！それじゃ、またな！」

「お、おう！応援してるぜ！」

胸に何か引つかりがあるような気がする。でも、俺はそれが何なのか気づかないまま正輝を送り出した。1人教室に残された俺は、

「…フウ、買い物して帰るか」

と眩き教室を出た。



鈴ちやんと喫茶店で話してからの帰り道、

「はあく……なんであんな事言っちゃったんだろ……。ああ言っちゃったら自分も好きな人います！って宣言してるようなものじゃん。はあ……」

とトボトボと歩いていると、

「おーい、咲愛〜！」

「ゆ、結兄！さ、先に家に帰ってるもんだと思ってた」

「いやー、途中買い物しにスーパー寄ってて。そうだ、今日の晩御飯はうどんだけどいか？」

「うん！」

そう言っただけで私たちは揃って家に帰った。

晩御飯を食べ終えて後片付けをしていると、

「相談どうだったんだ？」

と結兄が尋ねてきた。

「えつとね、私たち、去年も同じクラスだったでしょ？元々気になってたらしいんだけど、滝沢くんが鈴ちゃんを手伝うようになってから話す機会が増えていつの間にか好きになってたんだって。それで滝沢くんに告白したいけど、どうしようって内容だったよ」

「……は？」

「今日、滝沢くんも何か相談に来てたでしょ？それでどうしたらいいんだろってさ。結兄はどんな相談されたの？」

「ちよ、ちよつと待て、それホントか？」

「そうだけど……それがどうかしたの？」

「いや、正輝は沢井さんが好きで告白したいって相談に来たんだよ！」

「……え？え、ちよつと、え？なに、2人は両想いなのにそれを知らずに相談しに来て、お互いに誰か好きな人がいるって勘違いしちゃってるってことなの？」

「そうなるな、うん」



「……えー……!!」

状況を理解した私は、夜だということにも関わらず叫んでしまっていた。結兄は、

「シィーッ！夜だから、な？ちよつとは考えろよ？」

「ご、ごめん……」

「それにしても、凄く偶然だよな」

「そうだよな。……これからどうしよつか……。2人に両思いだからさっさと付き合っ  
ちやえつて言うのは……」

「いや、流石に無理があるだろ。でも、どうにかしてやりたいよな……」

「だよね」

と言つて2人揃つて頭を抱えた。そして、少し落ち着いてからふと疑問に思ったこと  
を聞いてみた。

「それにしても、結兄がこんなに熱心になるなんて珍しいもんだよね」

「そ、そんなことはねえ……ぞ？そう言う咲愛だつてそこそこはりきつてるじゃねえか」

「ん……、そうなのかな？私はいつも通りのつもりなんだけど……」

「そ、そう……か。ま、まあとりあえず2人の事きちんとしてやらないとな！」

「そうだね！……あ、お風呂にお湯溜まったみたいだし、先入つてくるね」

「おー」

私はそう言ってお風呂へ向かった。そして、お風呂から出るとすぐに部屋へ戻って寝た。

翌日の放課後、帰りの支度をしていると、

「すすずちゃん！一緒に帰ろ？」

と咲愛ちゃんが声を掛けてきた。

「はい！ちよつと待ってくださいいね」

「うん！……ねえねえ、結兄も一緒に帰る？」

「ああ、うん、いいぞ。正輝も一緒にどうだ？」

「オウ！帰りどつか寄るか？」

どうやら、望月くんと滝沢くんも一緒に帰るみたいです。

「ん、私も結兄も大丈夫だけど、鈴ちゃんはどうする？」

「わ、わたしも今日は特に何も無いので大丈夫ですよ」

と言ってカバンを持って立ち上がるのを見た咲愛ちゃんが、

「よし、それじゃ、行こっか」

「はい！（オウ！）」

こうしてわたし達は4人で寄り道をして帰ることになった。

いつもは私1人で歩いている通学路も咲愛ちゃん、望月くん、そして片想いの相手の滝沢くんと一緒にだとなんだか少し違うように思ってしまった。しばらく歩いていると、

「あ、クレープの屋台だ！みんなで食べようよ！」

今日はいつも通る広場にクレープのワゴンが来ているのを咲愛ちゃんが見つけて食べに寄ろうと言いました。

「別にいいぜ、な？正輝」

「オウ！」

「鈴ちゃんは？」

「いいですよ。クレープなんて久しぶりですから」

と言うことで、寄ることになりました。それぞれ好きなものを買って、近くのベンチで座って食べました。食べ終わりゴミをくず箱に捨ててから移動してしばらく歩くと、

「あ、私と結兄はこっちの道だからここまでだね。鈴ちゃんは帰りどっちなの？」

「そうだな。正輝は帰りどっちだったっけ？」

「わたしはこっちですね」

「オレ？オレはこっちだな」

「え……」

とわたしと滝沢くんが指したのは同じ方向でした。ビックリして滝沢くんの方を向くと、ちょうど滝沢くんもこちらを向いていました。

「そ、そうだったんだ。アハハ……」

「は、はい／＼／＼」

となんだか照れくさくなつてしまい顔を背けてしまいました。そうしていると咲愛ちゃんが、

「それなら、滝沢くんが鈴ちゃん途中まで送つてあげるのはどう？」

「あ、ああ。そ、そうだよな、うん。じ、じゃ、途中まで送つてくよ、沢井さん」

「あ、ありがとうございます、た、滝沢くん。そ、それでは、また明日、咲愛ちゃん、望月くん」

「うん！また明日ね、2人とも」

「また明日な」

「じゃあな、結叶、咲愛ちゃん」

そう言つて咲愛ちゃんと望月くん、わたしと滝沢くんそれぞれの帰路に着いた。

△ △ △

パツと見はいつも通りにしてるつもりだけど、内心は結構緊張していたりする！なんせ、

「か、帰り道一緒なんて、き、奇遇だよな〜」

「そ、そうですね。奇遇ですね」

片想いの相手の沢井さんと一緒に帰ってるからさ！それにしても…：会話が弾まない！！そもそも、誰かと一緒に帰ること自体ほとんどない経験ないし、ましてや好きな人となんてたまつたもんじゃない！

お互いの距離がぎこちなく開いたまま橋の上を歩いている。何か話題になりそうな事は…：と周りをキョロキョロしながら歩いていると夕日が入ってきた。そこで、  
「この橋からさ、夕日がキレイに見えるよな！」

と話を振ってみた。すると、

「え？…：あ、本当ですね。この橋は通る事がないんですけど、こんなふうには夕日が見られるんですね。知らなかったです」

「そ、そうだったんだ。実はここ、オレの秘密の夕日の絶景スポットなんだ！」

そう言って沢井さんの方を向くと、橋の手すりの近くまで行つて夕日を見ている横顔が見えた。風が吹き、彼女の髪がなびく。柔らかな香りが少し涼しい風に乗ってこちらまで来る。夕方になって少し寒いはずなのに、オレは体の芯から何故か熱くなつてい

る。沢井さんはオレの想いなんて…。でも、それでも…と考えると、「あの…なんでわたしに教えてくれたんですか？」

と夕日を見たまま訊いてきた。

「え、え〜つと、それは…その…と、友達には教えてるんだ！…この事、結叶にも言ったことあるし！」

と言つてすぐに後悔した。咄嗟に口から出た言葉だったが、まるで沢井さんは友達だと言つてるような言葉だった。溢れてきた冷や汗はオレがさらに緊張していると告げている。沢井さんは俯くと、

「……そ、そう、ですか……わたしは友達、なんですね。も、もうここまで大丈夫です。それではまた明日、滝沢くん」

そう言つて来た道の方を向いてまくしたてるように行つてしまった。そんな沢井さんを見て慌てて、

「待って！」

と言つた。でも、振り返ることなくそのまま走つて行つてしまった。

「くそつ、こんなつもりじゃ……」

と言葉がこぼれ落ちた。



滝沢くんにとってわたしは友達でしかないという雰囲気と言葉を聞いたわたしは、  
「……そ、そう、ですか……わたしは友達、なんですね。も、もうここまで大丈夫です。  
それではまた明日、滝沢くん」

と言つて来た道の方を向いてまくしたてるように言つてしまった。そして彼が、  
「待つて！」

と言つてきた。その声に振り返りかけました。でも、こんな、今にも涙が溢れだしそ  
うな顔を見られたくなくてそのまま走り去りました。そのまま家まで走つて帰り、すぐ  
部屋に入ると、制服のままベッドへ倒れこみました。そして、

「う、うう……」

家の誰にも聞かれないように枕に顔を押し付けたまま泣いてしまいました。

泣き止んで時計を見てみると、既に12時を回っていました。ご飯も食べる気になれ  
無かったのでとりあえずお風呂に入ることにしました。お風呂から戻ってきてスマホ  
を見てみると、

『今日はどうだった？』

と咲愛ちゃんからメッセージが届いていた。それを見てまた涙が出そうになったが、



どうにかして堪えると、

『明日の朝、相談したいことがありますので、教室にいつもより早めに来てくれませんか？』

とメッセージを送った。すぐ既読になり、

『わかった』

と返事が来た。

『ありがとうございます』

と返事するとすぐ携帯の電源を切り、眠りに落ちていった。

△ △ △

「よお、正輝。どうしたんだ、こんな朝早くに呼び出してくるとか」

翌日、オレは朝早くに結叶を校舎裏へ呼び出していた。

「結叶、聞いてくれーじ、実は……」

昨日の事は自分が悪いってのはわかっているんだが、一人でウジウジ考えてたらどうにもならなくなつたんだよな……そこで、結叶に簡単に事情を話して何かアドバイスを貰えないかと思っていたのだが……

「お前、馬鹿だろ。そりゃ、お前が悪いわ」

返ってきたのは辛辣な言葉だった。

「そんぐらい分かっている……分かってんだよ……」

「どうどう、今更焦つてもなんも変わんねえだろ」

「……それもそう……だな。ハア……、恋つて難しいんだな……」

……言葉一つ間違えただけでこんなにも複雑な気持ちになるとは……

「なに、ふ抜けたツラしてんだよ、正輝。まさか、諦めるとか言わねえだろうな？」

「まさか、そんな訳ねえだろ！」

「なら、しつかりしろ！お前なら、大丈夫だから、な？」

「お、おう。サンキュな、結叶！」

淡々と話す結叶がとても大人っぽく見えてしまい少し悔しかったがそれが今はありがたかった。

「……オレ、もうちよい頑張ってみるわ」

「その意気だぞ」

と背中を叩かれた。まあ、こうして相談に乗ってくれてる友人っていうのはやっぱりいいもんだな！

◆ ◆ ◆

昨日の夜、鈴ちゃんに滝沢くんと何か進展があったかどうか聞こうかとメッセージを送ると、明日相談があるから朝早くに教室に来て欲しいと言われた。これは何かあったと思わずぐに了解と伝えた。そして、今日は普段よりかなり早くに教室へと向かった。そして、鈴ちゃんの姿を見つけると、

「昨日、あれから何があったの」

と前振りナシに訊いた。

■ ■ ■

わたしが教室で待っているとパタパタと廊下から聞こえてきました。そして、教室に咲愛ちゃんが入ってくると、

「昨日、あれから何があったの」

と訊いてきました。

「実は……」

わたしは昨日咲愛ちゃん達と別れてから何があったのか全部話しました。

「咲愛ちゃん……わたしはどうしたらいいんでしょうか……。このまま滝沢くんと友達でいないといけないのでしょうか……」

と言つてしまいました。そんなわたしを見て、咲愛ちゃんが、

「……ねえ、鈴ちゃん」

と話しかけてきました。



私は鈴ちゃんの話聞いて滝沢くんの意気地無しと思つてしまった。照れ隠しだからといって友達にしか教えてないとかはダメでしょ、うん。こっちは2人が両想いつて知つてる訳で、この事を今鈴ちゃんに言つちやうと余計話がややこしくなるんだろうな……とりあえず、励まさないと

「……ねえ、鈴ちゃん」

「な、なんですか?」

「鈴ちゃんの気持ちってそんなものなの? 友達にしか教えてないって言われただけで揺らいじゃうものなの?」

「ち、違います!」

「なら、そんな簡単に諦めちゃダメだよ」

「で、でも……」

と鈴ちゃんは中々うんと言ってくれない。そんな鈴ちゃんを見て、

「……昔、友達に聞いた話だけどちよつといいかな?」

と言ってしまった。鈴ちゃんは少しポカンとしていたけど、

「は、はい」

と言った。……前に勢いで言っちゃった時は誤魔化せた——はずだけど、今回は誤魔化せない……よね? でも、そのうち鈴ちゃんには言おうと決めてたからいいかと思ひ深呼吸をした。

「その友達ってね、親が再婚して、お兄ちゃんが出来たらいいんだ。初めてあった時、お兄ちゃんに一目惚れしちやっただけけど、その事に気付けずにそのまま何年も一緒に過ごしてたんだって。そしてある日、そのお兄ちゃんの事が好きだって気付いちやっただって。でも、今の関係を壊してしまいうで何も出来なかつたみたい。気付いてか

らはお兄ちゃんが普段通りであることが苦しくて、辛くて、悲しくて、どうしようもなかったんだって」

と言いつつ鈴ちゃんの方を見ると、とてもビックリした顔でこちらを見ていた。……これはバレたね、うん。

「だからね、鈴ちゃんは頑張つて。絶対に大丈夫だから。私はそう信じてるよ」と付け足して一息つくつと、

「あ、ありがとうございます、咲愛ちゃん……あの、1つ訊いてもいいですか？」と尋ねてきた。

「ん、なんでも」

「その友達って……咲愛ちゃん、の事……ですよね？」

「……そうだよ、流石に気付いちやうよね。出来れば誰にも言わないでね？」

「もちろんですよ……あの、もしかして相談室を始めたのも——」

「そうだよ。自分の気持ちを確かめたかったんだ。相談ついてもほとんど恋愛相談だったからね。もう気付けたから、鈴ちゃんの相談が最後。……身勝手だよね、こんなので」

「そんなことないですよ、咲愛ちゃん。相談に乗ってくれて嬉しかったとみんな思っているはずですよ。ですから、いいんです」

「……ありがとう、鈴ちゃん」

私達はそう言つて笑い合つた。しばらくして、私は元々考えてた計画の1つを実行しようと思ひ鈴ちゃんに相談してみた所、

「え、えつと、そんなことをして本当に大丈夫なんでしょうか……」

「うん、大丈夫だよ♪」

「なら、いいですよ！あ、でも服が……」

「明日、2人で服買いに行こ？」

「はい！ふふ、今からとてもドキドキします／＼／＼」

といい返事を貰えた。そして、生徒がチラホラと登校してくるのが見えてきたので、

「それじゃ、また詳しい事は連絡するね！」

「はい！」

「あ、それと夕日の事、結兄は聞いたこと無いはずだよ。そもそも、そつち方面に行かないからね」

「……え？どういう——」

「それは本人に聞いてね♪」

と言つて私はお花を摘みに向かった。

その日の夕方、家でゆっくりしていると、

「なあ咲愛、明後日のあの2人のデート(?) 上手くいくと思うか?」  
と結兄が尋ねてきた。

「ん〜……わかんない、かな?」

「わかんないってお前な……」

「だってそうでしょ? 全部あの2人次第なんだからさ」

「それもそうだが……」

「そんな心配なら、後つけながら見守ればいいんじゃないの?」

「いやいや、それはちよつと……な?」

「ふーん、まあいいや。私、明日鈴ちゃんと買い物に出かけるからお昼作らなくていいよ  
〜」

「ん、わかった」

「うん。私、もう寝るね? おやすみ、結兄」

「ああ、おやすみ、咲愛」

私はそう言って立ち上がってドアの前まで行って立ち止まると、

「あ、そうそう、明後日の予定空けといてね」

「……は? ちよ、ま、待て——」



と結兄が言っている途中でドアを閉めて今日の放課後を思い返しながら自分の部屋に戻った。

——今日の放課後

「ねえねえ、結兄」

「ん？どうしたんだ、咲愛」

「鈴ちゃんと滝沢くんの2人だけでお出掛けさせようと思ってるんだけど、どう思う？」

「はあ?!」

私の言った事に対し結兄はとてもビックリしたらしくバツとこつちを見てきた。

「うるさいよ、結兄」

「す、すまん。でも、なんでまたそんなことさせようと思ったんだ？あの2人ってケンカ？中だつたんだろ？」

「わかつてるよ？でも、仲直りしないとダメだし、どっちも奥手っぽいから、強制的に2人だけで出かせさせたらなんとかなるんじゃないかと」

「なるほど……な。まあ、咲愛がそう言うんならなんとかなるん……だよな？」

「……多分？鈴ちゃんにはこの事も言うてるし、滝沢君を誘うようにも伝えたから、後は滝沢くん次第……あ、鈴ちゃん、いいって言ってもらえたみたい」

話してる途中で鈴ちゃんから報告のLIMEが来た。

「そうか。明後日どうなるんだろうな」

「そうだね！」

などと言いながら私達は家へ帰った。

そして、部屋に戻った私は部屋に入ってベッドに倒れ込むと、

「本当に明後日どうなっちゃうんだろ……」

と呟いて色々考えながらぼーっとしていると、いつの間にか眠りについていた。

## 4

今、わたしと咲愛ちゃんはデパートへ買い物に来ています。

「ねえねえ、鈴ちゃん」

「どうしたんですか、咲愛ちゃん？」

「この服なんてどうかな？」

とわたしの前に青色のブラウス、水色のボーダーのTシャツ、ベージュのスカートを差し出して来ました。わたしはそれらを受け取って試着室に入りました。着替え終わって出たのですが、咲愛ちゃんが、

「うん、すごく似合ってるよ！滝沢くんも可愛くて言葉が出てこないんじゃないかなっていうくらいだよ！」

と捲し立てるように褒めてくれたのですがわたしは、

「も、もう、褒めすぎですよ〃〃〃」

恥ずかしくなってしまう、さっと試着室に戻って着替えました。その後、咲愛ちゃんの服も選ぼうとしたのですが、家にあるので大丈夫だから外で待ってるねと言って店から出てしまいました。わたしは仕方なく支払いを済ませて店から出ました。

それからお昼を食べたり、服以外の店も回ったりしました。

そして——お出掛けの当日です！楽しみで待ち合わせより20分ぐらい早く集合場所に到着してしまいました。が、そこには滝沢くんの姿がありました。初めてみる私服姿に見とれてしまっていると、滝沢くんがわたしに気付いたようでこちらに向かって手を振っています。わたしは駆け寄ると、

「おはようございます、滝沢くん」

「お、おはよう、沢井さ——」

「早めに来たつもりなのですが、って、どうかしました？」

滝沢くんがわたしの姿を見てすぐに顔を背けてしまったので聞いてみたのですが、

「い、いや、なんでもないよ？うん。ただ、沢井さんの私服がカワイイなって……あ」

「っ！／＼あ、ありがとうございます。滝沢くんもその……か、カッコイイ、です」

「あ、ありがとう／＼」

お互いに照れ笑いをしながらそこに居るとどんどん人が増えて来たので、

「そ、そろそろ行きませんか？」

「そ、そうだな！先にご飯の方がいいと思うんだけど、いいかな？」

「っ！は、はい！」

そう言って滝沢くんがわたしの手を握って歩き出しました。わたしは突然のことにびっくりしましたが、それ以上に恥ずかしかったり、嬉しかったりで、手を握り返すと、滝沢くんの隣まで小走りで行って並んで歩き始めました。



鈴ちゃん達が移動を物陰から確認すると、

「さて、鈴ちゃん達が移動し始めたし、私たちも行こっか!」

「あ、あの……。さ、咲愛さん?」

「?」結兄、いきなり敬語なんか使って……。どうしちやったの?」

「どうしちやったの?」じゃねえよ! いきなり出掛けるから着いて来てって言われて来たら、尾行とか一体なんだよ!」

と、結兄が詰め寄ってきた。

「び、尾行とかじゃない、よ?」ただ、親友として、相談された側として2人の進展の様子をバレないように見守る権利くらいあったっていいでしょ?」

「ま、まあ、言いたいことはわかるが……。って、それが尾行だろ!」

「いいじゃん、バレなきゃ大丈夫だって……。それに結兄と一緒に遊べるしね」

「ん？後半聞こえなかったけど、なんか言ったか？」

「な、何にも言っていないよ？あ！あの2人、お昼食へに行くみたいだよ！追いかけるなよ！」

「お、おい、咲愛！急に引つ張るなよ！」

私はどきどきに紛れて結兄の手を掴んで引つ張ると、彼らの入った店へと駆け足で追いかけた。



ご飯を食べ終えたわたし達は今日の目的地である遊園地に来ました。やっぱり、休日ということもあって人が多いです。この中には当然カップルもいるわけで……周りに見ればわたし達もそうなんでしょうか？

「入場券買いにくけど、フリーパスにする？」

と滝沢くんが声をかけてきたので一旦考えることをやめて、

「あ、はい、それでいいですよ」

と返事をしました。しばらくチケットを買うための列に並んでいるとわたしたちの番になりました。

「こんにちは！フリーパス2人分で！」

「かしこまりました。現在当遊園地では『春が来た！春のカップル特別割キャンペーン』を行なっております。カップルで来られたと確認できた方のフリーパスの割引をさせていただきますのでございます。失礼ですが、お2人はカップルでしょうか？」

と、受付の人が訊いてきたのでわたし達はびっくりして受付の上にある料金表を確認しました。そこには受付の人が言っていた通りのキャンペーンが書いてありました。わたしが違いますと言おうとすると、

「はい、そうですー！」

と滝沢くんがわたしの手を握って言いました。びっくりして滝沢くんの方を見るとこっちを見ていて目があつてしまったのでパツと顔をそらしてしまいました。受付の人はそんなわたし達を見て、

「ふふ、初々しい彼女さんですね。フリーパスカップル割学生2枚で2000円です」

「それじゃ、ちょうど2000円で」

「2000円ちょうどいただきます。……こちらがパスになりますので、失くさないようにしてください」

「わかりました。それじゃ、行こっか」

と滝沢くんはパスを受け取ってわたしの手を引いて歩き出しました。わたしはしば

らく引つ張られるままでしたが、

「あ、あの、滝沢くん、お、お金は——」

「いいよ、お金は。今日、沢井さんとこうやって遊べるの、オレすっげー嬉しいんだ!!だから、ちよつとぐらいカツコつけさせてくれよ」

「わ、わかりました。ありがとうございます。……やつぱり、わたし滝沢くんが——」

「よし!!遊園地といったらやつぱりジェットコースターだよな!つて、沢井さんは絶叫系大丈夫?」

「は、はい、大丈夫です! (聞かれてなくてよかったです)」

「そーいや、結叶つて実は絶叫系無理なんだつて!意外じゃね?」

「ふふ。そうだったんですね、すごく意外です」

そうしてわたし達は何気ないことを話しながら遊園地に入つて行きました。



その頃——

「ほら、うだうだ言つてないで行くよ、結兄!」

私達も鈴ちゃん達の後を追つて遊園地に入つていた。結兄は横で



「まさかあいつらと同じだけ金がなくなっていくとか、ありえねえだろ……」  
と財布の中を覗きこんでぼやいていた。

「そりゃ、びこ……じゃなくて見守るためなんだから、同じくらいはなくなるかもしれないでしょ！あ、鈴ちゃん達ジエツトコースター行くみたいだし、そこらへんで待つとこ？」

「咲、咲愛、俺がまだジエツトコースターに乗れないと思ってるのか？」

「あ、大丈夫になったの？なら、私乗りたいし行こっか」

「ごめんなさい、嘘です、嘘つきました、ジエツトコースター無理です」

「はあ、だと思ったよ。ほら、そのベンチで座つとこ」

この通り、結兄はジエツトコースターというより絶叫系が全部ダメなのだ。……

まあ、そういうところも可愛いと思うんだけどね。

私はそんなことを思いながらベンチに座って結兄と他愛もない話をして待った。



「怖かったです、楽しかったですね」

「ヤベー、マジで怖かった（汗。もうちよつとカッコつけようと思ってたのに」

「横で乗ってくれただけでも私は嬉しかったですよ？ふふつ、で、でもあそこまで滝沢くんが叫ぶなんて、ふふつ」

「ちよ、笑いすぎだつて！」

「す、すみません、ふふつ」

しばらくの間滝沢くんの怖がり方を思い出してしまつて笑つてしまいました。

笑いが治つてきてからわたしは、

「……ふう。次、お化け屋敷に行きませんか？」

「よし来い！お化け屋敷なんて怖くないぜ！き、行こう！」

「はい！」

と言つて、お化け屋敷に向かい始めました。



私は、お化け屋敷へ向かう鈴ちゃん達を見て、

「次はお化け屋敷なんだ……近くのベンチで待つてたいな」

お化けが苦手な私はそう言った。そんな私を見て結兄は、

「ずっと見ては待つてるんじゃない、楽しくないだろ？折角遊園地に来たんだ、俺達に乗れる

ものでも乗ろうぜ？」

「それもそうだね、うん。それじゃ、コーヒーカップにでも行こー！」

そう言つて私達はお化け屋敷の近くにあつたコーヒーカップへ向かつた。



「ゼエ……ゼエ……、こ、ここのお化け屋敷怖すぎかよ。完全にナメてた……」

「ハア……ハア……、そ、そうですね。……（そういえば、滝沢くんの声がいつもより近くから聞こえるような）」

「あ、あのお、沢井さん？そ、その、う、腕に当たつて……」

「え？——ツ！」

さつきから何となく近くから滝沢くんの声が聞こえると思つてたのですが、なんと腕に抱きついてしまつていたのです。

「す、すみません、迷惑でしたよね」

と言つて滝沢くんの腕から離れました。……恥ずかしかつたですけど、もう少しさつきの体勢でいたかつた……つて何を考へてるんでしょう。と内心慌てていると、

「い、いや、迷惑というより、嬉しかつたというかもうちよつとさつきのままでいたかつ

たというか……って、あ」

「~~~~~つ!!!」

「ちよ、さ、沢井さん?!ま、待って!」

わたしは恥ずかしくなってしまう、滝沢くんから逃げるように走り出してしまいました。

数分ぐらい走ったでしょうか、滝沢くんと完全に逸れてしまいました。

「ここはどこなんでしょうか。近くに地図もありませんし……どうしましょう」と困っていると、

「あれ、キミー人?お兄さん達と一緒にいい場所に遊びにいかない?」

「おー、可愛いじゃん。こう、守ってあげたい感じの子で」

「Yeah, Shal l we go? (いいね、俺たちと行こうぜ?)」

となんだか怪しい3人の男の人に声を掛けられました。

「い、嫌です。そ、その、友達と遊びに来ているので」

「そんなこと言わずにいいじゃん。どうせならそのお友達も一緒にいいよ?」

「そうそう。キミみたいな子のお友達なら絶対可愛い子だろうし」

「い、嫌です!失礼します!」

と目の前にいる男の人達から逃げて人の多そうなところへ行こうとしたのですが、

「そうはさせねえよ?」

「キャツ!」

と手首を掴まれて引つ張られました。

「は、放してください!」

「嫌だね。ほら、こつちに来い!」

とさらに強く引つ張つて来たので、

「い、いや。だ、誰か、助けてください。助けて、滝沢くん!」

と抵抗していると、急に肩を掴まれたと思つたら手首の痛みがなくなりよろめいたわたしを誰かが受け止めてくれました。振り向くと、肩で息をしながら怒っている滝沢くんがいました。

「た、滝沢くん!」

「ハア、ハア、お、おまた、せ、沢井さん」

▪ ▪  
△ △ △

「た、滝沢くん?!」

「ハア、ハア、お、おまた、せ、沢井さん」

ま、間に合ったー!! 沢井さんを人混みで見失ってそれからずっと走り回ってやっと見つけたと思っただらなんかな変な奴らに連れていかれそうになつてたからとつきにやつちまったけど、大丈夫か、これ? とりあえず、沢井さんの前へ庇うように立つと、

「ああん? おい、にいちゃん、その子とこれから遊びに行こうとしてたのに何邪魔してくれてんの?」

「嫌がつてるだろうが! この子オレの彼女なんで、諦めてくんね?」

後ろで沢井さんがちよつとビクツとしたけど、今は気にしてる場合じゃないよな。

「は? 何言つてんだテメエ? おい、お前らやるぞ!」

「おう!」

「ぐっ……、うぐ、がはっ……」

「た、滝沢くん!」

「おい、にいちゃん、まだやんのか」

「絶対、沢井さんに手エ出させねえからな!」

「……ツチ、やめだやめ。興ざめだ、行くぞ」

「いいんすか?」

「Are you really? OK? (マジで? いいのか?)」

「つせえな、いいつつつてんだろ! ほら、行くぞ!」

「うっす（OK）」

と言って男たちはどこかへ行った。



男たちがどこかへ行った後、わたしは滝沢くんを近くにあったベンチに座らせて看病していました。

「くーっ、やっぱり殴られるのは痛いや。もうちよつと鍛えようかな？」

「滝沢くん！タオル濡らして来ました！」

と言ってそれを滝沢くんの顔の痣ができている部分に当てました。

「ったー！……ありがと、沢井さん。にしても、情けねーよな。女の子一人守るのにこんなに傷だらけとか」

「そんなことないです！滝沢くんが助けに来てくれて嬉しかったですし、とてもカッコよかったです！」

「そ、そっか。なんか照れるな／＼／＼」

「そろそろ移動できそうですか、滝沢くん？」

「おう！あ、そういえばさつき勢いで彼女とか言っちゃってごめんね?！」

「いい、いえ、気にしてないです！それにちよつと嬉しかったりなんて……つて、忘れてください／＼／＼」

「え、それつて、どういう……」

「忘れてください!!／＼／＼」

あーもう、わたし何やってるんでしよう！あれじゃあまるで……わたしは恥ずかしくて走り出してしまいました。

「待つて、沢井さん！」

「キャッ！」

滝沢くんはわたしが走り出した瞬間にベンチから立ち上がり、わたしの手を掴んで自分の方に引つ張ると抱きしめてしまいました。

「え、え？た、滝沢くん？」

「好きだ！」

「——え？」

「オレは、沢井さんが好きだ！」

「……友達としてですよね？」

「違う！オレは後悔してたんだ！あの時、このことを言おうと思つてたんだ！……でも、オレ、テンパつて友達だけに教えてるとか言つちやつて！好きな人の前になつたらいつ



も通りになれなくて！特別なんだよ！だから……好きだ、沢井さん」

わたしは滝沢くんが好きだと言われてとてもびっくりしました。それ以上にとっても嬉しくて、照れくさくなって、愛おしくなって、滝沢くんを抱きしめ返すと、

「わ、わたしも、わたしも滝沢くんのが好きです。友達じゃなくて一人の男性として、滝沢くんが好きです！あの時はすごく悲しかったです、辛かったです！でも、それでも、今日、滝沢くんがわたしのことを好きって言ってくれて、とても、とても嬉しいです！本当はもう少し雰囲気のある時に言っただけだと思ったりしましたが、それ以上には幸せです」

まくし立てあげるように言った。そして、そのまま顔を上げると、

「こ、こんなわたしですけど、わ、わ、わたしでよければ付き合ってくださいませんか？」

滝沢くんはびっくりしたような顔をするとはにかみ、

「よ、よろしく願います！……って立場逆でしょ／＼」

「そ、そうですよね／＼」

「でも、スッゲー嬉しい！」

「も、もう／＼い、行きましょ！」

「そうだな！まだまだ遊び倒すぞー！」

「はい！」

そうしてわたし達はさつきまでの友達とは違って恋人として楽しむことにしました。



鈴ちゃん達が仲睦まじげに歩いていくのを見ていた私たちはというと、

「は、よかった！うまくいったみたいだね！」

「オロロロロ……やったな、正輝（泣）」

「いつの時代の言い方よ、結兄……もう、あの様子なら私たちの助けはいらないよね」  
「そうだろ。絡まれてた件は真面目に逃げたかったのに」

「結兄ってそういう時だらしないよね！」

と軽く背中を叩くと

「助けることはしないけど、折角だし最後まで見届けようよ！」

と言って鈴ちゃん達が歩いて行った方向へ走り出した。

「は、ちよ、待てよ咲愛！俺を置いてくな！」

という声を背中に受けながら。

◆ ◆ ◆  
夢を見ている。

目の前には俺の妹がいるが、どこか様子がおかしい。彼女は俺に背を向けていて前方に広がる闇をじっと見ているようだ。

「——咲愛？」

呼びかけたが返事は帰って来ず、少しの間を置いてから

「ねえ、結兄。……私のこと、どう思ってるの？」

彼女は眩きながら振り返った。その瞬間、

「咲愛っ！」

咲愛が闇の中に徐々に引き摺り込まれ始める。悲しそうな瞳をしながら沈んでいく。

なんの冗談だよ！クソツタレ！どう思ってるなんて、今更だ。

俺は単に咲愛は妹だから、兄として好き……だ？

本当に？

『好きな人に好きな人がいたとしても告白する、それが男ってもんじゃねえのかよ!!』

『ゆ、結叶……！そう、そうだよな！サンキュ!!オレの友がお前で良かったよ！おかげで告白する決心ついたわ！なんかあつたらまた相談しに来るかもしれないねえけど、その時はまた頼むぜ！それじゃ、またな！』

なんであの時自分の言ったことに自信を持てなかったんだ？まるでこれじゃ——  
俺は、どうしたら——

「……い、……兄、結叶つてば！もう起きなよ！……つてどうしたの？なんかうなされてたけど」

「ああ、咲愛か。なんでもないぞ？」

「んー、それならいいけど……。なんかあつたら言つてよ？兄妹なんだし。あ、そうだ、もう朝ごはんできてるから早く降りて来てね。鈴ちゃんに呼ばれて早く学校に行かないといけないから」

「わかった。俺も正輝に呼ばれてるしすぐ準備するわ。あと15分待つててくれ」  
「早くしてよね！」

と言つて咲愛は部屋から出て行つた。

——15分後

「さて、行くか！」

「うん！」

俺達は一緒に登校し始めた。



早めに学校に着いたわたしは中庭でポーツと咲愛ちゃんを待つていました。しばらくして、

「鈴ちゃん、お待たせ！」

と咲愛ちゃんが駆け寄って来ました。

「朝早くに呼んじやってすみません」

「いいよ！それで、なんのお話なのかな？早く滝沢くんに会いに行きたいんでしょ？」

と茶化すような言い方で昨日、どこかで見られていたのだと分かりました。

「告白してるところ見てたんですか!?!／／／」

「ううん、なんか、この前までと違って、仲睦まじげに歩いているのを見たから、そうなのかなあーって。」

「そ、そうだったんですか……。でも、改めまして、わたし、正輝くんとお付き合いをすることになりました／／。色々ありがとうございました、咲愛ちゃん」

「よかったね、鈴ちゃん！それにしても、ふーん」

「な、なんですか？」

「もう滝沢くんのこと下の名前で呼ぶようになったちゃって。このこの」

「……あつ！えつと、こ、これは、その……つて、咲愛ちゃん達、最後まで付いて来てなかつたんですか？」

「そうなんだよ！前よりも仲良く歩いてるなーつていうのを見てから私も後を追おうとしたんだけど、見失っちゃって……」

「そ、そうだったんですか」

ちよつとホツとしました。でも、

「……で、結局あれからなにをしたのかな？」

咲愛ちゃんが含まのある笑い方でこんなことを言うてくるものですから顔がとても熱くなつて慌ててしまいました。

「つ！／＼／＼さ、咲愛ちゃん、な、なに、なにを、とは？」

「ん？観覧車乗ったり、ファミレス行ったりしたのかなつてことだけど、鈴ちゃんは何を想像したのかなあ？」

「つ！！！／＼／＼も、もう！からかわないでください！」

「あははつ！ごめんごめん。でもあれから何したのかは教えて欲しいな？」

「わ、わかりましたけど、誰にも言わないでくださいね？」  
「やった！」

少しハメられたと思いながらも、昨日のことを思い出して話し始めました。

——昨日

わたし達は付き合ってから晴れて恋人になった後、ティーカップや初めに乗ったものとは別のジェットコースターに乗ったりして疲れてベンチに座っていました。

「はい、沢井さん。りんごでよかったです！」

と滝沢くんがジュースを買って来てくれました。

「はい、ありがとうございます！」

と言ってわたしがりんごジュースを受け取ると、滝沢くんが横に座りました。

「ふうー。それにしても結構遊んだな」

「そうですね。……あ、このジュース美味しいです」

「お、そうなんだ」

「滝沢くんも飲んでみますか？」

「えっ!!いい、いい、の？」

「え?・・・あつ／＼す、すみません」

「い、いや、こっちこそ、ゴメン／＼／」

それからわたし達は黙り込んでしまいました。つい先程付き合い始めたばかりでお互いにお互いを意識しすぎているみたいでとても照れくさいです／＼。それに、先程、わたし、その、か、間接キスしませんか？と言っているようなもので……あー、もう、一体何をしているんでしょうか、わたしは／＼。

黙り込んでしまってから数分、そろそろ何か話さないと……

「あ、あの！」

「す、すみません。先にどうぞ」

「ご、ごめん。先に言っていたいよ」

……完全にかぶってしまいました。ど、どうしましようにと少しオロオロしていると、  
「か、観覧車に行こー！次何か乗ったら帰らないとダメだろうし、今の時間なら景色が綺麗だろうし！」

「そ、そうですね！行きましょう！」

気まづくならなくてよかったですとホツとしました。お互いにまだぎこちないままですが観覧車の方に歩いて行きました。

「ま、まさかこれに乗ることになるとは……」

「ふふっ。大丈夫ですよ、落ちませんから」



観覧車に並ばずに乗れましたが、この遊園地には全面ガラス張りの「透明ゴンドラ」があるらしく、わたし達は運良く(?)それに乗ることになりました。滝沢くんはジェットコースターですら怖がっていたのでかなりビクビクしています。

「さ、沢井さんはこ、怖くないのか？」

「はい。元々高いところや絶叫系が好きですから。それに今は、その、滝沢くんと一緒にすし／＼／」

「え、あ、そ、そうなんだ！／＼／あ、見て、沢井さん！あつちスッゲーキレイだよ！」  
「本当ですね……。とても綺麗です」

滝沢くんが指差した先には紅く染まっていく海と沈みかけの夕日。ふと滝沢くんの方を見てみると彼の横顔がとても輝いて見えました。今日、わたしに告白してくれたこと、とても嬉しかった。こんなわたしでも好きだと言ってくれて、改めて彼に恋をして、恋人になることができ、本当に幸せだと思った。わたしは鞆から小さな箱を出すと、  
「滝沢くん」

と声をかけました。こちらに振り向くと同時に箱を前に出すと、

「……………え？な、なに？」

「今日、ここに連れて来てくれて、一緒に遊んでくれたお礼です。受け取ってくださいませんか？」

滝沢くんは箱を受け取るとすぐに開封して中身を取り出した。

「これって——イヤリング?」

「はい。いつもつけてるので、いいかなと思ひまして。……どう、でしょうか?」

「あ、ありがとう! うわー、スツゲー嬉しい!!……ちよつと目瞑つててくれる?」

「は、はい」

そう言つてわたしは目を瞑りました。しばらくガサゴソという音がしたかと思うと、少しゴンドラが揺れ、呼吸音が近くまで来ました。びっくりして目を開けると、滝沢くんの腕がわたしの首に回されていて、顔が目の前にありました。あまりにも急だったので固まつてしまつてしていると滝沢くんが離れて、元のところではなく横に座ると、

「実は、沢井さんにあげようとオレも買つてたんだよね、プレゼント!」

「……これ」

わたしの首にかけられたネックレスを持ち上げて見ていると視界が滲んできてしまいました。

「え! 沢井さん?! ネットクレス気に入らなかつた?」

「つーち、違います! ち、ちが、うんです。うれ、しくて……。グスツ。ごめん、なさい。泣いたり、なんか、してしまつて」

「沢井さん——」

滝沢くんはわたしにとって勿体ない人なのかもしれません。こんなに格好良く、優しく、わたしを守ってくれて。こんなわたしじゃ——と思っていると、滝沢くんがわたしを抱きしめてきました。壊れ物を扱うように、でも力強く。

「?! た、滝沢く——」「沢井さん、オレは沢井さんが好きだ。いつも楽しそうで、日直の仕事も真面目にして、勉強熱心で、笑顔が可愛い沢井さんを見て好きになつたんだ。これからいろんな沢井さんを見ていくと思うけど、それでも好きでい続けるよ」……う、う。た、たき、ざわ、くん」

わたしが泣き止むまで滝沢くんは抱きしめてくれていました。

泣き止んで体を離すと、

「……滝沢くん、イヤリング貸してくれませんか?」

「え? 沢井さんがくれたのだよね? いいけど……」

「ネックレスをつけてくれたので、お返しにわたしもイヤリングをつけてあげます」

「ありがと、沢井さん!……ハイ」

イヤリングを受け取ると、ドキドキしながら滝沢くんの耳にそつと触れました。ビクツとなつて耳が赤くなるのを見たわたしは、照れてるんだなとわかると、少し可愛く思えてしまいました。

「……はい、つけ終わりました」

「あ、ありがとう／＼／」

「耳を触った時、ビクツとして可愛かったですよ」

「男に可愛いっていうものじゃないだろ……。でも、これも、今日も本当にありがとう、沢井さん」

「はい！こちらこそ、ありがとうございました。本当に楽しかったです」

「……よし！沢井さん！」

「は、はい！」

「名前で呼び合いませんか?!ほら、付き合い始めたし、苗字にくん付けさん付けてなんか、ね?」

「ふふっ、そうですね。」

「そ、それじゃあ……。スーハー……。す、鈴／＼／」

「は、はい／＼／。ま、正輝くん／＼／」

名前呼びあつた後、なんだか照れくさくなつて笑つてしまいました。そうしているうちに観覧車も終点につき、ゴンドラから降りると、手を繋いで帰りました。

——現在

「——という感じでした／＼／」

「えー！つまんなーい！耳を触ったあたりでほっぺにチュってしたらよかったのに！」  
「無理ですよ！もうあれ以上は死んじやうかもしれないというくらい恥ずかしかったんですから！／＼／＼」

「初々しいねえ♪そのネックレスがそうなんだ！似合ってるよ！」

「あ、ありがとうございます／＼」

「それにしてもいいなー。付き合えて」

「望月くん、最近変わったことってないんですか？」

「それが、なんか悩んでるっぽいんだけど、話してくれないんだよね」

「そうなんですか……正輝くんに望月くんが何で悩んでるか知らないか聞いてみますね」

「ありがとう！鈴ちゃん！」

「いいんです。わたしがしたくてしているので。そろそろ教室に向かいましょう？」

「うん！」

わたしは、これがちよつとでも咲愛ちゃんに対してのお礼になればいいなと思いがながら教室に向かいました。



「結叶おおお!!」

「うわ!びつくりしたー、なんだよ、正輝」

咲愛と校門前で別れて教室へと向かっていると、正輝がものすごい勢いで駆け寄ってきた。それも、とてもいい笑顔で。尾行していたので理由はわかり切っているが、

「じ、実はな」

「沢井さんとうまくいったんだろ?おめでと」

「ど、どうしてそれをおー?!」

「ま、まあ、いいじゃないか、そんなこと。……で、どこまでいったんだ?」

「な、な、なに、なに言ってるんだよ、結叶ー!ま、まだ、鈴とは手つ、繋いだくらいだし!」

「へえ、『鈴』ねえ。もう名前呼びかよ」

「ま、まあな。……お前のおかげだよ、結叶。サンキュな」

「お礼言われる筋合いはないんだがな。正輝が頑張ったからだよ」

「お、おう。でも後押ししてくれただろ?だからサンキュな」

いつも通り、でも少しだけ雰囲気が変わった正輝を見て、本当にうまくいったと思う。

「あ、鈴がいるし、行ってくるわ！」

そうやって走っていく姿を見て苦笑しながらその場に立っていた。



私と鈴ちゃんが教室へと向かっていると、滝沢くんがこちらに走ってくるのが見えたので、

「ほら、王子様が迎えにきてくれたみたいだよ。私先に行ってるからHRに遅れない程度にねえ〜」

「も、もう／＼／＼」

と短い会話をして別れました。

滝沢くんとすれ違い、1人で教室に向かっていると、結兄が立っているのを見つけたので、足音を忍ばせて近づくと、

「ゆ〜い兄!どうしたのぼーつとして」

「うお!さ、咲愛か。い、いや、なんでもないぞ。それにしてもあの2人うまく行って良かったよな」

「そうだね。……ねえ、本当に悩んでることとかないの?」

「なんもないって。ほら、教室に行くんだろ？行くぞ」

「……うん、わかった」

なんか誤魔化してるんだろなってことは分かったんだけど、追求できなくてそのまま結兄と一緒に教室に向かった。



その日の放課後、咲愛ちゃんと望月くんはスーパーのタイムセールで争奪戦をするために先に帰ってしまったので、今正輝くんと一緒に帰っています。

「……」

付き合うことになってから初めての放課後で、気まずかったり、恥ずかしかったりで無言のまま並んで歩いていきます。

「あの」「あのさ」

「先にどうぞ、正輝くん」

「いやいや、鈴が先でいいよ！」

「えっと、ちよつと長くなりそうなので、正輝くんが先に言ってください」

「んー、分かった。じゃ、じゃあ、どこか寄って帰りませんか？」



「そ、それって……」

「ほ、放課後、デートつてやつ／＼。もうちよつと一緒に居たいしな／＼」

「は、はい！／＼わたし、一回だけでいいので食べてみたいものがあつたんですけど、一人じゃダメで……。ダメですか？」

「だ、ダメじゃない！行こう！」

「ありがとうございます！こつちです！」

わたしは正輝くんの手を握ると、わたしが行きたいと思っていたお店へ向かい始めました。

ある喫茶店に入ったわたし達が奥の方にあるテーブル席に案内され座ると、しばらくして、

「いらつしやいませ。ご注文は何に致しましょうか？」

「オレはブレンドコーヒーで。鈴は？」

「わたしはオレンジジュースとこ、これをお願いします」

と正輝くんメニューが見えないように店員さんに見せて「ある、写真を指しながら言うと、店員さんが微笑みながら、

「かしこまりました。少々お時間がかかりますので、出来上がるまでお待ちください」

と注文を取ると水を置いて、メニューを持って奥へ戻って行きました。

「時間がかかるって何頼んだんだ？」

「ひ、秘密です！／＼ど、どんなのか楽しみにしてください！」

「そこまで言うなら……にしても、鈴も喫茶店とか来るんだな」

「たまに咲愛ちゃんと一緒にですが」

「へえ、そうだったんだ」

「……」

それを機にまた無言になってしまいました。どうしようかとしばらく悩んでいると、「お待たせいたしました。ブレンドとオレンジジュースと」男女ペア限定「パフェです。ご注文は以上でお揃いでしょうか？ごゆっくりしてください」

店員さんはそう言ってわたし達の前にそれぞれの頼んだ飲み物とハート形のクッキーやチョコが散りばめられ、アイスも小さめのが2つのっている少し大きめのパフェ、伝票を置くとまた奥に戻って行きました。

「す、鈴が食べてみたいものって……」

「こ、これ、です／＼。咲愛ちゃんと、好きな人ができたらその人と食べたい、という話を以前しまして／＼。……ダメ、ですか？」

「だ、ダメじゃないけどさ、スプーン一本しかないぞ？」

「えーあ、そ、そうですね／＼。もう一本持つて来てもらいましょうか？」

「多分だけど、こういうものなんじゃない？ほ、ほら、さつき、男女ペア限定って言うってぐらいいだし」

「そ、そうかもしれないですね……そ、それじゃ、正輝くん」  
「ん？」

「あ、あくんです／＼／＼」

「?!あ、あーん／＼／＼……う、うん、お、おいしい／＼／＼」

「そ、そうですか／＼／＼。で、ではわたしも」

「鈴、スプーン貸して」

「あ、は、はい、どうぞ」

正輝くんも自分でパフェを食べたいのかなと思つて素直にスプーンを渡すと、

「ほら、お返し。あーん」

「え？あ、は、はい！あ、あくん／＼／＼。……た、確かに美味しいですね／＼／＼」

「だろ？」

「は、はい！でも、これってその、いわゆる、か、間接、キ、キスなのでは……／＼／＼」

「そそそ、そうだな／＼／＼」

「……」

また無言です。勢いで「あーん」をしてしまったものの、やっぱり恥ずかしいです！

しばらくして、正輝くんが、

「な、なあ、早く食べないとまずくね？ちよつとアイス溶け始めてるし」

「あ、本当ですね。正輝くんがスプーン持つてるので、先に食べたいだけ食べてください」

「ん、わかった。なら、鈴の話でも聞きながら食べることにするわ」

「はい」

そして、わたしは話し始めました。望月くんが咲愛ちゃんにも相談できないようなことがあるかもしれなくて、それを訊いて欲しいこと。咲愛ちゃんと望月くんが“義”兄妹であること。そして、咲愛ちゃんが望月くんのことを好きだということ。正輝くんは義兄妹のこと、好きだということを聞いた時は思いにも寄らなかつたみたいでとても驚いていました。

「……わたしもパフェ食べたくなつたのもらつていいですか？」

「あ、ああ、もうオレ、いらぬから残りつても3分の1ぐらいだけど、全部食べていいよ」

と云うので、正輝くんからスプーンをもらつてパフェを自分の方に寄せて食べ始めました。……やっぱり甘いものは美味しいです！

「とりあえず、結葉の悩み事に関しては本人に訊いてみるけど。まさか、咲愛ちゃんがねえー……」

「わたしも初めて聞いた時はすごくびっくりしました。でも、咲愛ちゃん達なら大丈夫じゃないかなって思います」

「んー、でも、表向きは血の繋がった兄妹って理解だしな……。まあ、オレもあの2人ならって思うけど」

「そうですよね」

それから、わたしがパフエを食べ終えるまでは正輝くんは何か考えているみたいでした。

パフエを食べ終えて帰路についていると、

「なあ、鈴」

「なんですか？」

「オレは結葉に何か悩みがないか訊くだけでいいだよな？」

「はい。すみません、こんなお願いしてしまって」

「いいつて、オレだつてあいつには世話になつたし」

「ありがとうございます、正輝くん。あ、ここまででいいですよ」

「お、そつか。それじゃあ、また明日！」

「はいー」

そうして別れる寸前に正輝くんの服の裾を引くと、

「っん／＼／」

「?!?!」

「ま、また明日、正輝くん／＼／」

わたしは正輝くんの頬にキスをすると、固まってしまっている正輝くんを放つて走って家に帰りました。そのままの勢いで家に着くと、すぐに自分の部屋に入り、ベッドに倒れ込むと、

「ああー!!／＼わたし、その場の勢いだけであ、あんな、ほ、頬にキ、キスだなんて!

／＼いつかはあ、あ、あ、あれ以上も……あれ以上なんて……うう／＼／」

と悶えてしまえばらくバタバタしてしまいました。

正輝と沢井さんが上手くいって本当に良かった。的確なアドバイスなんて、恋愛経験のない俺が言えるわけなかったのに。本当にあいつが頑張っただけで、俺は何もしていない。

けど、正輝達が付き合い始めたのを聞いてからなんか妙にモヤモヤする。別に正輝から沢井さんを奪いたいとか、そういう感じではないのはわかってる。なんせ、あの2人が付き合えるようにしたから。しかも、授業でもボーツとしていることが多くなったらしく、正輝にも、他の友人からも、そして咲愛からも心配される始末。一体何にモヤモヤしているのか全く自分ではわからない……けど、それでも、俺は知っているのに気づけていない、と感じてしまっただけで仕方ない。本当に何の理由なく。

今は夜、咲愛が眠りについてから自分の部屋のベッドに寝転がってボーツとしていた。

——♪♪♪

「……ん？こんな時間になんだよ、って、正輝からのLIMEか。なにになに？」

ベッドに寝転がっていて重たい体を無理やり起こして携帯をとると、

『すぐに学校近くの公園に來い』

「はあ？何時だと思ってるんだよ、あいつ」

ただ、正輝のことだから遊びで言ってるんじゃないさそうだし。渋々寝巻きの上から上着を羽織ると、咲愛を起こさないようにこっそり家を出た。

「お、来たな、結叶。待ちくたびれたぞ」

「いきなり呼んできて、それはねえだろ」

正輝は公園にあるベンチに座って待っていた。俺はその横に座ると、

「で？話ってるんだよ。最近夜寒いのを忘れて寝巻きに着ただけだから、早く帰りたいんだよ」

と話を切り出した。

「ま、早くなるかならないかは、お前次第だよ」

「は？どういうことだ？」

俺がそう言うと、正輝は話し出した。

「とぼけんよ、何に悩んでんだ？」

「なんも悩んでねえよ。大丈夫だって」



「嘘だな。最近のお前ブーツとしすぎだ。咲愛ちゃんも心配してんだろ？」  
「……」

「オレと鈴が付き合えるようになったのはお前のおかげだぜ？だから、今度はお前の番だ。相談しろよ、結叶。オレとお前の仲だろ？」

「……だから、なんもないって。沢井さんにまでそんな風にしつこくしてたら嫌われるぞ？」

「結叶！オレはお前のことだけじゃねえからこんなにしつこくなってるんだよ！お前何か悩んでるだろ、絶対！」

「なんもないって言ってるだろ！」

「嘘つけ！お前、どうせ家でも悩んでブーツとしてんだろ!?咲愛ちゃんがそんなお前を見てなんと思わないと思ってるのか!!」

「んなことわかってんだよ！」

「わかかってんなら、相談してやれよ！咲愛ちゃんのこと、考えてやれよ！お前、兄なんだから?！」

「考えてる！」

「違う！お前は今までの妹のことを考えてんだよ！今の妹のことを考えてやれって言ってるんだよ！」

「だったら、俺はどうすればいいんだよ！わかんねえんだよ！」

「ここまで言つて墓穴を掘つたのはわかつたが、今まで押し込めていた分、俺の心が全部吐き出してしまえと言つているかのように続きを口にする。

「わかんねえんだよ、自分の気持ち。咲愛のことをどう思つてるのか。正輝達が付き合い始めてからずっと、お前に言つた言葉が頭から離れなくなつて、モヤモヤして」

「お前、バカだよな」

「……は？」

「そこまでわかつて、なんで答えでねえんだよ」

「だから、わく「お前、咲愛ちゃんのこと好きなんだろ？」——え？お前、今、なんて？俺が、好き？咲愛を？」

「そうだよ、鈍感無自覚やろう」

「ひでえ言われようだな」

「そりやそう。……で、実際どうなんだ？」

正輝がそう言つて来たので、ちよつと考えてみる。

最近正輝達を見てモヤモヤしていたのは——ん、多分羨ましかつたから、だと思ふ。んじや、なんで羨ましいなんて思つてたんだ？——無自覚に誰かが好きで自分もあんな関係になりたいと思つてたから……だよな、多分。

それじゃ、誰が好きなんだ？

——咲愛。

ここにたどり着いた瞬間、顔が熱くなり、急にドキドキし始めた。——ああ、そうか。俺は咲愛のことが好きなんだ。義妹としてでなく女の子として。

「……俺は咲愛のことが好きだ。ありがとな、正輝」

「いいってことよ、今度何かおごつてくれたら」

「わかったよ」

「後のこと、しつかりやれよ！じゃあな」

「おう」

正輝がベンチから立ち上がって公園から出ていくのを見届けてから長く息を吐いた。それから、俺もベンチから立ち上がり、家に向かって歩き始めた。今までよりもつきりした気分で。ただ、咲愛にどう伝えればいいのか、ということが頭から全く離れず、家に着いてベッドに寝転がってからもずっと鼓動が早くなりっぱなしで朝になるまで起きていた。

## 最終回



朝、私が結兄を起こしに行こうとリビングを出ると結兄が階段を降りて来ていた。

「あ、結兄、おはよう！今日はちゃんと起きたんだね！」

「お、おう、おはよう。な、なんというか、考え事してて寝てないというか」

と何故か目を合わせてくれないまま横を通り過ぎていく結兄。

「バカでしょ。朝ごはんは食べれそ？」

「ああ、それは大丈夫」

「なら、早く食べちゃお？」

「そうだな」

私が椅子に座り、その向かいに結兄が座ると、

「いただきます！」

と声をそろえて言ってから朝ごはんを食べ始めた。

朝ごはんも食べ終わり、使った食器を洗って食器乾燥機に入れ、学校の準備をして、学

校に向かっていると、

「咲愛」

「ん？どしたの？」

「今日学校早く終わるだろ？ちよつと行きたいところあるんだが一緒に来てくれね？」

「それはいいけど、皆で？」

「いや、俺とお前の2人だけで」

「ふくん、いいよ！でも、なんでまた急に？」

「そ、それは……」

「それは？」

「な、なんとなくだよ！」

「ま、いいけど（やった！結兄とのお出掛け♪楽しみだな〜！）」

「そ、そっか」

と放課後に出掛けることになり、内心喜んでいると、前の方に鈴ちゃんと滝沢くんが並んで歩いてるのを見つけた。私は鈴ちゃんに向かって走り出すと、

「す〜ずちちゃん！」

と、鈴ちゃんに抱きついた。

「キヤツ！さ、咲愛ちゃん、お、おはようございます」

「おはよ！朝から仲良く登校とかラブラブだねえ〜」

「っ／＼／」

「さ、咲愛ちゃん、当たり前だつて！／＼／」

「正輝くんも何言ってるんですか！／＼／」

「・・・ハッ！」

「正輝、お前バカだな」

「お、結叶もいたのか。おはよう」

「おう、おはよ」

そして私達4人は仲良く（からかいながら）学校へ向かった。



——そして、放課後、

「さて、行こうか、咲愛」

「うん！それでどこ行くの？」

「そのうち教えるさ。ほら、とりあえず駅に行くぞ」

と言って、咲愛の手を握って歩き出した。

「ちよ、結兄、自分で歩けるって！」

「別にいいじゃねえか。それとも嫌か？」

「い、嫌ってわけじゃないけど……恥ずかしいじゃん！／＼／」

「気にしな—い、気にしな—い。電車に間に合わないかもしれないから早く行こうぜ！」  
と恥ずかしがつてる咲愛を強引に説得して駅に歩き始めた。

駅について切符を買ってホームに行くと、ちようど電車が来たので乗り込んだ。そして、電車に揺られること数十分、俺達は電車を降りて隣町に来ていた。

「それじゃ、行くか。はぐれんなよ？」

「わ、わかったけど。本当にどこに向かっているの？教えてよ！」

「ん—、まいつか。とりあえず、歩きながら話すわ」

と言つて歩き出すと咲愛が横に並んでついて来た。

「これから行くのは、俺のとっておきの場所なんだ。1人になりたい時とか、悩んだ時によく行くんだけど、景色いいからいつか咲愛を連れて行きたいな、って思ってたんだ」

「へえ、そうだったんだ。あ、もしかして、たまに1人で出かけてたのってそこに行くため？」

「そうそう。いや、学校早く終わって良かったわ」

「別に休みの日でもいいじゃん、なんで今日なの？」

「そ、それは……」

「それは？」

「……まだ秘密だ。ほら、置いてくぞ！」

「待つてよ、結兄！」

これを最後に会話がなくなり、目的地に着くまで歩くことに集中していた。

しばらく歩いて小高い丘を登ると、

「さ、着いたぞ。ここが俺のとっておきの場所だ」

「わあ、すっごいキレイ！」

そこには辺り一面に色鮮やかな花がたくさん咲いていた。

「だろ？」

「うん！」

前に出て咲愛が花畑に目を奪われているのを見て、ああ、やっぱり好きだなと思った。  
だから、

「なあ、咲愛」

「何？」



「好きだ」

「——え？」

咲愛がすごい勢いで振り向いて俺を見た。

「俺は、咲愛のことが好きだ。妹としてじゃなくて、1人の女の子として、咲愛が好きだ。付き合ってくれ」

そう言つて俺もまっすぐ咲愛を見つめる。そして、咲愛の方へ向かう。

「え、ちよ、え？ほ、ほんとに？わ、私で、いい、の？」

——後6歩

「ああ」

——後5歩

「だって、義理の兄妹なんて知らない人から見たら、兄妹で付き合つてる、つて変に見えるよ？」

——後4歩

「いいよ、咲愛がそばにいてくれるなら」

——後3歩

「で、でも色々、た、大変なことになるんじゃない……」

——後2歩

「構わない」

——後1歩

「で、でも——「咲愛、俺はお前だから、好きになったんだ。お前以外じゃダメなんだよ」……っ」

黙って俯いてしまった目の前の咲愛を抱きしめると、

「咲愛、好きだ。俺と付き合ってください」

と囁いた。腕の中で咲愛が少しビクツとする。そして、咲愛がおずおずと抱きしめ返してくると、

「私も、私も好き、大好きだよ、結兄。こんな私でいいなら、よろしくお願いします！」  
「当たり前だろう！こっちこそ、これからもよろしくな！」

翌日、私と結兄は鈴ちゃんと滝沢くんにつき合い始めたこと、このことを誰にも言わないでほしいことを報告した。2人ともまるで自分のことかのように祝福してくれた。

私——望月咲愛には付き合っている人がいる。相手は義理の兄の結兄。生活は今までとあまり変わらないけど、今までは少し、ううん、とつても大きく変わった関係。この先も、私と結兄が付き合っていることは私、結兄、鈴ちゃん、滝沢くんだけのひ・み・



## 夏の終わりの祭り

## 前編

私―千夏（ちなつ）は毎年夏の終わりにある地元の祭りへ数年ぶりに来ています。な  
んで数年も行つてないのかつて？子供の頃ならまだしも、いい歳した大人が独りで祭り  
とか恥ずかしいし……。なら、なんで行くのかつて？それは、

「おい、千夏―！待たせちまつたか？」

「ううん、待つてないよ。私もさつき来たところだから」

「そうか。その浴衣似合つてるな。お前にピッタリだわ」

「あ、ありがとう／＼／＼」

「いえいえ、それじゃ、行くか」

「うん！」

そう、今声をかけてきた幼馴染の海音（かいと）に誘われたからだ。昨日、海音から  
数年ぶりに連絡が来て、

『今、久しぶりに地元に戻つてんだけど、千夏は明日の祭り行くんか？』

『久しぶり〜。行くかは考えてるところ〜』

『そうかい。なら、一緒に行かねえか?』

『んー：：なら、行こうかな』

『んじゃ、5時に神社の前に集合なー』

『はーい』

というやりとりがあつたのだ。

そんなこんなで今に至り、私達は久しぶりの祭りを目一杯楽しんでます。始めの方は人が少なかったけど、時間が経つにつれて人が多くなつてきて歩きにくくなつてくるので、

「キヤツ、す、すみません」

人とぶつかつてしまった。それに気付いた海音が、

「大丈夫か、千夏」

と声を掛けてくれた。

「う、うん、大丈夫だよ。ありがとう」

「人多くなつてきたし、その格好じゃ歩きにくいよな。：：仕方ない、俺の服の袖掴んで歩かかか?それとも、昔みたいに手でも繋いで歩くか?」

と、からかうように手を差し伸べながら訊いて来るものだから、私はびっくりして、

「え、い、いいよ。私は大丈夫「人が増えて歩きにくいんだろ？それとも、今更恥ずかしくなったのか？」そ、そんなんじゃないよ！うう……そ、それじゃ、お願いします」

と言って差し伸べられた海音の手を握ってお互いの方が当たるか当たらないか微妙な距離感で並んで歩き始めた。

「んー……。やつぱり、海音って昔から結構背伸びたよね。なんかこう、男の子って感じから男！って感じになった！」

「はは、そりゃ、どうも。そういや、もうそろそろ花火始まる時間だよな？あそこに見に行かないか？」

「うん、いいよ！」

と言って私達は花火を見るために近くの浜辺へ向かった。

私達は浜辺に着くと近くの階段に座って、

「…懐かしいね、ここ。なんにも変わってない」

「そうだな。俺がこつち出てから数年は経ってるのにな」

「うん、そうだね」

と話していたが、それつきり無言になってしまつて、2人揃って夜空が映っている渚を眺めていた。それから程なく花火が上がり始めた。

「——ねえ、海音」

「どうした？」

「昔、学校の帰りに一緒に並んで歩いて帰った事とか、お祭りのたびにこうやって花火を見た事とか覚えてる？」

「——当たり前だろ？」

「なら、さ。あの約束も覚えてたりする？」

「……ああ、もちろん」

「私達はあの日——私と海音が高校を卒業して別々の道に進むと決まった年のこの祭りの日——この場所で約束をした。」

## 後編

私と海音は昔家が隣同士ということもあって兄妹のように遊んでいた。学校の行き帰りも一緒に、祭りがあるといつも一緒に行ってはぐれないように手を繋いで見て回っていた。季節は何度も巡って私達は高3になった。その頃でも行き帰りは一緒になったりしたが、周りからしよっちゆうからかわれてお互いに恥ずかしくなったし、友達も多くなってきたから祭りへは一緒に行くことが無くなっていった。でも、大学からは進路が別々になってしまいかもと思った私が海音を祭りに誘ってみたらOKしてくれた。そして、祭り当日私と海音は昔みたいに祭りを回った。

最後の花火がもうそろそろ始まるという時間になると海音が、

「なあ、ちよつと一緒に来て欲しいところあるんだけど、一緒に来てくんねえか？」

「別にいいけど…。もうそろそろ花火始まつちゃうよ？」

「ああ、それなら大丈夫だ。そこの方が見やすいんだよ」

「そつかく。それじゃ、いいよ」

そう言っつて私は海音に付いて行った。しばらく歩くと、人気のない浜辺に着いた。

「ねえ海音、ここがそうなの？」



「ああ。一昨年ぐらいかな、偶然見つけたんだよ。今日千夏に教えるまでずっと隠してたんだ」

「え、なんで？」

「最初は一番大切な人に教えたかったからだよ」

「へえ。——つて、え？一番大切な人つて、え？」

「お前だよ、千夏。俺にとつて千夏が一番大切なんだよ」

「そつかり、そうだったんだ」

「な、なんだよ」

「ううん、なくんも。私もね、海音が一番大切に大好きだよ！」

と照れ笑いしながら言った瞬間、海音が私を抱き締めてきた。

「キヤツ」

「俺も、俺も千夏が大好きだ。」

「わかつてなかったけど、実は両想いだったんだね」

「ああ。……でも、今は……というか、これからか。受験もあるし、お互いに自分の事で大変になるだろうから、付き合えない」

とと言うと私の肩に手を置いて体を離すと、

「だから、約束しようぜ」

「……約、束？」

「そうだ。いつか——」

「いつか、また2人でこの祭りに来て、この場所で花火を見ようって。そのとき、お互いの気持ちが変わって無かったから付き合おうっていう約束、だろ？」

「うん、そうだよ」

私は花火を見ながらそう言った。

「私の想いはあの頃から全く変わってないよ。海音が大好き」

「俺も」

と言って海音は私を抱き締めると、私の耳元で、

「俺も変わってねえよ。千夏の事が大好きだ」

そしてあの時と同じように体を離して向き合おうと、

「俺と付き合ってくれるか？」

と、あのときからずっと私が望んでいた言葉を言ってくれた。私は嬉しくて涙を目の端に滲ませながら、

「はい。こんな私ですけど、よろしくお願いします」

と答えた。そして、花火が輝く夜空の下で私達はどちらからとも無く顔を寄せて、キ

スをした。

この先、キスをする度に私はこの時のことを思い出すんだろうな……。だってすごく嬉しかったから。

# Pure School Love

1

「さあ、ついにこの季節がやって参りました!! 皆さんがこの2ヶ月間かけて作り上げてきたクラスの企画の成果を見せる時です! 今ここに、開原高校、文化祭の開催を宣言します!!」

「「うおおおおおおおおおおおおおー!!」「」」

学園に開催宣言のアナウンスが流れた瞬間、周りにはテンションの上がりようがわかる位の叫びが響き渡った。そんな中、俺——樹たつきは、

「やっとか…これで最後の文化祭になるのか。感慨深いものを感じるな……」

と、呟いて突っ立っていると、

「なにじじくさいこと言いながら突っ立ってんのよ、樹」

と、後ろから声をかけられた。

「いやいや、これが高校最後の文化祭なんだぞ? なんか感慨深くないか?」

と、声をかけてきた友人——沙月さつきに言う。

「そ、そうかもしれないけど…。い、今はそれ関係ないじゃん! ほら、始まったんだし、

屋台行こうよ！」

と言うが否やすぐに歩き始める。が、そちらとは逆の方に歩き出した沙月を見て慌て、

「おい、屋台そつちじゃねえぞ、沙月！」

呼び止める。沙月は罰が悪そうにこちらを見て、

「……えへへ？」

「誤魔化しても無駄だ……。はあ…、沙月の方向音痴は今に始まったことじゃねえけどさ。まったく仕方ねえ、沙月、ほら」

誤魔化そうとしているので、呆れつつ手を差し出した。

「……う？どゆこと？」

…意味が分かかっていないらしい。

「次、気付かないうちにどこかに行かれたら面倒だからだ！」

と言って、少し強引に沙月の手を握る。沙月がびっくりしたようにこちらを見てから、

「わかったよう。それじゃあ、エスコートよろしくね、樹！」

と、ちよつと照れた雰囲気のまま満面の笑みで面と向かって言ってくるものだから、俺は顔を赤くしてしまった。

「…顔赤くしてどうしたの？」

と、不思議そうにこちらを見てくる。

「何でもない！ほら、行くぞ！……天然過ぎるぞ。お前のせいだ、ばか」

「ちよつと、引つ張らないですよ！自分で歩けるからー！」

俺は誤魔化すように沙月の手を引つ張つて、屋台の方へと向かい始めた。

——そもそも、俺がなぜ沙月と一緒に文化祭を回るようになったのか。それは遡ると4日前……

「なあ、樹は最後の文化祭誰と回るんだ？」

この友人たちとの発言がきつかけだった。

「ん、一人で自由気ままに回るつもりだったんだが、何でだ？」

「いや、一緒に回んねえか？っていうお誘い」

「今年で最後だし、どうよ？」

「いい『ねえねえ、樹！今年の文化祭、一緒に回る？』つと、沙月か」

OKと返事しようというところで、沙月が会話に入ってきてすぐに誘ってきたのだ。

「ねえ、いいでしょ？どうせ今年も一人で回るつもりなんでしょ？」

「うっ、そ、それはそうだが……」

「なら、いいよね!ね?」

とすごい勢いで迫られたからつつい、

「わ、わかつたよ。……と、言うわけだが、お前らも一緒に来るか?」

と、誘いを受けてしまったが、他の友人たちも誘ってみた。

「いやいや、お前たち2人と一緒になんて回れるか!仕方ない、俺たちは俺たちで回るか」

「そうだな!というわけで、お前たち2人で回ってくれ」

とニヤニヤしながら言われた。

「何ニヤニヤしてんだよ……。ってことで沙月、2人だがいいか?」

「もちろん!よろしくね!」

そう言つて沙月はすぐに離れていった。残つた友人たちは、

「リア充爆発しろ!」

と変わらずニヤニヤしてイラついたように言い残して自分の席に戻つた。

「何言つてんだよあいつら。にしても、今回の文化祭、沙月と回れるのか……。楽しみだな」

友人たちの言葉に呆れつつも、文化祭が待ち遠しくなつた。

## 2

「さてと、どの屋台から回るんだ？」

と誘われたことを思い返した後、横にいる沙月に訊いてみた。

「どーしよーかなー……あ、あそこなたこ焼き食べたい！」

「お、いいぞ？俺が買ってこるから。そうだな……あの木の近くのベンチで待っていてくれ。」

と言って買いに行こうとすると、

「え、私も行く！てか、いつも自分の分は自分で買いに行行って言ってるじゃん！」  
と言ってくる。

「そ、そうだけど……今日ぐらいはいいんだ！」

「そ、そうなの？」

「そうだ！だから、さつき言った場所で待ってる！迷うなよ！」

「はーい」

そして一旦別れた。



たこ焼きを買って戻ると、

「あ、おかえり！はやくたこ焼き食べよ！……って1パックしか買って来なかったの？」

「ああ。朝からたこ焼き食う気になんねえんだよ。ほら、食べたかったんだろ？」

と言うと沙月が、

「それじゃ、遠慮なく！……んんん、おいしい！」

「よかつたな、沙月。……やっぱ1個くれ、沙月」

「言うと思った（笑）。それじゃ、あくん」

「あ、あくん。……おお、確かにおいしいな」

「でしょ？もういらぬなら、残りは私が食べ……」

と急に沙月の言葉が止まったので見てみると、沙月がつまようじをジーツと見ていた。

「どうしたんだ？つまようじを見たりして」

「う、ううん、何でもないよ！私、他の屋台のも食べたいから、残りあげるね！」

「いや、残りあげるって、お前、2個ぐらいしか食ってねえだろ?!」

と言うと、沙月が少し顔を赤くし、慌てた様子でたこ焼きが残っているパックを押しつけながら、

「も、もういいの！ほら、早く食べないと、先行っちゃうよ！」

と、言ってきた。

「それはやめろ！お前すぐどこにいるか分からなくなるから！食べ終わるまで待てつろ！」

そう言つてたこ焼きを受け取つてハフハフしながら食べ終えると、立ち上がり、

「さてと、次はどこ行く気なんだ？」

「ん〜とね、とりあえず屋台はいいから……そうだ、お化け屋敷行こー！」

「屋台じゃなくていいのか？……まあ、沙月がいいならいいか。それじゃ、さつそ『お、樹じゃねえか！』お、伊月いっきか！この間、カラオケ行つたぶりか？にしても、なんで今日来てんだ？」

移動し始めようと言つところに中学からの友人である伊月が声をかけてきた。

「駅でチラシ見てな。暇だったし、樹の学校でも見てやろうかとな。……それで、その横にいる可愛い子誰？」

「ああ、『友達』の沙月だ。沙月、こいつは中学からのダチで伊月だ。……って、おい、沙月!？」

俺が伊月を紹介すると、沙月なぜかむすつとした顔でこちらを見ていたと思えばがお化け屋敷の方へ向かつていこうとしていた。慌てて声をかけると、

「久しぶりに会つたんだから、ゆつくり話せば？私先にお化け屋敷行つてるから」

と不機嫌そうに言うとそのくさと行ってしまった。

「お、おい！待って、沙月！そっちは逆！って、あーもー！すまん、伊月、また今度ゆっくり話そうぜ！」

「了ー解！ちゃんと仲直りして来いよー！」

「ああ！」

俺はそう言うのと、沙月を追いかけた。

少しすると、沙月が壁によりかかって座り込んでいるのを見つけた。

「ハア、ハア……。やっと見つけたぞ、沙月。ほら、お化け屋敷行くぞ？」

「ねえ」

「ん？何だ？」

「ねえ、樹にとつて私は何人もいる友達の一人なの？なら『そのことだけど、つと』え？……キヤツ！」

沙月の言葉を遮るように沙月の手を引っ張り立たせると、

「沙月は俺にとつてかけがえのない友達なんだ。多分特別、なんだと思う」

「え、え？そ、そうなんだ／＼／」

「そうだよ。ほら、行くぞ」

「うん！」

と可愛い笑顔で言ってくるので、とっさに顔を逸らして沙月の手を引く張ると、

「さ、行くぞー！」

「うん！」

俺たちはお化け屋敷に向かうのであった。

そのあと、俺たちはお化け屋敷や占い(?)の館に行ったり、その他の展示や屋台を冷やかして回ったりした。怖いのが嫌いな沙月が文化祭なら大丈夫だろうと思つて入ったお化け屋敷では、思つたより手が込んでいたからなのか、沙月が俺の腕にずっとしがみついていた。沙月のほどよい弾力を持つ2つの膨らみが押しつけられていて(本人は無自覚だろうが)恥ずかしいやら嬉しいやらで終始顔が赤くなつてしまった。沙月はお化け屋敷から出て俺に話しかけようとしてこちらを向いた時にやっと気付いたらしく、頬を赤く染めてパツと離れてしまったからちよつと寂しいと思つてしまったのはこの先もずっと秘密だ。

次に行った占い(?)の館で、2人の相性とか運勢とかを占つて貰つて「相性バツチリ!!」と言われたものだからお互い恥ずかしくなつて逃げるようにその場を去つて行つた。

俺は沙月が迷子にならないようにクラスや部活の展示や屋台を冷やかして回る間、ずつと手を繋いでいたのだが、周りからの視線が刺さって痛かった。まあ、それでも手は離すことはなかったが。

瞬く間に時間は過ぎていき、ついに学園祭の締めくくりである後夜祭が始まる時間になってしまったが、俺たちは会場であるグラウンドに行かず屋上に来ていた。

「もう文化祭も終わっちゃうね」

「そうだな。文化祭はどうだった？」

「ん〜とね、すっごく楽しかったよ!!だって、樹と一緒に回れたんだもん!」

「・・・っ!／／」

と可愛い笑顔でこちらを向いていつてくるものだから、すぐに顔を背けてしまった。その後、沙月は躊躇いがちに

「ね、ねえ、樹はさ、どうだったの？」

「――」

「樹はさ、私と一緒に良かったの？他の友達と回れたかったんじゃないの？」

と、もじもじしながら尋ねてきた。

「何言ってるんだよ。良かったからこうして一緒にいるんだろうが。」

「そ、そっか」

「ああ」

「・・・・・・・・・・」

気まぎらくなって、沈黙が訪れた。そして、

『間もなく、後夜祭の目玉イベントであるフォークダンスを始めたいと思います。参加する生徒はグラウンドに集まってください。繰り返しします、——』

とアナウンスが流れた。

「も、もうそろそろフォークダンス始まるみたいだし、行こ？」

と言って、グラウンドへ向かおうとした沙月の手を引っ張った。沙月は驚いたようにこちらを見ると、

「な、何？」

「い、いや。……どうせ今から行っても1曲目には間に合わないだろ、多分。だから、もうちょっとここで話そうぜ」

「んーそれもそうだね。わかった。でも、2曲目には行こうね、絶対だよ！」

「もちろん。……今更だけど、さ。沙月は何で俺と回りたかったんだ？他にも回ってくれって言うてくる人いたんだろ？」

「う、うん、そうなんだけど……。どうしてだろうね、私もわかんないや。ただ、」

「ただ？」

「樹と一緒に楽しかったら楽しいかなって、ね。樹こそ、何で私と回ってくれたの？」

「俺は——」

思わず言葉に詰まってしまった。沙月の言ったことは俺も同じ思いだ。俺は沙月だから一緒に回った、んだと思う。と考えていると、

「ねえ、俺は、の続き教えて欲しいな」

と上目遣い気味に沙月が催促してくる。もういいや、自分に正直になっても悪くはないよな、と決心して、

「俺は——いや、俺もお前と一緒に楽しいだろうなって思ったからだよ。あ、後、お前が他の男子と回って欲しくないからだな」

「——え？ どういうこと？」

首を傾げて変わらさずこちらを見てくる。

「いい加減気づけよ、鈍すぎるんだよ。——俺は、沙月のことが好きなんだよ。ついに言ってしまった。」

「——え、い、今……え？」

沙月、やっぱりびびくりしてんな。

「た、樹、なんて言ったの？」

「俺はお前が好きなんだよ、沙月／＼／」



「そ、そっか／＼／＼」

それを最後にまた言葉が途切れてしまった。恥ずかしくて、なんだか顔を背けてしまった。しばらくして、

「ね、ねえ、こっち見てくれないかな、樹／＼」

「ど、どうしッ!」

沙月に呼ばれたので、沙月の方を向くと沙月の顔が俺の顔の近くにあり、俺の唇に沙月のが押しつけられていた、つまりキスされたのだ。何でキスされるんだって考えたが、沙月の唇の感触がその考えをぬぐい去っていく。

いったい、沙月にキスされてどれくらい経っただろうか。十数秒? いや、もっと短かったかもしれない。沙月が顔を離すと、

「……ん／＼／＼わ、私も、私もね、樹のことが好きだよ、大好き!」

赤い顔の沙月がとびきりの笑顔で告白してきた。そんな沙月を見ると、すごく愛おしさが溢れてきて、

「キャッ!」

沙月のことを抱きしめた。そして、

「俺と付き合ってくれ、沙月。これからもそばにいてください!」

と、耳元で囁くように言った。すると、沙月も抱きしめ返してきて、

「こ、こんな私で、いいなら、お、お願いしま、す。う、うう……」

「なんで泣くんだよ、沙月」

「だって、だってえ……樹と、樹と両思いだって、わかって、それで、付き合ってくださいって、言われて、……ぐすん。本当に、本当に夢みたいだよ。……ぐすん」

俺は沙月が泣き止むまで、抱きしめたまま沙月の頭を撫で続けた。沙月が泣き止む頃には、フォークダンスも1曲終わりそうだった。

「さて、沙月、フォークダンスも1曲終わりそうだけど、行くか？」

「うん！今日からいっぱいたくさんの思い出を作らないと♪」

「ああー」

沙月が恋人つなぎをしてきたので、俺もそれに応じて2人並んで校庭に向かった。

## 最終回

俺たちが校庭に行くと、クラスメイトやら友達やらが集まってきて俺たちを囲んだ。そして、どこ行つてたんだとか、2人きりでナニしてたんだとか、もしかしてやつと付き合つたのかだとか、色々言われたが適当にあしらつて、フォークダンスに混じつた。フォークダンスが終わるとすぐにまた質問攻めにあい、帰り遅くなるだろうなと呆れ混じりに沙月の方を見ると、沙月も同じことを思つていたのかこちらを向いたので、2人そろつて吹き出してしまった。それを見て、さらに冷やかしの声が飛んでくる、ということが続きながら学園祭はその幕を下ろしていったのだつた。

色々あつた文化祭の振替休日を経て学校へ行くと、

「お前、やつと沙月ちゃんと付き合うことになつたんだな、おめでと」とか、

「せいぜい長く続くように友達として祈つとくよ」

やら、

「どこまでいったんだ」

とかを（最後のを言った奴はもちろん一回殴っておいた）休憩になるたびに友達から言われ続けた。どうやら、沙月も似たような状況になっていて、話そうにも話せなかった。昼休みになると全員が言い終わったのか、やっと解放してくれ、今昼ご飯を食べ終えて沙月と屋上のベンチに並んで座っていた。

「くっそ！なんでこんなに広まってんだよ！一日しか経ってねえだろ」

「ホント、そうだよね！……今日、樹ともうちよつと一緒にいたかったのに」

「そうだよな。沙月ともうちよい一緒にいれるかと思つたのによ／＼」

「そっか、そうだよね／＼（ヤッター！！一緒のこと考えてくれてた！）」

と言うと、沙月が嬉しそうに恋人つなぎをして俺の右腕に抱きついてきた。

「さ、沙月、ちよ、引っ付きすぎ／＼」

「嫌だった？」

「い、嫌じゃねえよ。スゲー嬉しいんだけど……」

「だけど？」

「えつと、あ、当たってるんだよ！」

「……？——ツ！！た、樹だから良いの！」

「そ、そうか。沙月大好きだよ／＼」

「きゅ、急に何、もう／＼私だって樹のこと大好きだよ／＼」

そう言つて俺たちは触れるだけのキスをした。顔を離すと、

「やっぱり、恥ずかしいな／＼／＼」

「うん／＼／＼」

そう言つと、沙月は一回俺から離れると、体ごとこちらを向いて、

「これからも、よろしくね、樹」

と顔を赤くして言つてきた。急に言われたものだから俺も顔が熱くなつてしまつた。そして、

「あ、ああ、こちらこそ、これからもよろしくな、沙月」

と言つた。そのまましばらく見つめ合つて、

「アハハハ！」

と、恥ずかしさからか俺たちは笑い始めた。

どうかこんな楽しい時間を沙月と一緒に過ごせますように、と願ひながら。

# Secret Connect Love

1

初めまして、ボクは鷹月香澄たかつきかすみです！今、ボクは鈴風玲音先生すずかぜれおん——皆からは名字を逆から読んで風鈴先生と呼ばれている数学の先生——に教室で2人きりで数学を教えて貰ってます。授業は玲音先生じゃないんだけど、何かわからないことがあると、いつも玲音先生に質問しに行ってます。なんで、担当して貰ってる先生に質問しに行かないかって？それは、玲音先生のことが好き（もちろん、異性として）で、少しでも会える時間を増やしたいからです！

「……さん、……すみさん、香澄さん！」

「ひゃ、ひゃいー！」

「ボーツとしていましたが、どこかわからないところがありましたか？」

「え、えつと……、こ、この問題ってどう解くのかなって……」

とつさに、今解いている途中の応用問題を指差していかにも難しくて悩んでましたかのように誤魔化しました。

「……何か別のことを考えていたように見えました……まあ、いいでしょう。この応

用問題ですね。この問題なら、ここに載っている公式を使って解いてみてください」

誤魔化せてませんでしたが、スルーして解き方を教えてくれました。

「ありがとうございます、玲音先生！」

それからしばらくの間、時々質問しながらも、わからなかったところを解きます。そして、

「ふうー、終わったー！」

「お疲れ様です、香澄さん」

今日の分を解き終えてすぐに、片付けを始めました。すると、

「あの、気になっていて、聞きそびれていたことがあったのですが、今聞いてもいいですか？」

「……？はい、いいですけど……」

普段は話しかけてこないのに急に玲音先生が話しかけてきたので、不思議に思いながら返事をした。

「以前から気になっていたのですが、どうして、香澄さんは僕を皆のようにあだ名で呼ばないんですか？」

「んー、なんとなくですかね。ボクには風鈴先生よりも玲音先生の方がしっくりくるん

ですよ。それに、そんなこと言ったら、玲音先生だって同じじゃないですか。ボクだけ他の生徒みたいに名字じゃなくて名前で呼んでますし？」

「言われてみればそうですね、なんででしょう？」

「ボ、ボクに聞かないでくださいよ！／＼……ボクはさつきも言ったと思うんですけど、じっくり来るからですが、玲音先生はどうなんですか？」

「そうですね……無意識、だったんだと思います。現に、こうして言われるまで気にしていなかったんですから。もしかしたら、特別だったのかもしれないですね、香澄さんのことが」

「……へ？」

「だってそうじゃないですか。他の生徒のことは名字にさん付けで呼んでいるのに、香澄さんだけは違います。これは特別ってことじゃないのでしょうか？」

「……／＼／＼」

「先生として、1人の生徒を特別扱いはあまりよろしくは……って、香澄さん、どうしましたか？顔が赤くなっています、もしかして、体調を崩しているのでは——」

「ち、違います！好きな人から特別扱いされて流れてわかって嬉しくて——あ！」

言い終わってからハツとして恐る恐る玲音先生を見ると、

「えっと、か、香澄さん？」



なんて、戸惑つてるように見えます。

「えっと、その……」

「先ほどのはどういう——」

しかも、こうやって、深入りしてきました。これは、覚悟を決めるしかないのかな……。ボクは深呼吸をして玲音先生をまっすぐ見ると、

「さっき、つい言っちゃいましたけど、ボクは玲音先生のことが好きです！先生としてはなく一人の男性としてです！もちろん、生徒が先生にこんな気持ちを持つてしまうのはいけないことなんだつてわかってます！でも、特別だなんて言われたら我慢できませんよ！玲音先生、ボ、ボクは、先生だけの“特別”になりたいです!!」

あー、勢いに任せて言っちゃったよ！先生はびっくりして固まつてるし……。え、ど、どうしよ?!なんて戸惑つてっていると、

「あ、あの、香澄さん」

「ひゃ、ひゃい！な、な、何ですか?!」

「僕が言うのも何ですが、ちよつと落ち着いてください」

「は、はい。スーハー、スーハー、……もう大丈夫です。それで、どうかしたんですか？」

「えっとですね、さっきの返事についてなんですが——」

その先は言わなくていいですよ、先生。ボクは気持ちを知ってもらえただけで十分ですから。

「僕は——」

その先を聞きたくなくて逃げ出したいけど、先生が真つ直ぐボクの目を見てきてそれを許してくれない。そして、

「僕は、いいえ、僕も香澄さんが好きですよ。もちろん、1人の女性としてです」

「……え？」

「ですから、僕も香澄さんのことが1人の女性として好きです。表立って出かけたりもあまりできないと思いますが、それでもいいのでしたらお付き合いしていただけますか？」

「……え、え？ほ、本当ですか?!で、でも、誰かにバレたりしたら……」

「その時はその時です。僕を香澄さんの“特別”にしてくれませんか？」

「は、はい。はい、はい!……うう」

先生に告白され付き合えることになった、と理解した途端、なんだかものすごく嬉しくなつて自然と涙が出てきました。なんだか恥ずかしくて、先生に見られたくなくて、体ごと反対を向きました。すると先生は、

「別に嬉しくて泣いてしまうのは恥ずかしいことではないと思いますよ。それに、僕は

もう香澄さんの恋人です。これくらいはさせてください」

と言いながらボクの前に回り込んで自分の方に抱き寄せると、ボクの頭を撫で始めました。ボクはそのまま先生の胸に頭を押し付けて思いつきり泣いちゃいました。

## 2

——数分後

「あ、あの、先生、もう大丈夫です、よ?」

「わかりました」

と言つて先生はすぐに離れてしまいました。うーん、あつさり離れられるとちよつと寂しいかも…、なんて考えていると、

「あの、香澄さん、僕たち付き合い始めたんですよ?」

「は、はい!そうですよ?」

なんて聞いてくるので不思議に思っていると、

「付き合つてからは何をしたらいいんでしょうか?なんととっても、誰かと付き合う経験なんてなかったものですから……」

「そんなの、ボクも同じですよ!本とか、友達で付き合っている子から聞いた話だと、休みの日に遊園地とかショッピングモールに遊びに行つたり、一緒に帰つたりするみたいです。……流石にバレたらダメだからできないですよね……」

「そうですね。……この学校に写真部つてあると思うんですけど、知ってますか?」

「?はい、知ってますけど、それがどうかしたんですか?」

「実は僕はその顧問でして、今月中に新入部員が入らないと廃部になると言われてしまいました……」

「そうだったんですか。でもなどうしてですか?」

「昨年度卒業した方以外幽霊部員なんですよ」

「へえ、そうなんですね。……つてもしかして」

「はい、香澄さんに写真部に入って欲しいなと思ってます。初めてだと大変だとは思いますが。それでも、放課後は一緒にいやすいですし、休日には活動の一環として2人だけで出かけることも——」

「入ります! わからなかったら教えてくれますか?」

「もちろんです」

「やった!」

流れで写真部に入ることになったけど、玲音先生と一緒にいられる時間が増えるならいつか!なんて思いながら全く終わっていないかった片付けを終わらせると2人揃って教室を出て昇降口へ歩き始めました。

「あ、そうだ、香澄さん」

「なんですか、玲音先生?」

「連絡先を交換しておきませんか？いつでも話せますし、その、付き合っているんですし……。どうですか？」

「は、はい！／＼／＼」

お互いにスマホを取り出して、連絡先を交換すると

「それでは気をつけて帰ってくださいね、香澄」

「——っ!!はい！玲音さん！」

ボクは恥ずかしくなつてすぐに靴を履き替えると家まで走つて帰つた。

——コンコン

「失礼しまーす。……玲音先生、入部届持つてきました！」

翌日の放課後、僕が職員室にいと、香澄が入部届けを持ってきてくれました。

「ああ、香澄さん、ありがとうございます。これ、写真部が使っている第2情報室の鍵です。僕は少し用事があるので、先に行って開けておいてもらえますか？」

「はい！それでは失礼します！」

そう言つて職員室を出る香澄を見送るとたった今もらった入部届けを持って教頭の机まで行くと、

「教頭、以前話していた部活の顧問の件ですが、たった今写真部に新部員が入つたので、

もう少し見送らせていただくことはできないでしょうか？」

「聞いていました。とりあえず、1ヶ月彼女のやる気を見るために様子を見ましょう。ただし、彼女にやる気がなければ……わかってますね？」

「わかっています。とりあえず、彼女を待たせているので、これで失礼します」

そう言つて職員室を出ると、第2情報室へ向かいました。

ボクが第2情報室に入つてそこに置いてあつたたくさんのカメラを見てみると、

「お待たせしました、香澄」

と玲音さんが周囲を確認しながら入ってきました。

「いえ、大丈夫です！ それにしても、カメラたくさんあるんですね」

「ここに置いてあるのは体験入部やカメラを買う余裕がない方向けに置いてあるものです。昨年度卒業された方々は個人で好きなものを買つてそれを使つていましたから」

「へえー、そうなんですね。ボクも買ったほうがいいのかな……」

「買わなくても大丈夫ですよ。ああ、でも、メモリーカードだけは買つてもらわないといけませんね。部の共有のものは置いてませんから」

「わかりました！」

「それじゃあ、活動についての相談を始めましょうか」

「はい！」

——数分後

「——では、明後日までは写真を撮る上で必要なことの簡単な説明、明後日以降は実際に撮って慣れてみましょうか。どこかわからないところはありましたか？」

「とりあえず、大丈夫です」

「わかりました。またわからないところができたらいつでも聞いてくださいいね」

「は、はい！」

「さて、今日はこれで終わろうと思うのですが、あまり遅くならないうちに帰ってくださいいね？」

「……………」

「香澄、どうしたんですか？」

「……玲音さん」

「なんででしょうか？」

「えい！」

ボクはまだ玲音と一緒にいたいなどと思って玲音さんに飛びつきました。

「つ！びつくりするじゃないですか、香澄。危ないから飛びついて来ないでくださいいね」



「えへへ、すみません、玲音さん。でも、2人きりなんだし、いいですよね？」  
なんて上目遣いで言ってみると、玲音さんはそっぽを向いて、

「……仕方ないですね。あと5分だけですよ」

と言って、玲音からもギュつと抱きしめてくれました。

そして、数分分経ったぐらいの頃に、

「さて、これでおしまいです。これ以上は本当に遅くなってしまうですよ。大丈夫ですか？」

「……はい、わかりました。また後で絶対、ゼーったい連絡しますね！それじゃー！」

「ちよつと待つてくださいい！とりあえず、このカメラを渡しておきますので、無くさないようにしてくださいね、それでは、また後で、香澄」

と、第2情報室を出る直前に呼び止められカメラを渡されました。

「はい！それじゃあ、また後で！」

と言って玲音さんに手を振りながら帰りました。

そして、翌日の放課後から、ボクは放課後になると、玲音から写真のことを教えてもらったり、お互いのことを教えあったりしました。そして、ある程度基礎ができたら、休日に写真部の活動としていろんなところにデートに行きました。その時に先生がボクの親にボクと付き合ってる宣言しちやってちよつとゴタゴタがあつたんだけど、最終的には許してくれました！あ、もちろん、写真もきちんと取りましたし、コンクールにも一応きちんと参加しましたよ？落選しましたけど。

——そして、季節は流れて春になり、ボクも高校3年生になりました。写真部もなんとか残っていて、今は新入生の部活体験期間です。写真部は部室である第2情報室で活動内容を説明するポスターと今まで撮った写真を展示しています。が、  
「なんで、誰も来てくれないのー！」

期間中に誰か1人ぐらいは来てくれるなんて期待を裏切つて誰も来てくれませんでした。  
した。

『えー、本日の部活体験の終了時刻となりました。今日で部活体験週間は終わりとなり

ます。新入生の皆さん、入りたい部活は決まりましたか？入部申請は再来週までです。忘れないようにしてください』

と、校内放送が流れ、机に突っ伏しました。そのまま突っ伏していると、

「香澄さん、今日は……その様子だと、今日も来なかつたんですね」

と、玲音さんが部室に入ってきて突っ伏してるボクを見てそう言いました。

「はい……。あ、そうだ。今年部員が入らなかつたら写真部ってどうなるの？」

「とりあえず、今年度中は残るはずですよ。今年度の入学案内に書いてしまってるので、無いです。無理がありますから」

そう言われてガバツと体を起こしていつの間にか横に来ていた玲音に抱きついて、

「そうなんだ！なら、これからもよろしくね、玲音さん！」

と仰いました。玲音さんは慌てたようにボクを引き剥がして、

「ちよつと、香澄さん！まだ、完全下校時間じゃありませんし、誰か残っているかもしれないですよ！それに呼び方だって“先生”じゃなくて“さん”になつてるじゃないですか！」

と言つてすぐに廊下まで行くと、誰もいないことを確認してほつとした様子で戻ってきました。それを見てたボクは、

「玲音さんは気にしすぎだと思ふよ？もちろん、まだ誰かはいると思ふけど、こんな校舎

の端っこまでこの時間にわざわざ来る人なんていないって。だから、いいでしょ？ね？」

「そうかもしれないませんが……」

「だめ？」

「……わかりました。でも、5分だけですよ？」

「やったー！」

玲音さんにもう一度抱きつくくと、抱きしめて頭を撫でてくれたのが嬉しくなつて玲音と顔を見合わせて、

「玲音さん、大好きだよ」

と言つてみた。すると、

「僕も大好きですよ、香澄」

と言つて、顔を近づけてきたのでびっくりして目を閉じてしまいました。そして、

「んっ」

「んっ?!……ん……ぷはっ!はー、はー、れ、玲音さん? い、いいい、今のつて、え? キ、キキキスしたんですか?!」

「すみません、ついしたくなつてしまったので。……香澄は嫌でしたか?」

玲音さんが戸惑つてるボクを見てそう聞いてきました。



いるスマホがあつた。

それから、数週間経ったある日の放課後、僕は校長に呼び出され、校長室に来ています。何も心当たりがない、訳でもないですがあのことはバレてないと思うのですが、一体なんでしょう？

「鈴風先生、これを見てもらえますか？」

そう言つて僕に一枚の紙を渡してきた。

「わかりました。つて、次回の校内新聞ですか？……え?!」

そこには、『新米教師と生徒、禁断の恋か?!』という見出しとともに僕と香澄がキスしてる写真が載っていました。

「見てもらつた通りです。鈴風先生、この記事に書かれていることは事実ですか？」

「……事実だった場合、どのような処分になりますか？」

「無理矢理迫つたのなら懲戒処分と考えています」

「無理矢理ではなかったら？」

「2ヶ月ほど減給にしましょうか。私自身は応援したいので処分なしでもいいかと思うのですが、体裁を整えないといけないので。それで、どうなのですか？」

「……事実です。僕と香澄は互いに自分の意思で付き合っています。もちろん、香澄のご両親からは許してもらってます」

「そうでしたか」

「このことを香澄に伝えてきてもいいですか？」

「もちろんです。これも持つていって大丈夫です。」

「ありがとうございます。それではしつと「あ、ちよつと待つてください」なんでしよう？」「明日の放課後この件に関する会議があると思います。もちろん出てもらわなければいけません。その時は鷹月さんと一緒に来ていただきたいです」

「わかりました。それでは失礼します」

僕はそう言つて校長室を後にし、そのまま香澄が待つている教室に向かいました。教室に入ると既に香澄がいて、

「あ、玲音さん！遅かったね。何かあったの？」

と聞いてきました。

「校長先生に呼ばれてしまいました、すみません」

「え?!ほんとになにかあったの!?!」

「実は——」

僕は明日掲示板に貼られる校内新聞に自分たちのことが書かれること、そのせいでい



ろいろ聞かれるだろうけど真面目に答えなくて欲しいこと、放課後に会議に呼び出されるかもしれないことを伝えました。

「——というわけなんです」

「ば、バレちゃったんですか……」

「はい。さつきも言ったように適当に誤魔化して貰えばいいですから」

「う、うん」

「さてと、後少ししか時間がありませんが、今日の勉強会始めましょうか」

「お、お願いします」

結局その日はあまり進められずに解散しました。

そして次の日、

「「あれ、本当?!?!」」

「うわ!驚かささないですよ!」

朝、ボクが教室へと入るとクラス全員に校内新聞について聞かれました。

「ごめんって。それで、どうなの?」

「えーつと…玲音、先生のごことは先生の中なら一番好きだよ?異性としては…考えたことないかな」

「「いやいやいや、香澄（お前）と風鈴先生がキスしてる写真まであるのに、それはないでしょ（だろ）!!」」

「だから、声揃えて言わないで！写真って合成とか出来ちゃうから信じない方がいいよ！」

「んー、合成に見えないけど……。でも、記事書いたの日下部（ひかべ）さんだしなあー」  
「その日下部さんって？」

「新聞部の副部長で、よく嘘だったり誇張しすぎてる記事書いたりしてるの。それに、元写真部で合成写真作って問題起こしたって聞いたよ」

「へえ、そうなんだ」

「っと、もうすぐ授業始まるし、また後で追及するからねー！」

「えー！もうやめてよー！」

結局、休み時間になる度に質問攻めにあつたボクは疲れ切つて部室で突っ伏しています。

「やつぱり、色々聞かれたみたいですね」

「うん……。もう疲れたー」

横に玲音さんがいつの間にか居て、そんなことを言ってきました。

「この後、呼び出されるんですの忘れてないですよね？」

「忘れてないけどさー。大変なんだったのは変わらないんだからいいじゃないですか」

「わかりますけ『先生の呼び出しをします。鈴風先生、鈴風先生。職員室までお戻りください』呼び出されましたし、行きましようか」

「はい……」

もう少しグダグダしたかったのに、と思いながらも立ち上がって玲音さんと職員室に向かいました。

コンコン

「失礼します」

「待ってましたよ、鈴風先生、鷹月さんもこちらにどうぞ」

「はい」「は、はい！」

校長が僕たちを席まで案内してくれました。席に着くと、

「さて、お二人に来てもらったのは今朝、掲示板に張り出された校内新聞についてです。

ご自身で記事は確認されましたか？」

「はい」

「では、それぞれに訊いていきましょう。まずは鷹月さんに質問します。あなたは鈴風

先生が1人の男性として好きですか？」

「……えっと」

事前に僕の気持ちは聞いていたからか、香澄に先に訊いてました。香澄が答えづらそうにこちらをチラチラと見てきたので、

「正直に話して大丈夫ですよ。」

とこっそり伝えるとコクンと小さく頷いて、

「ボクは、玲音さんの優しい所とか、公私はちゃんと区別してくれる所とかひつくるめで、玲音さんの全部が好きです、大好きです」

と、顔を赤くして言い切りました。それを見て、他の先生が驚いた顔をしている中、校長だけが何か悪巧みをしてそうな笑みを浮かべていました。僕がジーツと見ているとこっつちを見て、

「鷹月さん、ありがとうございます。では、次は鈴風先生ですね」

「……楽しそうですね、校長先生」

「そんなことないですよ。それで、鈴風先生は鷹月さんの気持ちに応えてあげないんですか？」

と相変わらずニヤニヤして言ってきました。短くため息をつくくと、

「僕も、香澄の可愛い笑顔や、素直に甘えてくれる所、明るい所など香澄の全部が好

きです」

と言いつ切りました。そして、校長が他の先生を見回して、

「さて、お互いに好きで、公私を区別出来ているのですから交際を許してもいいんじゃないかと思うのですが、先生方はどう考えますか？」

と言うと周りでヒソヒソ話が始まりました。それを確認した校長がこちらへ来ると職員室のドアを開け、

「もうそろそろ終わりますから、もう少し待つてくださいいね、日下部さん」

「え？」

「あー、やっぱりバレちゃいましたか。入ってもいいですか？」

「当事者でしようし、いいですよ。私はあちらに混ざってきますので」

「ありがとうございます。……風鈴先生、久しぶり」

といつの間にか職員室前にいた日下部さんが入ってくると話しかけてきました。

「え、ええ、お久しぶりです。写真部を退部してからは新聞部に入ったんですね。今回こそは合成だなんて言われずに済みそうですね。あ、そうでした、今回みたいに誇張したもののや嘘のものは書かない方がいいですよ。写真部の二の舞になりかねませんから」

「うっ……。わ、わかりました。それと、あの時はすみませんでした」

と頭を下げられました。

「もういいですよ。それに、あれがあつたから今があるんです」

と言つて香澄の手を握りました。

それから少しの間3人で話していると、

「結論が出ました。3人ともいいですか？」

と校長から声がかかりました。僕たちは先生たちの方を向いて背筋を伸ばしました。

「では、結論を言います。」

「……」

「鈴風先生、鷹月さん。熱りが冷めるまでは揶揄われるかもしれませんが、これからも楽しく学校生活を送ってくださいね」

「そ、それじゃあ（では）」

「お咎めなしです。では、これで職員会議を終わりました。日下部さんは今日のこゝとを踏まえて記事にするかどうかはお任せします」

「は、はい」

「では、お疲れ様でした」

「「お疲れ様でした」」

と、先生たちが全員出て行き、職員室に僕と香澄だけが残されました。

「れ、玲音さん。こゝ、これって夢じゃないよね」

「夢ではないですよ、香澄」

「これからも一緒にいられるんだよね？」

「ええ、そうです」

と言うと、香澄が抱きついてきました。僕は受け止めて抱き締め返して頭を撫でました。

数日後、日下部さんが書いた校内新聞の号外が掲示板に貼られ、それを見たクラスメイトからまた問い詰められたり、お幸せにつて言われたりでまた大変な日々が続きました。

## 最終回

あれから無事に高校を卒業し、大学に入学しました。玲音さんに聞いたところ、ボクが卒業した後誰も部員が入らなかつたらしくて廃部になったみたい。玲音さんは部活の顧問になることはなかつたみたい。それを聞いた時、首を傾げちゃったけど、玲音が、『週末とかに部活の顧問として学校に行かなくても良くなったので、すぐに会えますしいいじゃないですか』

と言うから嬉しくなつて気にしないことにしたのです。あ、そうだ。大学生になつてしばらくして玲音が住んでるマンションで一緒に暮らすようになりました。いわゆる同棲つてやつです。平日はお互い学校で会えないし、休日も高校生の頃に比べて予定が合うことも減つてしまつて残念だーって思つてたある日、玲音からどこかの鍵を渡されました。

『これ何の鍵ですか？』

『僕の家の子鍵です。最近あまり会えなかつたですし、よかつたら一緒に住みませんか？』

『え、え？いい、いいんですか？』

『いいから渡してるんですよ』





「それでは、指輪の交換をしてください」

まずは玲音さんがボクの左手の薬指の指輪をはめ、次にボクが玲音さんの左手の薬指に指をはめました。そして、

「それでは誓いのキスを」

玲音さんがボクのベールをそっと上げると、ゆっくりとキスをしてくれました。

「つ、疲れたー」

「そうですね、流石に疲れました」

結婚式が終わって、家で二人でゆっくりしています。

「ふうー。あ、そうだ、玲音さん」

「なんですか?」

玲音さんの方を向いて座り直すと、

「これからも末長くお願いします」

とにっこり笑いながら言う、玲音も

「こちらこそ、末長くお願いします」

と笑って言ってくれました。

## 孤独だった勇者の物語

## プロローグ

『霧が出る日に森に入ってはならない。もし、そのときに森に入ってしまったら戻ってこられなくなる。——』

これは俺——つるぎゆうと剣優斗がいた村に伝わる伝承の一部だ。俺が覚えているのはこれだけだが、まだ続きがあったと思う。が、長くて覚えることを諦めた。周りの人には、この伝承を覚えている人もいるが、ほとんどが信じていない。俺も信じていない人の一人だった。あの時までには……。

俺は、幼い頃に家族を事故で亡くした。そのせいで周囲に対して心を閉ざすようになった。元々友達は少なかったのだが、これが原因で、友達が減ってついにはいなくなってしまった。料理や洗濯など、並大抵のことはすぐにできるようになってしまったので、一人暮らしをしながら退屈な日々を過ごしていた。今までで興味が出たものなんて無かったから、目標や将来にやりたいと思うことが全く見つけられずに、ダラダラと毎日を過ごしていた。このまま退屈な日々を送っていくと思っていた。

そんな日常を変えたのは、ジメツとしていて曇っていた日のことだった。学校からの帰り道で俺は、森の近くを歩いていたら、少し道端で休んでいたら、視界の端で何か光った。不思議に思っただけ顔を向けてみると、森の中で光っているものがあつた。

「森にはだれもはいるはずねえのに落とす物とかあるわけないよな。……霧も出てないし、ちよつと探しに行つてみるか」

俺はそう呟いて森に入った。その瞬間、急に霧が出てきた。

「はあ、どういふことだ？ さつきまで、霧なんて出てなかつたのに……」

そう言つて振り返つてみると、道がなくなつていた。

「な、なんで、道がないんだよ？ 霧が出たからつて道が見えないなんてことあるはずねえのに……。それにしても、あの伝承つて本当だつたんだな。こうなつた以上はどうにかしてここを出ないといけねえ……。とりあえず、進んでみないことにはどうにもならないよな」

そう言つて歩き出した。

——あの伝承にはこんな続きがあつた。

『霧が出る日に森に入つてはならない。もし、そのときに森に入つてしまつたら戻つてこられなくなる。かもしれない。戻つてこられる可能性はあるが、それはそこにいる人

たち次第だ。』  
と。

歩き始めてから多分数分ぐらい経ったと思う。さすがに歩き疲れてヘトヘトになつて辟易としていたら、ついに視界が晴れてきた。

「お、やっと霧が晴れてきたか」

そういつた瞬間、ぱつと視界が開けた。そして、辺り一面の花畑が目映り込んだ。「おいおい、晴れてたときに森に入った時には、こんな場所無かつたぞ……。てことは、本当に伝承通りじゃねえかよ。さすがに笑えねえぞこれは」

俺は呆然と呟いた。

歩き疲れてしばらくブーツと座っていると、遠くから、誰かが走ってくるのが見えた。近づいてくるにつれて、姿がはつきりとしてきた。何とそれは、俺と同じぐらいの年齢の少女だった。その少女が、

「あれ、何か光ったと思つてきてみたけど、まさか、人がいるなんてね。君はどこから来たの?」

と尋ねてきた。それに対して俺は

「ん、分んねえや。俺、どうやら、ここの住人じゃないみたいだから。」

と、言った。少女は、

「てことは、別の世界から来たってこと?」

「そうなるな」

「ふーん……つて、えゝ!!もし、本当だったら20年ぶりだよ!」

と、とにかく驚いていた。そして落ち着くや否や、

「ここで話すのも何だし、とりあえずついてきて」

少女はそう言つて、俺の手を引っ張りながら歩き始めた。

「え、ちよ、急に手を引つ張るなよ！それより、どこ行く気だよ！」

俺は、そう言った。しかし少女は、

「とりあえず、来てみればわかるよ♪」

楽しそうに言った。

数分後、俺と少女はある町にいた。俺は、

「なあ、そろそろ手を離してくれねえか？いい加減恥ずかしくなってきた」

「あ、そうだね。ごめん、ごめん」

と手を離してくれた。俺は、とりあえず疑問に思ったことを聞いてみた。

「お前が連れてきたかったのはここか？」

「ん、もう少し先かな、ちゃんとしてきてね」

と言つて歩き出したので、後を追いかけた。その町にいる人は、俺を不思議なものを見るような目で見てくる。

さらに歩くこと数分、ある家に着いた。少女はノックすると、

「おーい、フィア、いるー？何か不思議な人いたから、連れてきたよ」

不思議な人言うな、と俺が思っているのを知らず、少女は言った。すると、中から女の子が出てきた。

「何だ？騒がしいぞ、ティナ……。と、後ろにいる人がそうか？初めまして。ワシは、ルカード・ファイアだ。一応この町の防衛に関する指揮を任されている。ファイアと呼んでくれ」

と女の子もとい、ファイアがそう言った。すると、少女が思い出したように、

「自己紹介がまだだったね。セシル・ティナだよ♪ティナでいいよ」

「俺は、剣優斗だ。好きな呼び方でいいぞ」

と、ティナの後に俺も自己紹介をした。

「さて、本題に入るが、ティナ、優斗のどこが不思議なんだ？」

とファイアが言う。とティナが、

「そうだったね。剣君は、どうやら別の世界から来たらしいんだ」

といった。

「なんだと!?本当か、優斗？」

「ああ、知らねえうちにここにいた。ところで、俺はどこに住めばいいんだ？」

とファイアが尋ねてきたので俺は答え、さらに聞いてみた。

「そうじゃな……。ティナ、優斗にこの町を案内するついでに少しこの世界について説明してやってくれ。住むところだが、とりあえずワシの家に空き部屋があるから、そこに泊まってくれ」



「わかった。んじや、行こうぜ、ティナ」

「うん。それじゃ行つてくるね、ファイア。夕方頃には戻つてくるよー」

と云つて、俺とティナは家を出て、町を歩くことにした。

町をぶらぶら歩いているうちにティナから、この町——ユークリウッドの周辺には、協定を結んでいる国『ノーランド』と敵対している国『ネメシアス』があることを教えてもらった。

こんな話をしてしていると、

「おーい、ティナちゃん！」

と少年が走ってきた。

「あ、レン！今ね、剣君に町の案内をしてるの」

とティナが言つた。

「俺は剣優斗だ。好きに呼んでくれ。えっと……」

「グラウス・レンです。レンつてよんでください」

「んじや、レンよろしくな」

「こちらこそよろしくです。ところで、珍しい名前ですね。どこから来たんですか？」

「あのね、レン、驚かないで聞いて欲しいんだけど、剣君はね、別の世界から来たんだ」

「そうなんですか……って、エー!？」

レンが大声を出したので、周りにいた人が全員立ち止まってこちらを向いたが、すぐに、歩き出した。ティナが慌てて、

「ちよつ、声大きいつてレン！」

と注意するとレンは、

「すみません。とりあえずここじゃ邪魔になるので、ウチの店に来て、ゆっくり話しませんか？」

「それいいね♪剣君は、それでいい？」

「ああ、こつちの食べ物の味も知れたかつたし、いいぞ」

「それでは、行きましよう！ティナちゃん、優斗さん」

そうして、俺たちは、レンの家の店『グラ食堂』に向かうことになった。

『グラ食堂』について俺たちは、三人でテーブルを囲むように座り、注文を済ませてから、この町について教えてもらうことにした。

「ところで、この町はどういうところなんだ？」

「この町は、いろいろな国と交流があつて、商業が盛んなんです」

「ついでに、ノーランドは鉾山が近いから、兵士の装備を作ることが盛んなんだ。そして、ネメシアスは海が近くて、漁業が盛んなんだ。それに、軍隊の規模が大きくて、周囲の国の侵略をしようとしてるんだ」

ここまで話をしたところで店員が来て、

「お待たせしました。ご注文の品です。では、ごゆっくり」

と料理をテーブルにおいてから去って行った。レンが、

「ウチの店の看板メニューのミートドリアです。食べてみてください」

「ま、とりあえず、いただきます。…うん、うまいな！」

「でしょ！このミートドリアは、この町で一番おいしいんだ」

と、雑談を始めてしまい、いつの間にか夕方になつていた。

「あ、もうそろそろフィアのところに戻らないといけないね。また今度ゆっくり話そうね、レン」

「もうそんな時間か。またな、レン」

「はい。では、また来てくださいね」

そう言つて俺とティナはフィアのところへ戻ることにした。

## 2

フィナの家へ戻ると、何か騒がしくなっていた。俺とティナは顔を見合わせて、

「何だいったい、どうなってるか知らないけど、とりあえず入ろうぜ」

「そうだね。何があつたんだろうね」

と話しながら扉を開けてみると、

「何!? ネメシアスが国境近くまで侵攻して来ただど!! 戦況はどうなっておる?」

「なにやら敵側に不穏な動きがありますが、現状のままでは30分は持つと思われま  
す。」

と、フィアと兵士が物騒なことを言い合っていた。ティナはおろおろしているが、俺  
は気にせず、

「ただいま、フィア……で合ってるのか? それよりも、ネメシアスが攻めてきたつてのは  
本当か?」

「お、優斗にティナか。今戻ってきたところで悪いが、ワシは用ができて、すぐにでなけ  
ればいけない。とりあえず優斗はティナの家に泊まらせてもらつてくれ。ティナ、いい  
よな?」

「私は、いいけど……剣くんはいいの?」

と、話が進んだ。俺は今日の前にいる、少しでもこの世界について教えてくれた二人に何かできたらなと密かに思っていた。だからか、

「なあ、俺もついていっていいか?」

と、言ってしまった。すると、やはりフィアとティナは驚いた顔をして、

「正気か、優斗?! しれないんじゃないぞ?」

「そうだよ!?! 何、急に言ってるの?」

と、やめるようにと暗に言ってきた。俺は、

「向こうで訳あって剣術はやってたから、自分の身は守れる。だから頼む」

「ハア、仕方ない、剣は貸す。危なくなったらすぐに逃げるのじゃぞ」

「わかった」

「とりあえず、急ぐぞ。では、行ってくる」

「行つてらっしゃーい。気をつけてね」

そして、戦場へ向かった。

数分後、戦場に着いた俺たちは明らかにこちらの軍が劣勢のようだ。

「何でこうなってるんだ? って、どう見てもあの竜が原因だよな?」

「そうじゃな？」

「なら、先にあれを倒した方がいいよな？」

「そうじゃが、やめとけ。あれは……」

「とりあえず、行つてくら」

そう言つて竜のところへ走り出した。

「つて、人の話を聞け！ハア、仕方ない。さつさと指示を出してくるか」

と言う声が聞こえた。

ものの五分で竜の足下付近についた。そこでは、

「に、逃げろー!!」「死にたくねえ!!」「グルアアアアアアアア!!」

と悲惨なことになっていた。

「ちよつと、ヤバイなこれ。とりあえず、どうにかしてみるか」

そう言つて、俺はフィアに貸してもらつた剣を抜いてみた。

「何となくしつくりくると思つたら、俺が向こうで使つてたのと同じじゃん！ま、とりあえず、斬つてみるか」

そう言つたと近づいて斬りつけた。だが、

「硬つてえな！つて、うおおおおお!!」

剣がはじかれてしまい、さらに、気づかれてしまい、こちらを踏みつぶそうとしてきた。とにかく逃げたが、石に躓いてしまった。

「痛つてえな。あ、やつちまったな」

竜の足が頭上に迫っていた。

「優斗オー!!逃げろ!!」

ファイアが叫んでるのが聞こえたが、そこで、意識が落ちた。

## 3

「お……さい、ゆ……。起きてください、優斗」

……誰か、俺の肩を揺すりながら呼んでいるのが聞こえる。声の主を確認するために、目を開けてみた。そこには知らない少女がいた。そして、

「うわ!? 誰、お前? 俺死んだの? てか、どこどこ?」

誰でも、一度は経験したことがあるであろう、いきなり目の前に人がいて驚くという状況だ。しかし、目の前の少女は至って冷静に、

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私は92代目の精霊王です」

「精霊王ねえ、呼びにくいし、れいって呼んでもいいか?」

「かまいませんよ、優斗。そういえば、質問の答えがまだでしたね。とりあえず、あなたは死んでいません。そしてここは、あなたの夢の中といった方がわかりやすいですね」

と、少女もとい、れいがそう言った。

「そうか。んで、何か用でもあるのか?」

と、聞いた。

「そうでしたね。優斗、あなたに問います、この先にさらなる困難があらうとも、生きた



「いと思いますか?」

「ああ、生きたいよ。それに守らないといけない約束があるし。」

「そうですか……ならば、力を授けましょう」

と、れいが言った。俺は、その言葉に驚いた。

「まじか?!!」

「ええ、もちろんです。来なさい、シルフ」

と言うと、新たに女性がでてきた。そして、

「私は、風の精霊シルフ。失礼ですが、精霊王、そこにいるものが新たな主ですか?」

と、開口一番に俺に訪ねてきた。

「こりや、いったいどういうことだ、れい?俺が、シルフの主って?」

「ああ、言ってませんでしたね。あなたに与える力、それは、精霊使いになることです」

「ふーん……って、俺そんな物騒なものになるのかよ?!ま、それはおいといて、なんで、風

なんだ?相手はワイバーンだろ?」

「そうです。しかし、優斗の様子からしてまず生き残らないといけないはずですよ。そし

て、煩わしいのも嫌いなはずですよ」

「その通りだけど……」

「それなら、シルフと契約してください」

「はあ、わかったよ。どうすりゃいい?」

「簡単です。今から言う言葉の後に、精霊の名前を言ってください」

「おう

「我、契約せし者。我、汝の力を欲す者。この応答に答えよ、です」

「わかった。『我、契約せし者。我、汝の力を欲す者。この応答に答えよ、シルフ!』」

すると、俺とシルフの足下に魔方陣が浮かび、強い光を放った。すぐにその光は消え去った。そして俺は自分の左腕に違和感を感じたので、見てみた。そこには、くぼみが7個と緑色の石のついたくぼみがある籠手があった。

「こりや何だ? んで、シルフはどこに行ったんだ?」

「それは、かなり珍しいタイプの精霊の籠手です。シルフならすでに石になってくぼみにはまっています」

「この石がそうなのか?」

（そうでございませぬ、優斗殿）

「うわ! もしかして、今の声はシルフか? 石になってんのに何で話せるんだ?」

と、どうやらすごいことになってきている様だ。

「契約した精霊ならば、その籠手につけてあるだけで会話できるようになっています。また、籠手が邪魔なときには消えろと念じれば、なくなつて、石が勝手に外れるように

なっています。逆に、籠手が必要なときには来いと念じれば現れるようになっていきます」

「ご丁寧の説明ありがとうございます。ところで、どうやって力を借りるんだ？」

と、一番重要なことを聞き忘れていたことを思い出した。

「そうでした」

と、思い出したように言った。

「では、力も借り方の説明をします。といつてもただ、〃力ある言葉〃を言うだけです。」

「例えば、どんなのがその〃力ある言葉〃なんだ？」

「風、竜巻、嵐などの風に関係する言葉がそうです。攻撃ならプラスと、付加なら武器とエンチャントと、拘束ならバインドと行ってくれればそれが〃力ある言葉〃となります」

「ふーん。要は使い方は多種多様という訳か」

「そういうことです。この様子なら、もう大丈夫そうですね」

と、れいが言った。俺は不思議に思い、

「そりゃ、どういうことだ？」

「もうそろそろ私の力の限界です。意識を体に戻します。どうかご武運を」

「そういうことか。なら、仕方ないか。とりあえず、死なないように頑張るとしますか」

「死なないでくださいね」

と、れいは言つて、俺の足下に穴をつくつた。

「その穴に入れば、体に意識が戻ります」

「そうか。んじゃ、ありがとな」

そう言つて、俺が穴に入つてから、れいが

「優斗、あなたは、私に最も近い存在。もしかしたら——」

俺は、そこまでしか聞けなかつた。優斗の今後が変わるかもしれないと知らずに。

「行つちやつたか。全部伝えきれなかつたな。優斗が行き着く終わりのこと」

れいは、残念そうに呟いた。

ちよつと時を遡つて優斗がワイバーンと戦い始めた頃、ファイアは、

「いつたい、何故こうなつとるのじゃ？」

と、ここの指揮官に尋ねていた。

「おそらくネメシアス軍がタイムしていると思われるワイバーンによる攻撃が開始。それにより、こちらの戦線が崩れたようです」

と指揮官が説明した。ファイアは、

「とりあえず、ネメシアス軍は何とかしてくれ。ワシは急いでワイバーンを何とかしてくる」

と言い終わると指揮官の返事を聞かずに走って行った。

ワイバーンの全体がはつきり見えるところまで来たとき、優斗がワイーンの上げている足の下にいた。ワシは、

「優斗オー!!逃げろ!!」

と、聞こえているかわからないがとつきに叫んでいた。しかし、優斗は左腕を前に突き出し、何か呟いたようだ。何をやっとするんじや、早く逃げんかと思つたが、次の瞬間、ワイバーンが後ろに倒れた。

「ど、どうなつとるのじや?あの体勢でワイバーンは倒れないはずじやが」

立ち止まって、呆然と呟いた。

目を開けると、視界が暗くなる前のままだった。左腕を前に突き出し、

「力を借りるぜ、シルフ。エアロプラスト!!」

すると、左腕の前で空気が爆発し、ワイバーンが後ろに倒れた。俺は、遠くで突っ立っているファイアへ駆け寄ると、

「なぜ、ワイバーンは倒れたんじや?それよりも、その左腕はどうしたんじや?!」

と、ファイアが詰め寄ってきて、すごい剣幕で聞いてきた。俺は慌てて、

「と、とりあえず、質問は後にしてくれ。いくらでも聞くから。それより、先にワイバーンだろ？あと、ちよつと離れてくれ。近すぎて、その……」

と、顔をそらして言った。あと数センチでキスできそうなくらいの近さだったのだ。ファイアも気づいたようで、パツと離れてくれた。なんとなく、顔が赤くなっているのは俺もファイアもそうだろう。ファイアは気まずそうにしながらも、

「あ、ああ、すまん。と、とにかくだ、質問は後でじっくりするとしよう。それよりも……」

「ああ、さつさとあいつを殺らないとな」

そう言つてワイバーンを見ると、立ち上がったところだった。

「行くぞ、優斗。」

「ああ。ソードエンチャント、ウインドウ！」

ファイアが突撃したので、俺は指を剣に滑らし、風を纏わせてファイアに続いて走り出す。やがて、武器の届く範囲に入ると、

「ハアアア！」「フン！」

ファイアはメイスで足の小指に当たるであろう部分を叩き、俺は跳んで胴を刀で横に一闪した。ワイバーンは攻撃を受けてよろめいたが、すぐに体勢を直し、俺たちを踏みつ

けようとしてくる。俺もファイアも既に離れていたもので、当たることはない。続いてワイバーンがこちらに走ってきてるが、構わず、

「エアカッター！」

俺は、足の筋に当たるように調節した風の刃を放った。足の筋が斬られて、ワイバーンが倒れた。

「ファイア、トドメを頼む」

「わかった！」

「エアバースト！」

ファイアはジャンプして攻撃しようとしてたので、ファイアがジャンプした真下で空気を小爆発させ、高さを稼げるようにする。そして、

「メテオ・クラッシュャー！」

と、ファイアがメイスを振り下ろした。ワイバーンに当たると、ワイバーンが動かなくなり、そのまま灰になって消えていった。へえ、モンスターの類いつてああいう風に消えるんだ、と思った。

ファイアがこつちへ歩いて来ていて、見た感じではお互いに大丈夫そうかなと思った瞬間、こつちに来てからいろいろなことがいつペンに起こったから、変に疲れたのだから、急に体が重くなり、意識が遠のいていった。誰かが倒れそうになっている俺の体を

受け止めながら、

「お、おい！ハア、仕方ない奴じや」  
と呟くのが最後に聞こえた。



気がつくくと、俺はどこかの部屋のベッドの上にいる。

「うーん、あれ？俺なんでベッドの上にいるんだ？——そーいや、ワイバーン倒してから覚えてねえな」

とぶつぶつ言っていると、部屋のドアが開いてティナが入ってきた。

「あ、剣君起きてたんだ……て、剣君もう大丈夫なの？まだどこか痛む？それよりも、ファイアに剣君が起きたの伝えに行かないと！」

「あ、おいって……まあ、後で聞けばいいか。相変わらず騒がしい奴だな」

ティナは、俺が起きたのに気づくと、慌てて部屋を飛び出していった。

少しすると、ティナがファイアを連れて戻ってきた。

「おお、優斗、起きたのか？具合はどうだ？」

「痛みが全くないから、問題ないな。ところで、どうして俺はここにいるんだ？つか、こゝ（じい）っ」

「ワシの家の空き部屋の一つじゃ。ワイバーンを倒した後に優斗が急に倒れたんじゃ

よ。そして、優斗をここに運んだのは、ワシじゃよ。もちろん、奴らを追い返してからじゃ」

「いや、ファイアが優斗をおぶって帰ってきたの見たときはすつごい驚いたんだよ！とりあえず、劍君をこのベッドに寝かせて治療してからファイアに事情を聞いたけど大変だったみたいだね。だけど、」

と、そこで言葉を切ると、ティナとファイアは目配せをし大きく息を吸うと、

「二つたい、どれだけ心配したと思ってるの（んじゃ）!? だいたい、三日も寝てたんだよ（じゃぞ）！」

「うっ、何か、すまん、二人にかなり心配かけたみたいで。それでも、二人して同時にし  
て言うことはないだろうがよ。さすがに傷つくぞ」

「ご、ごめん」

と言ったやりとりが終わると、ぐうううううくと俺の腹が鳴った。

「あははははははははは！」

「し、仕方ねえだろ！」

ティナとファイアは盛大に笑った。俺は、その間恥ずかしくてずつとそつぽをむいていた。しばらくして落ち着いてきた頃にファイアが、

「ふー、笑った、笑った。とりあえず、飯にでもするか。ティナも一緒に食べていくじゃ

ろ?」

「……頼む」

「もちろんだよ」

と言うわけで、お昼を食べることになったのだ。

飯を食べ終えてからファイアが、

「それはそうと、優斗、その左腕の籠手は何なのじゃ? 治療のためにはずそうとしてもどうやってもはずれないのじゃ。それに、あの時の力はなんじゃ?」

「ああ、そういう説明するって言ってたつけ。ちよつと長くなるけど、時間は大丈夫か?」

「ワシは問題ないが、ティナは大丈夫か?」

「多分大丈夫だよ。ずっとそのこと気になってたからね、早く教えて?」  
二人とも大丈夫そうなので、説明を始めた。

「とりあえず、この籠手についてだな。まあ、力の話にも繋がるけどな。これは、れいに貰ったものだ。確か、契約した精霊の力を借りるための道具なんだと」

「ちよつと待ってくれ、今、契約した精霊と言ったか? それより、れいつて誰なんだ?」  
「れいは、92代目の精霊王なんだと」

「…………え？ちよ、ちよつと、精霊王と会ったの!？」

「ああ。ワイバーンに踏まれそうになったときに急に意識が飛んでな。その時に夢の中でいいに会ったんだよ。そこで風の精霊のシルフと契約したと同時に現れたんだよ、籠手が。かなり珍しいタイプなんだよな、シルフ？」

（そうでございませう。一度に何人もの精霊を扱える道具は、籠手タイプのもだけです。例えいたとしても、二人だけです）

「ふーん。今、シルフに聞いたんだが、これは2つしかないらしい」

「それって、すごいことなんだよね？」

「そうなんだが、いまいち実感が湧かないんだよな。まあ、これで説明は終わりだな。思ったより短くなったわ。そういや、精霊王ってどういう存在なんだ？」

説明が終わったので、精霊王について尋ねてみた。

「神話上の人物だよ。全ての精霊を統率していて、この世界を創ったとされてるんだよ」  
「まあ、実在してるんだけどな」

「な、なあ、優斗は元いた世界に帰りたいたいと思つてるのか？」

今の会話に参加してなかったファイアが急に聞いてくる。

「いや、その、そんな力を持ったのじゃから……」

「帰つても、扱いが悪くなるってか？そんなのどうでもいいや。あつちには希望なん

てないから、帰る気なんてないしな」

「……え？それって何か寂しくないかな？」

ティナが俺の話聞いて、哀しそうに言った。俺は、

「そんなことないぜ？両親も親族も友達なんていうのもいなかったんだ。自活のために必要なことはすぐに出来るようになったしな。趣味ももちろん無かったから、毎日意味も無く過ごしてきたんだ」

そこまで言うと、ティナとフィアを見た。何故か、二人とも泣きそうになっていた。

「おいおい、なんでお前らが泣きそうになってんだよ。まあ、こっちに來てから、やりた  
いことが見つかったから、こっちに残るつもりだよ。こう思ったのは、二人のおかげな  
んだぜ」

と言うと、二人の頭を撫でながら、微笑んだ。その途端、二人とも耳まで真っ赤にな  
り俺の手を払いのけて下を向いてしまった。

「なんで、そんなに赤くなってるんだ？」

「な、なんでもないよ（のじゃよ）、劍君（優斗）？」

と、赤くなった理由を聞いたのだが、二人とも慌てて何でも無いと言ってきた。

しばらくして二人が落ち着いた頃、フィアが、

「優斗よ、ワシの軍を手伝ってくれぬか？」

と、俺に言ってきたのだ。ファイアがなぜ、俺を軍に誘ったのか理由を聞いておきたかったが、この世界に残ると決めた以上、どうにかして自活しなければ駄目だろうなと思っていたのだ。なら問題ないかという考えに行き着いたので俺は、

「それはもちろんいいぜ」

「そ、そうか。ならさっ「けどなファイア、なんか俺に隠してることでもあるんじゃないか？」って、な、な、何を言ってるのじゃ、優斗よ？ワシは優斗が新しい精霊王の候補の一人だからって見方にしておこうなどは考えておらぬぞ」

「ふーん、てか、俺が精霊王の候補ってどういうことだ!？」

「し、しまった。そ、それはじゃな……」

一応承諾して理由について鎌をかけてみたら、とんでもない理由が聞けた。ファイアが戸惑っている、

「ファイア、今更誤魔化すのは無理じゃないかな？」

とテイナが言う。

「それも、そうじゃの……優斗、おぬしにはまだ話していないことがあったのじゃ」

なんだか、嫌なことが始まってしまいそうな気がするが、とりあえず続きを聞くことにした。

「本当は、あの神話には続きがあったのじゃ。精霊王は百年に一度交代するのじゃが、それが一ヶ月と二週間後ののじゃ。そして、新しい精霊王のいてた国の土地が豊かになるそうじゃ」

「つまり、今のうちに味方につけておいて、ほかの精霊王の候補を倒したいってことか？」

「う、うむ。そういうことじゃ」

ファイアは少しばつが悪そうに、

「この話の後で悪いのじゃが、優斗は本当によいのか？」

と言ってきた。

「まあ、いいさ。一度決めたことを変えるのは、俺の信念に反するんでね」

「そ、そうか。ならば、これからよろしくじゃな」

「ああ、よろしくな。ところでさ、ここにずっと世話になるわけにもいかねえし、どっか住めそうなところ探してくれねえか？」

「ん、わかったのじゃ。とりあえず、安静をしばらくの間言われてるからその間にどこか探しておこう。」

と言う会話の後、ふと外を見ると空が赤くなってきたことに気づいた。「なあ、もう夕方なんだが時間は大丈夫なのか？」

「…………え？嘘でしょ（じゃろ）？」

といつて、窓の方を向いて確認していた。するとティナは慌てて立ち上がり、「やばい……早く帰らないと怒られちゃう……ふ、二人ともまたねー！」

と言つて、走つて部屋を出て行つた。そして、ファイアが、

「優斗、夕食は食べられそうか？」

と、何事もなかったように話してくるので、

「んー、このままもう一眠りするわ」

と、俺も普段通りに返事をした。

そして、ファイアがお休みと言つて部屋を出ていった。そのあと、優斗とファイアがそれぞれの部屋で笑つてしまったのはティナには内緒なのであった。

「あーあ、面白かつたわ。一体、これから何が起こるんだろうな？」

俺はひとしきり笑つて、そう呟いてから眠りについた。

優斗が起きて数日後、ワシとティナは、ある喫茶店の隅で話していた。

「あの時の優斗君の笑顔は反則だったよね」

「ああ。そうだな。普段は無愛想で少し怖い感じだからな」

「そうだよね。笑つたときは凜々しい感じとかわいい感じが混じつてたもんね」



「あの時は、何でも無いと誤魔化したのが、お前のせいだぞって言ってしまいそうだったな」

と言うと、二人とも優斗の笑顔（本人曰く微笑み出そうだが）を思い出してしまい、また顔を赤くしてしまった。

「なんか、ドキドキしちゃうよね。何でだろうね？」

「確かにな。何故じゃろうな？」

このとき、二人は気づいていなかった。同じ人を好きになってしまっていたことを……。

## 5

「よっしやー！ やつと運動が出来るぞー！……つてなるはずなのに、なんだよこの本の量は！」

「剣君、口より手を動かしてよ。精霊について知りたいなってん昨日言ってたよね？」

「それは、そうなんだけどさ……」

あれから数日後、ファイアが誰も使っていないなかった家を住めるように手配してくれた。医者にもう体を動かしてもいいと言われて喜んでいるところにファイアとティナが精霊に関する本を持ってきて今に至るのだ。

ファイアはずつと本とにらみ合っていて、こちらの話は聞いていないようだ。俺もさすがに反論を諦めて本とのにらみ合いを再開した。

しばらくすると

「あぁー……」

と、ティナが急に大声をだした。

突然、ティナが大声を出したので、俺とファイアは、

「!!ど、どうしたんだ(のじゃ)、急に!?!」

と尋ねた。ティナがある本のページを見せながら、

「これってシルフのことだよね？」

「どれどれ……ふむ。確かにシルフじゃな。ほれ、優斗も見てみよ」

「ああ。……そうだな。シルフに訊いたら分かるみたいだな」

「どうやら、精霊にはそれぞれに相性のいい精霊の居場所が何となくだが分かるらしいのだ。俺は籠手（自由に具現化が出来るらしい）を具現化させると、

（と、言うわけだ。どこにいるか分かるか？）

（分かるのはヘルフレイズですね。どうやら、北東の洞窟内にいるみたいです）

（そんだけ分かれば十分だ。ありがとうな、シルフ）

（いえいえ、これくらいはお礼を言われるほどでもございません。また用がございましたらお呼びください）

シルフと話し終え籠手を消すと、

「何か分かったのか？」

と、ファイアが訊いてきた。

「ああ。北東の方にある洞窟にヘルフレイズがいるんだとよ」

「うむ。ならば、すぐに準備をするか。どうせ止めたとしてもティナも付いてくるつもりじゃろうし」

「もちろんだよー！」

いつもの三人で洞窟に向かうことになった。

「ところでさ、剣君の籠手って本当に不思議だよね……」

と、ティナが急に訊いてきた。

「ティナ、それはここにいる全員が思ってることだから言わないでくれ」

と、言うのと籠手を具現化させる。籠手の手甲から翼のようにスロットが3個ずつ一對付いていて、その付け根にあと一つスロットが付いているのだ。コレを初めて見た人で不思議に思わない方が不思議だ。

「なんか、ごめんね」

「いいよ、もう慣れてきたし」

と言って籠手を消した。

「まあ、とりあえずさっさと準備して来いよ。俺は玄関で待つとくわ」

「うん！ちよつと待っててね（くれよ）」

数分後、玄関前に集合し、

「さ、行くか」

「おー!!」

こうして、北東の洞窟に向けて出発するのだった。

数時間後、俺たちはある洞窟に着いた。

(なあ、ここで合ってるのか、シルフ?)

(はい、この奥からヘルフレイズの気配がします)

「ここにヘルフレイズがいるらしいから仲間にしてさっさと帰って休もうぜ」

「うん！」

「……」

「どうかしたの、ファイア?森の中に何かいるの?」

「…。あ、ああ、なんでもないのじゃが、心配じゃからここに残る」

「…、そうか。頼むわ、ファイア。よーし!行くぞ、ティナ」

「うん！」

そう言つて、俺とティナは洞窟に入つて行つた。

洞窟を奥へと進んでいくと、壁の松明に何故か火が灯つた。少しして、奥に大きな空洞が見えてきた。そして、

「我は、炎の精霊の“ヘルフレイズ”なり。汝、我に何用でここに来た?」

と、空洞の奥の台座の方から声が聞こえてきた。俺は、

「大切な人を守れるだけの力を手に入れるために来たんだ！さっさと、力をよこせ！」  
と、その方へ叫んだ。

「フハハ、面白い。その力を持ちながらも、さらに力を欲するというか。ならば、汝の力を我に証明してみよ！」

「ああ、いいぜ！ティナはここにいろよ！」

と言つて、奥へ駆けていった。そして、ヘルフレイズと対峙すると、

「さあ、始めようぜ！家に帰つてさっさと休みたいんだよ」

「よかろう、さあ、来るがよい！」

俺とヘルフレイズとの闘いが始まった頃、フィアは森の中に潜んでいた追つ手(?)を捕まえて縄で縛り、追つてきた理由を問い詰めていた。

「なぜ、ワシらをつけてたのじゃ？」

「そりや、言う訳にやいかねえんだ。こちらとて、依頼者のことを軽々教えられねえんだ  
よ」

「それはそうじゃな」

「そうだ、そうだ！ノーランドの精霊使いからの依頼だなんて、教えられるかよ！」

「おい！何言つてんだよ、テメエ！」

「ひい！す、すみません…。で、でも、新しく生まれた精霊使いの調査だつてことは言つて無いですよ？」

「今言つたじやろうが……。じゃから、優斗は精霊の力を使わなかつたのじやな」

「あ……」

「おい！テメエ！さつきからベラベラ喋つてんじやねえぞ、コラ！」

「少しは大人しくしとれ」

「いてっ」

内輪もめを始めかけていた追っ手たちの頭を剣のさやで叩いた。

「さて、優斗の方は、どうなったのかの…」

と、洞窟の方を向いて呟いた。

一方、優斗に置いて行かれたティナは、

「劍君、大丈夫かな…。それに、さつき言つてた『大切な人』つて誰のことなんだろう？」

と、呟いていた。

## 6

「汝よ、先程までの威勢の良さはどうしたのだ？まさか、コレで終わりではないだろうな？」

と、ヘルフレイズが俺に尋ねてきた。ヘルフレイズの方にはあまり疲労が見えないが、俺は既に立っているので精一杯なのだ。

「こっちの風の攻撃を吸収するとか、反則だろ……」

「ククク、汝の攻撃など痛くも痒くもないわ！さて、もうそろそろ終わりにするかの。後でついてきた女二人にも同じ場所へ行って貰うとするかの」

「っ！そんなことさせてたまるかよ……。あいつらは絶対守って見せるんだ！」

と、ヘルフレイズに向かって言った。すると、俺の体が急に光って、何も見えなくなつた。

「お久しぶりです、優斗」

目を開けると、れいが俺の前に立っていた。

「ああ、そうだな。まさか、またここに来る羽目になるとはな……」



「ふふっ、今回はどうするつもりですか？」

「どうするつてもな……ただ、今の力じゃ、どうにもなんねえんだよな……」  
「となると、優斗は約束を破るつもり「んなこと、してたまるか！」ひっ！」

俺がれいの話の途中で大声を出したからか、れいがビクツとした。

「……、すまん」

「い、いえ、き、気にしないでください。今回は精霊を与えられませんが、ヒントなら教えられます。知りたいですか？」

「お、教えてくれるのか？」

「もちろんです。……私はそんな存在になってしまいましたから」

「ん、どうかしたか？」

「い、いえ、何でもありませんよ!? ヒントですが、〃力ある言葉〃の例外です」

「はあ!? あれって、例外あったのか!？」

「は、はい。あの……少し離れて貰ってもいいですか？」

「あ、ああ、すまん」

無意識のうちにれいに詰め寄ってたらしく、言われるまで気付いていなかった。俺は、れいから離れると、

「んで、その例外って何なんだ、一体？」

「普段から、力を使う際には制限がかけられているんですけど、それを外して貰います」  
「制限なんてあったんだな……。どうやって外すんだ？」

「えっとですね、いくつかの条件を満たして貰う必要があります。一つ目は、相手の攻撃を一回以上受けることで、二つ目は、相手より自分が弱いと自覚しながらも抗う気持ちを持つことで、三つ目は、一人で闘うことです。それらを満たせたとき、精霊を扱う武器が光りますので、"リミッターパージ"と言ってください。もちろん、今の優斗なら使えますが」

「了解つと、んじや、とつととあいつを「待つてくださいい！」と、どうしたんだ、れい？」  
俺が行こうとすると、れいが引き留めてきた。

「今更ですが、その籠手を何故使えるのですか？」

「ほんとに、今更だな、それ。使えるも何も、初めからだぜ？」

「それはそうですけど、でも、それでも……」

「それでも？」

「その籠手は、ここにあってはいけません！それは、この世界から転移させた物なんですから！」

「れい、それってどういうことなんだ？冗談だよな？」

「いえ、本当です、優斗。私の時にスロットが複数あった装備を持っていたのは、私を含

めて二人だけでした。私はまだ持っていますが、もう一つ——今優斗の使っているその籠手は別世界へ転移させたはずなんです！」

「そういや、こつち側に来る前に何か見たような……」

「そうですか……優斗は選ばれてしまったみたいですね、その籠手に」

「それは、どうい……」

「……とだ、と言う前に意識が遠のいた。」

「優斗、あなたは必ず最後まで残ります。そして……」

「……そこまでしか聞けなかった。」

意識が戻ると、やはり何にも変わっていないままだった。

「こつちからが本番だぜ、ヘルフレイズ！」

「ほう、その体たらくでまだ闘うと言うのか？」

「ああ、行くぞ、シルフ！リミッターパージ！」

そういうった瞬間、俺の周囲に凍てつくような風が吹き始めた。

（何故、使えるのですか?!これは王しか知らないはず……まさか）

（そのまさかだよ。さっさと終わらすぞ!）

「この力は、そうか！王よ、貴様か！こやつの中の違和感は！」

「ごちやごちやうるせえな！これ以上は時間をかけられねえから次で終わらせるぞ！」  
「フハハハハ、よかろう！来るがよい！」

「ああ、行くぜ！ニブルヘイム！」「インフェルノ！」

俺とヘルフレイズの攻撃がぶつかり、辺りが白いもやに包まれた。

しばらくしてもやが晴れると、ヘルフレイズがいなくて、ヘルフレイズのいた場所に赤い石が落ちていた。

「か、勝てたのか？リミッターオン（そういや、今回は契約とかやんなくていいのか…）」  
と眩きながら石の近くへ行き拾うと、

（ねえ、聞こえてる？）

（……誰だ？）

（ヘルフレイズだよ！）

（ほんとにそうなのか？キャラが違うすぎるんだが…）

（だって、周りからちよつとでも怖く見られて恐れられたいじゃん！）

（そんなものなのか？）

（そんなものなの！それよりも、早く帰りたいんじゃないの？）

（そうだな。それじゃ、帰るか）

(うん!) (はい!)

そう思念で話してから来た道に戻っていった。

劍君が入っていった部屋で何か爆発音が聞こえてから数分後、劍君が赤い石を持って出てきた。私は劍君に駆け寄ると、

「劍君、大丈夫なの?! その手に持つてる石つてもしかして…」

「ああ、ヘルフレイズのだよ。俺はとりあえず動けるし、大丈夫だな、うん。もう、ここでの用はねえし、早く帰ろうぜ!」

「うん! ねえ、そういえばさ、ファイアは来なかったけど、外で何をしてるの?」

「ああ、とりあえず、見たらわかるさ。先行つとくけど、道間違えんなよ」

そう言うのと、劍君はさっさと行ってしまった。私は慌ててその後ろ姿を、

「ま、待つてよく、劍君!」

と言つて追いかけていった。

出口が近づくにつれて、外の様子がはつきりと見えてきた。

「おい、ファイア…ってその人たち誰?!」

「おお、二人とも戻ったか。その様子じゃと、何とかヘルフレイズの力は手に入ったよう

「じゃの」

「おう。んで、そいつらが俺たちをつけてたのか？」

「そのようじゃよ。どうやら、土の精霊使いの差し金らしいぞ」

「ちよ、ちよつと待つて!?!つけられてたつてどういうこと?」

「そのままじゃよ、ティナ。優斗の周辺を調べとつたんじゃと。此奴らが馬鹿なおかげで訊きたかつたことは全部訊けたわ」

「みたいだな。連れてく意味もなくなつたし、面倒だから、ここで解放しとくか?」

「劍君…そこは面倒って言つたら駄目じゃないかな…?」

「いや、ティナ、こつちの情報は与えてねえんだ、いいよな、ファイア?」

「そうじゃな。もう放つて帰るか?」

「うくん…、何がいいのか分からないけど、まあ、いいよね!早く帰ろつか!」

ティナは納得しきつてなさそうだったが渋々という感じで俺とファイアが無理に納得させて、そのまま三人で帰ることにした。

翌日、俺とテイナとファイアは俺の家に集まっていた。

「ねえ、ねえ、これからどうしよっか」

「そうじゃな……当分はこちらに攻めてくる国もないじやろうから、もう少しこちらの軍を強化しておきたいところじゃが……」

「ん？なんか問題でもあるのか？」

「その、あれじゃ、資金が……の。税は変えたくないしの……」

「この国って、ほかよりも税が軽いつて噂なんだよ」

「へえ、そうだったんだな。…他の国の大会かなんかに出て賞金を貰うつてのが手っ取り早いかな」

「そうじゃが……この国の者でそんな大会に招待されるようなのがいないんじやよ」  
「そうだったんだね」

「どうしたも『剣さーん、お手紙でーす！』ったく、なんだよ」

と、毒づきながら手紙を受け取りにいった。戻ってきて毒づきながら、  
「たく、なんだよ。すまん、ちよっと先に開けさせて貰うな」

「いいよ(ぞ)」

「おう。どれどれ……こりや、タイミング良すぎだろ。まあ、これでなんとかなるかもな」  
「どうしたの、剣君。その手紙になんて書いてたの?」

「ほら、見てみるよ」

と言つてとりあえずフィアに渡して、見るように言つた。

「どれどれ……土の精霊使いから……って、なんでなんじゃ?!」

「あの人たちじゃないかな?」

「そうだろうな。ノーランドで開催される豊穰祭への招待状と、その豊穰祭の余興でする精霊使いだけのバトルトーナメントへの参加状だと。恐らく、全員集まるだろうから、今誰が一番強い精霊使いかがわかるな。しかも、賞金もそこそこに出るらしいから一石二鳥だな」

「そうじゃが、優斗はいいのか?」

「ああ、ちょうど腕試しもしたかったしな」

「そうだったんだ、それじゃ、行こ?」

「やはり、テイナも付いてくるんじゃない?」

「当たり前だよ! だつてお祭りだよ? そんな楽しいこと行かないって選択肢なんてないよー!」



「ワシはゲストで呼ばれとるし、3人で行くかの」と、いうことで3人で豊穰祭に行くことになったのだ。

1週間後、俺たちはノーランドの中心街に着いた。

「へえ、ここがノーランドの中心街か。ちゃんとした街なんだな。来るまでの道中はほとんどが森だったり、畑だったりしたから街も自然が多い物かと思ったんだが、建物も結構あるんだな」

と呟くと、

「あたりまえじゃろ。確かに、ここ以外はほとんどが自然じゃよ。毎年豊穰祭をするんじゃ、街にちゃんとした宿泊施設とかがなかったら駄目じゃろ」

とフィアに言われた。そして、

「さてと、ここに留まってるのも通行の邪魔になるじゃろうから、もうそろそろ移動せんかの?」

「は、い」

「ん。案内してくんねえか?後で俺だけ迷うとか嫌だから」

「そうじゃな。それじゃ、はぐれないようにちゃんとついてくるようにするんじゃぞ?」

「は、い」

俺たちは賑わっている街へ繰り出した。

数時間後

「「疲れた！」」

俺とティナが声をそろえていった。

「ぬしら…早すぎるぞ。あと何日かはこっちにいとかんと駄目なんじゃぞ？」

「だつて、面白い物が多くて…」

「それは最もじゃが、その調子じゃもたんぞ？」

「ティナ、フィアの言うとおりだぞ？」

俺がフィアに便状すると、

「優斗（剣君）のセリフじゃないじゃろ（ないでしょ）！！」

2人にそろって言われた。

「なんでだ？」

「だって、剣君はこっちに來てから初めてのお祭りでしょ？ちゃんと楽しもうよ！」

「ティナの言うとおりじゃな」

「そ、そんなものか？」

「「そうじゃよ（そうだよ）！！！」」

「お、おう」

フィアとティナの説得で俺も祭りを楽しむことになった。

それからしばらく三人で歩いておると、優斗が、

「……なあ、フィア、俺の集合場所ってどこなんだ？」

と訊いてきた。

「うむ……この付近じゃったはずじゃが。急にどうしたんじや？」

「いや、もうそろそろ集合時間だったはずだからさ。」

「そっか。終わったらすぐ宿に行つてね？」

「ああ、わかった。多分疲れるだろうからな。俺は行くけど、ふたりは楽しんどけよー」

と言つて、優斗は人混みに消えていった。すると、

「ねえねえ、フィア」

「何じや？」

「これからどうしよつか」

と、聞いてきた。恐らくティナも優斗がいないからつまらんのじやろ。

「祭りは始まったばかりじゃし、今日全部回る必要もないじやろ」

「！それじゃあ」

「うむ。先に宿に戻って優斗の帰りでも待つとするかの」  
「うん！」

テイナも賛成してくれたから、宿へ向かって優斗を待つことになった。

「多分ここなんだろうけど……普通の料亭じゃねえか！」

フィアに言われた場所に来てみたものの……と考えていると、

「あんたが剣優斗であつてるか？」

と声をかけられた。

「あ、ああ、そうだが。お前は「ほら、早く行くよ！もうそろそろ顔合わせ始まるからね！」つておい、話を聞け！」

「ほらほら、行くよ〜」

と見ず知らずの女の子にいきなり腕を引つ張られ、拒否する間もないまま料亭に入った。そのまま、ある部屋へ連れて行かれると、そこにはすでに四人いて、

「「「遅い！」」」

と口をそろえて言われた。女の子が、

「ごめん、ごめん。さてと、これで全員集まつたし、始めよつか、*「楽しい」* 会食を！」  
と宣言した。

「……はっ？」

俺はあまりにも急だったから、そう言ってしまった。

「えっと、どういうことだ？」

と、俺を連れてきた女の子に問いかけると、

「ああ、流石に急だったね。これからバトルーナメントのルールを決めたり、交流を兼ねてお食事会ってことだよ」

「は、はあ……」

俺はとりあえず相づちを打った。

「さてと、新入りもいることだし、とりあえず、自己紹介をしようか。ボクはクラウド、地の精霊使いだよ」

と、女の子ークラウドが言うと、

「次は私が。私はディーナ、水の精霊使いですわ」

「…シエイド。影の精霊使い」

「ワシヤ、ウルフ。岩の精霊使いじゃ」

「ぼ、僕はフォル。木の精霊使いです」

と他の精霊使いも簡単な自己紹介をした。

「最後になったが、俺は剣優斗。風のせいれ「違うでしょ、剣優斗。ヘルフレイズもいるでしょ？」な、なんでって、あいつらに探られてたんだっけ」

「そうだよ。ほら、さっさと正直に言う！皆聞きたそうだから」

誤魔化そうと思っていたが、そううまくもいかないらしい。

「つたく、分かったよ。改めて、風と炎の精霊使いだ」

と言つて少し間を置いて、

「……は？」

と俺とクラウド以外の精霊使いの声が入った。

「ほらほら、皆、闘う機会を楽しみにしようよ、ね？剣優斗♪」

とからかうような笑みでそう言った。

皆が落ち着いてきた頃に料理が来たので、それを食べながらバトルーナメントのルール説明をしてその日は解散となった。簡単に説明すると、明後日と明後日の二日間に開催され、明後日は総当たり、明後日は勝ち星の多い2人で決勝をするようだ。動けなくなった方が降参したら負けだそうだ。

楽しくなりそうだな〜と思いつつながら宿へ戻っていった。宿に着くと、

「あ、お帰り！」

と、ティナとファイアが出迎えてくれた。

「ただいま、二人とも。まだ寝てなかったんだな」

「うん。剣君が戻ってくるの待ってたんだ。明日からの予定決めたいからさ。」

「そっか。遅くなってごめんな？」

「いや、いいのじゃ。それで、予定の方はどうなのじゃ？」

と訊いてきた。

「明後日と明後日は無理だけど、それ以外の日は大丈夫だな」

「そっか。なら、まだ行っていないところ一緒に周る？」

「ああ、いいぜ？」

「やった!!」

「俺は風呂入るから先寝といてもいいぞ？」

「わかった。おやすみ、優斗(剣君)」

「ああ、おやすみ。」

そう言つて俺は浴場へ、ティナとフィアは寝室へ向かった。

風呂から出て、寝室へ行き、ベッドに入った。しばらくこの先のこと、特に精霊王はどうやって決められるのか考えていた。だが、いくら考えても無駄だなと考えるのを止めた。それから少しブーツとしてから眠りについた。



翌日俺たちは昨日行けていなかったところへ行ったり、色んな物を見て回ったりしてお祭りを楽しんだ。

—そして、

「ただいまより、余興である精霊使いだけのバトルーナメントを開催します!!」

「!!!」  
「!!!」  
「!!!」  
「!!!」

バトルーナメントが始まった。開催宣言が行われている頃控室では、

「さてと、最初の組み合わせだけど、まずはボクとフォル、ディーナとシェイド、ウルフと剣優斗って勝手に決めちゃったけど、良かったかな?…別に反対するわけじやなさそうだからこのままいくよ。その後は全員がちゃんと当たるように自由に決めてね」

「「おう!」「はい!」「了解」

と言うと、

「もう間もなく第1回戦の開始となります。出場する人は集まってください」

と、アナウンスが流れた。

「さて、そろそろ始まるけど、皆特別席で見てください」

と言ってクラウスとフォルが控室を出た。それから少ししてから残った人全員で控室を後にして特別席に向かった。

そして、その日の夜、

「はあくくく、疲れた。キツすぎるって…」

かろうじて決勝に進めた俺は宿の机に突っ伏していて、その横ではフィアとティナが嬉しそうにしながらも少し心配そうにしている。

「お疲れ様、剣君！決勝に進むなんてすごいね！」

「そうじゃ、他も中々手練れの様じゃったからの。決勝に進めただけでも誇っても良いと思うぞ？」

「まあ、そうなんだろうが、相手がな…」

俺が懸念しているのは、対戦相手のクラウスだ。あいつとは今日闘った限りでは勝てない、などと考えていると、

「その通りじゃな。どう闘うつもりなのじゃ？相性最悪じゃろ？それに、あの精霊が作っている鎧はどうするのじゃ？」

「そこなんだよな…打つ手がないわけじゃねえけど、実際にできるかどうかわかんねえんだよな」

「そっか…明日、頑張つてね、剣君」

「頑張るのじゃぞ、優斗」

「ああ、できるだけ抗ってみるよ。明日も忙しいだろうし、もう寝るわ。2人も早めに寝

るんだぞ？」

「うん！おやすみ、剣君（優斗）」

「おやすみ、2人とも」

そうやって俺は寢室に行つてベットに潜ると、すぐ眠りについた。

そして、翌日、

「ただいまより、バトルトーナメント決勝戦を行いたいと思います！とりあえず、選手入場です！最初に入場するのは、我らが精霊使い、クラウスだ！『ワアアアアアアア!!』  
続いて、異世界(?)からの新参者、風と炎、まさに異色の精霊使い、剣優斗だ！『剣君(優斗)ガンバレー!!』……さて、選手両者が入場しました。これより、決勝戦を開始したいと思います。準備はよろしいですね?…それでは、試合開始!!」

「ノーム、クリエイト。さくで、剣優斗、このままじゃ面白くないだろうし、君にハンデをあげよう」

「はっ。」

「だ・か・ら、ハンデだよ、ハ・ン・デ。そうだな…君がボクの鎧を壊せるまで攻撃しないってのはどう?」

「なめてるだろ、テメエ」

「そりゃあね、昨日ボクに負けてるからね」





…どうやら、本当にやばいみたいだ。

「さあ、来いよ、クラウス。さっさと止めてやる！」

「あははハハハハハハハハハハ！」

と、クラウスが突っ込んできた。

（つて、オイオイ……これ、どうやって止めんだ？）

俺はクラウスをいなしながら訊いた。

（そうですね…精霊（ノーム）をあの方から離れたらいいのでは？）

（それもそうだな。でも、お前たちだけじゃ足止めできねえしどうすんだ？）

（なら、ウンディーネの力を使えばいいじゃん。ここにいるし）

「それもそうだな。おい、ディーナ！」

「な、なんですか!？」

俺は変わらずクラウスの攻撃をいなしながらだったから、驚いたんだろうなと言う声でディーナが答えた。

「ウンディーネを貸せ！」

「な、何ですかの?!あなたに貸さずとも、私が『つべこべ言わずに、さっさとしろ!』は、はいー！」

そういうと、ディーナは青い石を投げてきた。クラウスと距離を取ってからそれを受

け取ると、

「あんがとな！それじゃ、力を借りるぞ、ウンディーネ！」

（扱いが荒いですね、剣さん。まあ、今回だけですよ）

（ああ、すまん。さっさと終わらすぞ！）

了承を取ってから、

「ウンディーネ、制限解除（リミッターパージ）！」

と叫んだ。すると、シルフの時とは比べものにならないくらいの冷気が吹き荒れた。

「さて、と。ウンディーネ、アイシクルロック！」

すると、クラウスの足下から凍っていき、間もなくクラウスは動きを止めた。そして、

俺は、

「お前は一回精霊なしからやり直せ、馬鹿が」

と言ってクラウスから黄色の石を外した。

目を覚ますと、いつの間にかベッドに横になっていた。

「あ、あれボクは……!! すごいえば試合は——」

「終わったぞ、お前の負けだな」

横にいた剣優斗がそう言った。



「そっか、ボクは負けたんだね。こんな事初めてだよ」

「今まで負けなしかつたんだらうから当たり前だろ」

「それもそうだね。……ありがと、助けてくれて」

「あれ以上暴走されたらあいつらが傷ついちまうからだ。それ以上でもそれ以下でもねえ」

「そっか。そんなに大切なんだね。……ボクのノーム、君に使って欲しいんだけど、ダメかな?」

「今、なんつった?」

「思わず聞き返してしまった。」

「だから、君がこれからノームを使って、つて言つたんだよ。君が持ったままなんでしょ?」

「まあ、そうだが……」

「なら、そのまま持つて行つて。おねがい」と頭を下げられた。

「わ、わかつた、わかつたから。も、もう大丈夫そうだし、行くわ。じゃあな、クラウス」  
「うん、また」

「そう言つて、俺はクラウスのいる部屋から出た。」

それから俺はティナとファイアと合流し、ユークリウッドに帰るのだった。

豊穰祭からの帰り道ファイアが、

「優斗よ、これからどうするつもりなのじゃ?」

と訊いてきた。

「どうするって?」

「だって、剣君は最有力候補のクラウドに勝ったし、精霊も3人いるでしょ?ほとんど剣君で決まりじゃん」

「ん?…あ、でもそうなるのか。そういや、選定まであと何日なんだ?」

「20日じゃよ。自分が関係してることなのじゃからちゃんと覚えておいたらどうなのじゃ?」

「はははは……すまん、すまん」

それからは他愛の無い話を宿に着くまでしていた。

その夜、剣君が寝てからファイアが、

「の、のう、ティナ」

と躊躇いがちに話しかけてきたから、

「どうしたの?」

と聞き返した。ファイアはなにか決心したようにこつちをまっすぐ見て、

「優斗への気持ちはどうするつもりなのじゃ?」

と言ってきた。

「へ?……え、ちよ、な、なんでそんなこと聞くの!?!」

「いや、優斗は恐らくこのまま精霊王になるじゃろ。その前にその、こ、告白しないのか?」

「…できればしたいよ。もし、告白してOK貰えたとして、もうほとんど一緒に居られる時間が無いんだよ!?!ファイアは嫌じゃ無いの!?!」

「それもそうじゃが、言わんと後悔する方がもつと嫌なのじゃ」

そこで会話が途切れて静寂が訪れた。しばらくしてファイアが、

「…ユークリウッドに帰ってから順番に優斗と二人きりで出かけるようにせんか？その時に告白するかどうか決めんか？2人だけで優斗との思い出作りたいじゃろ？」

と、提案してきた。

「…わかった。でも、ファイアが言い出しつぺなんだからファイアが先だよ？」

「う、うむ、わかったのじゃ。それじゃ、寝るとするかの。おやすみ、ティナ」

「うん。おやすみ、ファイア。」

そして、私たちはそれぞれの部屋に戻って眠りについた。

それから数日して、ユークリウッドに着いた。なんだかファイアとティナの様子がおかしかったが気にするなと言われたので気にしないようにしていた。

そして翌日の昼、俺が家でゆっくりしていると、

「優斗、居るか！」

といきなりファイアが入ってきた。そして、居間にいる俺を見つけると腕をつかんで、「一緒に行きたいところがあるから、ついてこい！」

と言つて立たせて連れて行こうとするから、

「ちよ、ちよつと待て、ファイア！2分、2分だけ準備するのに時間くれ！」

「そ、それもそうじゃな。外で待つとるからの」

そう言つて外に出て行つた。俺はすぐに準備をして家を出ると、

「お、来たか優斗！それじゃ、行くぞ！」

「あ、ちよい待て！」

俺が家から出てくるとすぐにファイアが歩き出したので、ついて行くしかできなかった。

数分後、近くの山の麓に来ていた。

「さて、日が暮れるまでには登り切るぞ！」

「マジかよ……まあ、いいか。ところで、ファイアは俺をどこに連れて行きたいんだ？」

「登り切るまでのお楽しみじゃ。ほら、行くぞ！」

「わかったよ」

結局目的を覚えてくれないまま山登りが始まった。

そして数時間後、日暮れの少し前に頂上に着いた。

「スゲー、眺めだな！連れてきたかつたのってここなのか？」

「いや、もう少し先じゃ」

「そうなのか？」

「うむ。こつちじゃ」

そう言つて俺の手を引いて茂みへと入つて行く。

「今から行くところは、ワシの好きな人と一緒に行きたいと思つてたところなんじゃ」  
「…は？それって」

そこまで言つと、視界が一気に開け、辺り一面の金木犀が目飛び込んできた。

「す、スゲー…てか、さっきのつて」

「ワシは優斗のことが好きじゃ」

ファイアは俺の前に出て、頬を赤くしながらそう告げてきた。

「お、俺は」

「へ、返事はまだよい！できれば早めが良いが、選定の日までにして欲しい。ただの、もう一人告白するかもしれん。…それを踏まえたうえで返事が欲しいのじゃ」

「わ、わかつた、考えとくよ。ここに連れてきてくれてありがとうな、ファイア」

「う、うむ。どういたしましてなのじゃ」

それからしばらく横に並んでその景色を眺めてから山を下りた。ファイアを家に送つて自分の家に帰つた。その夜、

「まさか、ファイアが俺のこと好きだったなんてな…もう一人つてティナじゃ…まあ、そんな訳ねえよな」

と呟いてそのまま眠りに落ちた。

そして翌日の昼、俺が昨日みたいに家でゆっくりしていると、コンコンとドアがノックされた。

「はいはい、誰ですか、ってティナじゃねえか、どうしたんだ。」

「こ、こんにちは剣君。い、一緒に行きたいところがあるんだけど、時間…大丈夫？」

「いいぞ。それじゃ、準備するからちよつと待つてくれ」

「うん！」

俺はデジャビュを感じながらも家の中に戻って準備をして外に出てから、

「いったいどこに行くつもりなんだ？」

と訊くと、

「そ、それは行ってからの楽しみね。ほら、行こ？」

と言つて俺の腕を引っ張つて歩き出したので、

「ちよ、自分で歩くから引っ張るな！」

と行つてついて行くしか無かった。

それから十数分後、俺たちは花畑に来ていた。

「ん？ん？ん？」

「そうだよ、私が初めて剣君に会った場所。覚えてる？」

「ああ。俺が丁度こっちに來た時だったな。あのときは本当に助かった」

「どういたしまして」

「……」

それから2人の間に沈黙が訪れた。ティナは少しもじもじしていたが、やがてなにか決心したように口を開いた。

「ね、ねえ、昨日フィアに告白された？」

「!?いい、いきなりなんだよ!」

「豊穰祭からの帰りにね、フィアと話したんだ。順番に優斗と出かけようって、その時に告白するかどうかはその時に決めるって」

「そうだったのか」

「うん」

「…」

「わ、私ね、初めは告白しようとか全く考えてなかったの。どうしたって時間がほとんど無いから。でも、でもね、フィアに言われて気付いたの。言わないままじゃ嫌だって。だから言うね。私も剣君が好きです!」

と俺をまつすぐに見つめて伝えてきた。そして、



「へ、返事は今日じゃ無くて良いけど、できるだけ早くして欲しいな」

「……………明日の昼、伝えたいことがあるからファイアの家が集まってくれねえか？」

「それって…」

「頼む」

「…わかった」

「それじゃ、遅くなってもあれだし、帰るか？」

「う、うん」

俺たちはそうして花畑を後にした。ティナを家に送って俺も自分の家に帰った。

そして翌日、俺はファイアの家の前に居た。

「スーハー……………よし！」

深呼吸をしてからドアをノックして、

「入るぞ、ファイア、ティナ」

「ど、どうぞ（なのじゃ）」

中に入って居間へ向かった。そこには緊張した面持ちの2人が待っていた。ファイアは、

「は、話とはなんじゃ？」

と恐る恐る訊いてきた。俺は、

「2人の告白への返事だよ」

とビクツと体を震わせて目を閉じてしまった。

「俺には2人のどっちか選べねえわ。2人の気持ち、スゲー嬉しかったし、俺も2人が思ってくれてるのと同じくらい2人のことが好きだから！」

と告げると、2人は目を開けてきよとんとすると、

「アハハハ!!」

と笑い出した。俺は急に恥ずかしくなってきた、

「な、何笑ってんだよ!?!」

と少し強めに言ってしまった。

「だ、だって、剣君らしいんだもん」

「そ、その通りじゃな。どっちかを選べんなら、どっちも選べば良いんじゃないやよ、優斗」と、少し笑いながら言ってきた。

「いやいや、そんなことして良いのか？」

「確か、本人さえ良ければ良いよね？」

「うむ！」

「と言うことだけど、剣君はどうなの？」

と、ふたりが期待の籠もった目で見てきた。俺は、

「それじゃ、フィア、ティナ、俺と付き合ってください！」

「はい！」

そうして俺は2人と付き合うことになった。それから選定の日まで3人で一緒に楽しく過ごした。

## 最終回

そしていよいよ選定の日が来た。

「そういや、どうやって選定されるんだ？」

「精霊王がどこかに候補者を集めてする…じゃなかった？」

「そうなのか。それにしても、どこかって……」

（それなら知ってますよ、優斗殿）

（そうだね）

（そうだよ。俺なら、はつきりとわかるぜー）

「…どうやら、グランディウスがわかるらしい。2人は付いてくるか？」

「もちろん！少しでも長く一緒に居たいもん！」

「わかったよ。それじゃ、行くか！」

「うん！」

そうして俺たちは選定の場へ向かった。

案内された場所に着くと、俺以外の精霊使いが集まっていた。



今度は全員が絶叫した。

それからしばらくして全員が落ち着いた頃、

「優斗、あなたは精霊王になりたいですか？」

と訊いてきた。

「ならなくても良いのか!？」

「はい。その籠手に7人の精霊を使役していたなら無理ですが、今ならまだ間に合います」

「お、俺は……」

そこで言葉を切ると、後ろに居る2人を見た。離れないでと思わせるような眼差しを向けてくる。そんな2人に笑いかけて傍に行つてから、

「俺は精霊王にならない。まだ大切な人と一緒に居たいからな」

「…わかりました。では、あなた達は元居た場所に戻します」

「ありがとうな、れい。それと、あとは残つたお前らで勝手にしてくれよ」

「さようなら、優斗」

その言葉を最後に視界が真っ白になり、気付くと元居た場所に立っていた。

「せ、優斗——」

「き、劍君ー」

ファイアとティナは抱きついて泣き始めてしまった。

「泣くなよ2人とも。帰ろうぜ？」

「うん！」

そうして精霊王を巡る俺の闘いは終わり、俺はファイアとティナと最期まで一緒に楽しく過ごした。ちなみに、次の精霊王にはディーナになつたらしい。

## 図書委員の綴る恋物語

1

パラ…パラ…。

放課後の図書室、横で彼女―桜明日花（さくらあすか）が本のページをめくる音と時計が時を刻む音だけが響いている。そして、

「もうそろそろ閉める時間ですね。準備しましょうか」  
本を閉じてそう言う。

「そうだね。もう誰も来ないだろうし」

僕―谷村葵（たにむらあおい）はそう言って彼女と一緒に図書館を閉める準備を進める。

そして、廊下に出て図書室を閉めると、

「今日はお疲れ様でした。それではまた」

「はい。また」

そう言って解散する。



これが僕と彼女の日常だ。クラスも違うし、そんなに話すこともない。でも、僕は彼女について、ある「秘密」を知っている。

それは――

「みんなー、今日は来てくれてありがとう！楽しんでいつてね！」

「「うおおおおおー！ー！」」

「~~~~~♪~~~~~♪」

スマホの中で歌っている女の子――桜花（おうか）。それが図書委員で同じ日の図書委員当番の桜だということだ。もちろん僕も偶然知ったことだし、誰にも言っていない。どうせ誰も信じないだろうから。

数日前、

「やっぱり、あの声どこかで聞いたことある気がするんだけど、どこだったかな……」

朝、学校へ行く道でそんなことを呟っていた。あの声というのは、最近になって人気が出てきたネットアイドルの「桜花」のことで、どうやら地声らしく、最近聞いた声に似ていたので気になって仕方なかったのだ。

「んー、でも思い出せないし気にすることでもないか。早く教室に行つて本でも読も」

考えていたことを振り払うように頭を振って学校に向かう足を少し早くした。

そしてその日の放課後、図書室へ一番乗りした僕はカウンターの裏に回って椅子に座ると、持ってきていた本を鞆から取り出して読み始める。僕が本を読み始めて数分したぐらいだろうか、

「谷村くん、今日も早いですね」

と声をかけられた。本から顔を上げると、桜さんが横に座ろうとしている所だった。

「この居心地がいいから。居れるならならずつと居たいくらい。そういう桜さんも早い方じゃないか？」

「私も、あなたと同じようにここが一番落ち着きますから」

そう言っつて座ると、僕と同じように鞆から本を出して読み始めた。それを見届けると僕も本に視線を戻す、が、

（ん？今の声どこかで……）

何故か桜さんの声に引っかかりを覚え、ちよつと記憶を辿る。

（んー、あれ、そういうえば桜花みたいなの……。いやいや、まさか）

何故か桜花のことが頭によぎってしまい、確認するためにスマホを取り出すと、イヤホンを挿して桜花の動画を流す。

「——ッ!!」

何をし始めたのか気になったのか分からないけど、桜さんがこちらの画面を覗き込んで、ビクつと体を震わせた様な気がしたけど、とりあえず無視だ。そして、動画を見終えてスマホとイヤホンを片付けると小声で、

「桜さん、当番が終わってから少し時間ある?」

「は、はい……」

「わかった。それじゃ、今は当番の方をきちんとしてよう」

「はい」

それで会話が終わり、本を借りたい、返したい人が来たら対応して、それ以外は静かに本を読む時間が続いた。

## 2

今日も図書室を閉める時間になりました。私と谷村くんは閉館の準備をして、お互いの荷物を片付けて廊下に出ました。いつもならそこで解散しているのですが、

「さっきの話なんだけど」

と当番中の話を切り出されました。

「はい」

「流石に学校で話して誰かに聞かれたら困るだろうし、時間が大丈夫ならどこかに寄っていかない？」

「はい。お気遣いありがとうございます」

「それじゃ、行こうか」

そう言つて歩いていく彼の後をついて行きました。

学校を出て数分、ある喫茶店に入りました。

「いらつしや——おや、葵くんじゃないか。今日はシフトじゃないはずだけど」

「こんにちは。今日はお客としてきたんだ。奥のテーブル使つてもいい？」

「うん、いいよ。注文が決まったら呼びなさい」

「ありがとうございます。さ、桜さんこっち」

「は、はい」

「どうやら、谷村くんが働いている喫茶店みたいです。同じテーブルに向かい合つて座ると、

「とりあえず、何か頼もうか。これ、メニュー」

「ありがとうございます……では、レモンティーにします」

「わかった。伝えてくるからゆっくりしてて」

「そう言つて彼は席を立つと、カウンターの方向に向かい何かを話し始めました。その様子を見て、一息つくくと、

（まさか、こんな身近に「桜花」のことを知つてくれている人がいるとは思いませんでした。まさか、声でバレてしまうとは……。ちゃんとボイスチェンジャーを使うべきだったでしょうか……）」

私が「桜花」として活動を始めたのは、ほんの1週間前のことです。私が所属している事務所から、

『顔出しできないのに声が綺麗なんだし勿体無いわね。いい機会だし、ネットアイドルとしてデビューしてみない?』

と言われたのがきっかけでした。面白そうだと思い二つ返事で受けた所、すぐにレコーディングが行われ、できたものがその日のうちに動画投稿サイトにアップされました。その日、ネットアイドル「桜花」が誕生したのです。

『歌声が綺麗』

『ボーチェン使っていないだって』

『素顔一切公開してないらしい謎のアイドル』

と言ったコメントが反響を呼びたつた1週間で人気がとても上がったみたいです。

「お待ちせ。はい、レモンティー」

と「桜花」になった日を思い返している間に、彼が戻ってきてきて私の前にレモンティーを自分の前にコーヒー、そして私たちの間にクッキーが置かれました。

「あの、このクッキーは頼んでないのですが……」

「ちよつとお腹すいちやつて……。桜さんも食べてね」

「はあ。ありがとうございます」

谷村くんが椅子に座ると、

「それじゃ、本題に入るよ」

「それじゃ、本題に入るよ」

と言うと、桜さんは体をビクツとさせました。

「桜さんって、ネットアイドルの『桜花』なんだよね？」

「……どうしてそう思ったのですか？」

「どうしてって、声と一緒にだったから」

「それだけですか？」

「うん。（本当は別の理由もあるんだけど……まあ、とりあえずいいかな）」

「……」

「……」

「……えっと、それだけですか？」

とビククリした顔でじつと見てくる。

「え？あー、うん。確認したかっただけ。誰にも言わないし、そこは安心して」

「は、はあ……」

「もしかして、秘密にしてる代わりに何か要求してくると思ってた？」

「はい。お約束なのかなと。それで、何も無いんですか？」

「んー……、うん。それじゃ、来週の金曜、図書委員当番が終わってからちよつと付き

合ってもらおうかな」

スマホの予定欄を見て「顔合わせ」と書かれている日を見て、そう言った。

「来週の金曜ですか……。すみませんその日は用事が——」

「その辺はなんとかなると思う。というか、多分同じだろうから」

「え？それってどういう——」

「いいから。それじゃ、来週の金曜図書委員当番の後ね。ちよつとこの後用事あるから、先に帰るね。ゆつくりしていいから」

「あ、お会計は」

「急に言っただし、払っとくよ。それじゃあ」

そう言つて伝票を持つて立つと、そのまま会計をして店を出る。そして歩きながらスマホを出して、ある番号にかける。

P r r r r ……

「どうも、ご無沙汰してます、葵です」

『こんな時間に電話つて珍しいわね。どうしたの？』

「来週の金曜なんですけど、彼女と一緒にいきますから」

『あら、気づいたの。わかったわ。要件はそれだけ？』

「あ、最後に。新しいのその時に持つて行きます」

『わかったわ。それじゃ』



「ええ、では」

そうして電話を切ると、

「さて、頑張らないと」

そう呟いて家へと帰った。

## 3

それ以降、何かイベントがあることもなく金曜日を迎えた。放課後、当番が終わりいつも通り図書室を閉め学校を出た。

「それじゃ、行こうか」

「先週も言ったのですが、用事が…」

「だから、それに行こうかってこと。ほら、置いてくよ」

「え、ちよつと!」

先週の約束（一方的かもしれないけど）通り、ある場所へ向かっている。

しばらく歩いて、

「着いたよ」

「え?でも、ここって私の」

「うん。桜さんの事務所」

そう、桜さんが所属してる事務所に着いた。僕がそのまま中に入ると、桜さんも少し遅れて入った。

「あら、いらつしやい。待ってたわ」

「ご無沙汰してます、社長。これ、次のデータです。確認お願いします」

「はいはい。それじゃ、聞かせてもらいましょうか。二人とも、行きましょう」

「はい」

「……………」

「桜さん、行くよ」

「は、はい！」

そうして僕たちは社長についてレコーディング室に入った。社長が中にいた人に僕が渡したUSBを渡すと中に入っていた曲を流してくれました。すると、桜さんが、

「あの、これって……………」

と社長に聞きました。

「あら？ 予定に顔合わせって入れてなかったかしら？」

「確かに入ってましたが…。え？」

「お互いに自己紹介したんじゃないの？」

とこちらに聞いてくる。

「あ、してないですね、そういえば。どちらかといえば一方的に気づいたって感じでしたから」

と言い、桜さんの方を向くと、

「コホン。初めまして、って言うのもおかしいかもだけど、作詞・作曲をしてるAoiです。よろしく、桜花」

「え、ええええ！」

いつの間にか曲は終わっていて、桜さんの叫び声だけがレコーディング室に響いた。

「つまり、オリジナル曲を提供してくれていたAoiが谷村くんで、今後曲を作るときに一緒にすることになるんですね」

「そういうことね」

「折角その人用にオリジナルの作るんだったら一緒にの方がいいもの作れそうだったし」ということ。それで、明日花ちゃんはいいい？」

「は、はい。大丈夫ですが……」

「なら、決定ね！とりあえず明日花ちゃんはさっきの曲、レコーディングしないとね」  
「わかりました」

あれから私たちは会議室で色々話しています。しばらくして、

「さて、顔合わせをして、曲も渡したし。僕は帰るね。それじゃ」

と言って谷村くんが席を立つと、そのまま部屋を出てしまいました。

「あら、帰っちゃったわね。時間も時間だし今日は解散しましょ。送っていくわ」  
「わかりました。ありがとうございます」

そう言つて2人で事務所を出ると、社長さんの車に乗ります。そして車が動き出すと、

「葵くんのことビックした？」

「はい。社長さんは知つてたんですか？」

「ええ、もちろん。ホントは顔合わせの時に合わせてビックリさせちやおつて思つてたのに。2人で一緒に当番してたなんて、こつちが驚いたわよ。……それで、やっていけそう？」

「はい。それに関しては大丈夫です」

「ならよかつたわ。もし嫌だなんて言われたらどうしようかしらつて悩んでたから」

「そうだったんですね」

「ほら、着いたわよ。月曜にレコーディングするからそれまでに覚えてちようだいね」

「はい。では、ありがとうございます。おやすみなさい」

「ええ。それじゃあね」

と車を降りた私に言つて車を発進させました。私は家に入るとお風呂に入つてそのままベッドに入つて寝ました。